

Title	民俗社会の持続と変容：福岡県篠栗町若杉の事例から
Sub Title	Continuity and transformation of folk society : a case of Wakasugi village in Sasaguri town, Fukuoka prefecture
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.76 (2013.) ,p.83- 140
JaLC DOI	
Abstract	This study examines the historical transformation of Wakasugi village in Sasaguri, Fukuoka Prefecture from the standpoint of cultural anthropology. In addition, the process of continuity and transformation of this particular folk society is discussed from viewpoints both inside and outside of the village. Wakasugi village has preserved its customs and habits through a tradition in which such knowledge is transmitted orally from one generation to the next. Folk societies that follow these customs have a long history of acquiring knowledge through typology and repetition. However, even though this society has recently become challenged by the infusion of modern thought, the market economy, and the power of media, it still maintains the social function of continuity. The reason for such continuity is its spiritual connection with Mt. Wakasugi, sacred mountain and New Shikoku Rejyō, eighty eight pilgrimage sites located in Sasaguri. In this regard, the purpose of this study is to investigate four overall aspects: 1) the strong continuous power and thought of the village, which is supported by the socio-religious system in the region; 2) the origins of mountain worship and the reconstruction of holy days surrounding the shrine and temple festivals, based on historical documents, discourses, and practices; 3) the transformation of annual festivals and new trends after the Meiji period, especially in regard to the separation of Buddhism and Shintoism; and 4) the tradition and modernization of folk society based on interactions and negotiations from inside and outside of the village. Finally, although Wakasugi village has managed to sustain its everyday-life autonomy but has gradually lost its social cohesion and cultural uniqueness. Therefore, this study also clarifies the sustainable process and illuminates the character of cultural transmission through interpretative descriptions of local context and social history of imagination.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000076-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民俗社会の持続と変容

—福岡県篠栗町若杉の事例から—

Continuity and Transformation of Folk Society: A Case of Wakasugi Village in Sasaguri Town, Fukuoka Prefecture

鈴木 正 崇*

SUZUKI Masataka

This study examines the historical transformation of Wakasugi village in Sasaguri, Fukuoka Prefecture from the standpoint of cultural anthropology. In addition, the process of continuity and transformation of this particular folk society is discussed from viewpoints both inside and outside of the village. Wakasugi village has preserved its customs and habits through a tradition in which such knowledge is transmitted orally from one generation to the next. Folk societies that follow these customs have a long history of acquiring knowledge through typology and repetition. However, even though this society has recently become challenged by the infusion of modern thought, the market economy, and the power of media, it still maintains the social function of continuity. The reason for such continuity is its spiritual connection with Mt. Wakasugi, sacred mountain and New Shikoku Rejyō, eighty eight pilgrimage sites located in Sasaguri. In this regard, the purpose of this study is to investigate four overall aspects: 1) the strong continuous power and thought of the village, which is supported by the socio-religious system in the region; 2) the origins of mountain worship and the reconstruction of holy days surrounding the shrine and temple festivals, based on historical documents, discourses, and practices; 3) the transformation of annual festivals and new trends after the Meiji period, especially in regard to the separation of Buddhism and Shintoism; and 4) the tradition and modernization of folk society based on interactions and negotiations from inside and outside of the village. Finally, although Wakasugi village has managed to sustain its everyday-life autonomy but has gradually lost its social cohesion and cultural uniqueness. Therefore, this study also clarifies the sustainable process and illuminates the character of cultural transmission through interpretative descriptions of local context and social history of imagination.

Key words: transmission, inside and outside, folk society, mountain worship, pilgrimage
キーワード: 伝承, 内と外, 民俗社会, 山岳信仰, 巡礼

* 慶應義塾大学文学部教授

1. 問題の所在

本稿は、福岡県篠栗町若杉わかすぎの民俗社会としての歴史的変遷を考察し、人々の暮らしを成り立たせてきた思考や実践の持続と変容の過程を明らかにすることを目的とする¹。民俗とは、主として口頭伝承 oral tradition によって世代を超えて継承されてきた民衆の生活様式や思考形式で、類型性や反復性を特性として持つと理解されてきた²。その実態は習慣や慣習 (custom & habit) で、英語では folklore, folkways, folklife などに対応するが、日本独自の意味合いを持つ³。民俗は、広義の民衆文化を意味するとも言える。しかし、柳田國男 (1875-1962) の影響の下に展開してきた民俗学は、現代の急速な社会変化の中で研究対象を喪失しつつあり、方法論的な脆弱さもあって学問としての存立が問われている。従来の主流であった方法は、広い地域から伝承に基づいて収集した民俗の要素を相互に比較し、差異や類似に基づいて歴史の再構成や変遷の過程を考察し、中核にある基本的な原理を探求してきた。一方、民俗を個々の要素に分解して比較するのではなく、地域の文脈 (context) を重視して個別的 (particular) に理解する方法は地域民俗学といい、民俗を生成し維持してきた伝承母体でんしょうぼたいを重視し、民衆の社会の実態を歴史学や社会学とは異なる観点から考察する⁴。しかし、伝承による歴史の再構築は文献とは異なる「もう一つの歴史」を呈示するという積極性は評価されるが推定に留まる場合も多い。伝承母体についても人間の移動が活発化して情報が加速度的に増殖・流通していく現代においては機能を衰退させた。

本稿は地域での民俗の文脈を重視して、若杉を暫定的に伝承母体と見なし、歴史的観点を考慮して考察を加えた。その理由は社会の内部と外部の相互交渉を重視するという観点に立つからである。若杉の場合は、背後にそびえる若杉山の山岳信仰と共に生きてきた古い歴史があり、江戸時代後期に篠栗に四国遍路の写し霊場が成立して重要な役割を果たすなど宗教性が濃厚な独自の地域社会を構成し、伝承の持続力は他と比較すると強い。本稿は若杉の事例研究に留まらず、基本的には民俗社会 (folk society) の研究を目指す。都市と農山村との中間にあつて自律的な地域社会 (地域共同体) の歴史的動態を探る試みの一環である。本稿はモノグラフ (monograph) の体裁をとるが、幾つかの特徴がある。第一は民俗の連続性と変化を軸にして全体の記述に一貫性を持たせようとしたことである。第二は地域社会を完結性を持ったものとせず、地域の内部と外部の相互交渉 (negotiation) の過程に注目して検討を加えている。第三は民俗の全てを扱うのではなく、民間信仰を中核に置いて、連続と非連続、変容と創造を考察した。第四に単なる記述に止まらず地元の文脈に沿った解釈的記述 (interpretative description) を試みている。急速に変動する現代にあつて、地域社会では民俗の維持が難しくなり、継承に非連続や断絶が生じ、伝承母体も崩壊に向かいつつある。しかし、単に消滅していく過去の生活の変化を記録・考察するだけでなく、変化の過程に生じる想像力や、新たに創り出される現代の民俗も視野に入れ、動態的な民俗誌の作成を目指した。最終的には民衆の想像力の社会史 (social history of imagination) を描き出すことが本稿の目的である。

以下では、集落の概要を述べて現状を把握した上で歴史を遡り、歴史叙述と歴史意識の言説 (discourse) を縁起に基づいて考察する。そして、近世・近代から現代に至る社会変動を年中行事や社会組織の変化に基づいて検討し、民俗の再生と創造を通して、地域社会の人々が生き方を再構築する方向へ向かう諸相を探求する。

2. 集落の概要

(1) 地理と伝承

篠栗町は北九州の大都市、福岡市から東へ約12キロに位置し、平野と山地の中間地帯にある。この地域は、文献上では平安時代の『和名類聚抄』⁵記載の糟屋郡の九郷のうち、「勢門郷」に遡る。中世から近世には「迫門河内」と呼ばれていた。セト（勢門、迫門）は狭まった地勢を意味し⁶、コウチ（河内）は水利慣行や社会関係で結びつく村々の集団的結合をいう⁷。篠栗町は、まさしく、山間部に広がる「小盆地宇宙」とでも呼ぶべき地域である⁸。また、篠栗町の南方の山々は、古代以来の霊峰で、特に若杉山（684m）は、密教の僧侶や修験の山林修行の地であった。平安時代初期の仏像が現存し、古堂と称する遺構があり、中世には三百坊の堂宇を擁したと言われ、神仏習合の歴史が展開してきた。

若杉山の山腹に展開する若杉の集落は、旧勢門村に属する「自然村」であったが、現在の行政区画では、糟屋郡篠栗町の若杉区⁹に所属する大字若杉である。地元の人は、本村や部落¹⁰と呼ぶ¹¹。集落の背後に聳える若杉山は、北側は篠栗町、南側は須恵町に所属する。若杉山は、JR篠栗駅付近から南方を望むと、東方に米の山（594m）、西方に岳城山（382m。高鳥居山）¹²を従え、奥になだらかに聳える山容を見せる。山頂には太祖神社（太祖宮）上宮が西向きに鎮座し¹³、主神は伊弉諾尊、右に八幡大神、聖母大明神、寶満明神、左に天照大神、志賀大明神、住吉大神の総計七神を祀る。山麓には里宮にあたる下宮があり多くの祭事が行われてきた。太祖の名称は、国土化成の神、国土人民の神の伊弉諾尊を祖神として祀ることに由来にするというが、異説もある。太祖に言及した文献の初出は『八幡宇佐宮御託宣集』（正応3年～正和2年、1290～1314）に遡る¹⁴。香椎宮や宮崎宮を通じて石清水八幡の影響を受け、宇佐八幡の信仰と混淆したと見られる。

伝承によれば、密教の真言八祖のうち第五祖の善無畏三蔵（637～735）¹⁵が養老2年（718）に若杉山を訪れて真言の秘法を修したとされ¹⁶、山上には供養塔の五重石塔がある。また、真言宗の開祖、弘法大師空海が唐からの帰朝後の大同元年（806）に留錫して寺坊を開創したと伝え¹⁷、上宮の後方には八大龍王窟があり、空海が修行中に独鈷で岩を砕いて湧出させたという独鈷水がある。この湧水は大旱魃にあっても枯れることのない霊水とされ、日照りには雨乞いが山上でなされた。山上に多くの寺坊があったことは事実だが、善無畏や弘法大師の来山は史実とは言えず伝承の域を出ない。善無畏は天台宗・真言宗共通の密教の祖師として信仰対象になったと推定されるが民衆の受容度は低い。明治以後は、弘法大師信仰を中核とし、篠栗新四国八十八ヶ所霊場の奥之院として多くの参詣者を集めてきた。

若杉山は博多から望むと朝日の昇る東方にあり、古代から山岳信仰の対象で、修験との関わりも深かった。特に、太宰府政庁の鬼門（東北）にあたる寶満山（869m）の修験とは中世以後、近世に至るまで深い関係を保ってきた。寶満山は最澄の留錫を伝え、霊峰として知られ、北九州では英彦山、求菩提山、背振山、雷山などと共山林修行者や修験の根拠地であった。英彦山修験は英彦山を胎蔵界、寶満山を順峯の金剛界、福智山を逆峯の金剛界に充てて峯入りを行った〔長野 1987: 75〕¹⁸。寶満山から三郡山（936m）、砥石山（826m）を経て若杉山、山伏谷から葛城、犬鳴山（583m。熊野峯）、首羅山（288m。白山）に至る尾根筋は、かつての寶満山修験の峯入りの道で金剛界九会曼荼羅とされた〔森 2008: 542-551〕。大峯山や葛城山の行場の名称とも共通する行場もあり、吉野・熊野の修験の影響が見られる。一方、首羅山は天平年間に百濟から白山権現が虎に乗って来朝したと伝えられ、中世には巨大な山岳寺院があり、天台系修験の根拠地であった〔江上 2012〕¹⁹。若杉山の正面には立花山

(367m)が聳え、中腹には最澄が唐からの帰朝時に船から独鈷と鏡を投げて落ちた所に開基したという立華山明鏡院独鈷寺が残る。密教と修験と山との結びつきはこの地域の特色である。

若杉の集落は、若杉山から西北(戌亥)方向の溪谷沿いの山腹に点在し、下部は盆地状で家々が集住している。平野部への出口には丸山と焼地山が聳えて狭まっており、平野部は西は乙犬、北は尾仲に接している²⁰。篠栗町の市街地から直接にショウブダカの峠を越える道を辿ると、家々が山腹から田畑へと展開する風景が展開し、景観的にまとまりをなす集落の存在を実感できる。篠栗町の中のもう一つの「小盆地宇宙」とも言える。

若杉山の山上と北西の山腹には、はさみ岩(袖摺岩)²¹、独鈷水²²、古堂²³、養老ヶ滝²⁴、蓮華岩²⁵、湯屋原(湯谷原)²⁶、中納言岩²⁷、殿屋敷²⁸、中堂跡²⁹、八大龍王窟³⁰、押石³¹、横居岩(横石)³²、ゆるぎ岩(千石岩)³³、ゲーズ岩³⁴、阿弥陀林³⁵、女人門³⁶、肥前谷³⁷、綾杉谷³⁸など様々な仏蹟や伝説の場所があって、歴史上の高僧や皇族、武将などに結びつけて語られている。岩と洞窟と水にまつわる場所が多く、自然への畏敬の念や霊性の認識がある。山の中腹には女人結界を設定し、上部は浄域と意識されていた。

(2) 生業と行政

若杉の集落は山と谷が迫って狭隘で、耕地面積は少なく、農業生産には恵まれた土地とは言えない。稲、麦、粟、芋、蕎麦、野菜(特に菜種)や果物を作り、大半は自家用である。主食は戦前までは主食は麦で、通常は米と混ぜて食べ、米だけの食事は正月・盆・氏神の祭りの日以外は、ほとんど食べなかったという。稲は栽培するが、湿気が多くて乾燥せず収穫も少ない。稲刈り後の陰干しは、西北向きの集落なので日照時間が少なく、長時間干す必要があり、下手では10日で乾くが、上手は15日かかる。稲作は手間が掛かり、正月にも稲こきをしたことがあるという。国が実施した減反政策が追い打ちをかけて、休耕田が広がり稲は作らなくなった。養蚕は昭和初期には盛んであったが、戦後は衰退した³⁹。

一方、山林資源は豊かで、高度経済成長期以前の昭和32年(1957)の時点では、国有林約100町歩⁴⁰と区有林50町歩があり、財産組合は数百町歩を有し、杉を主とする自然林が残っていた。山が浅く雑木林が少ないという。昭和30年代までは、主として山仕事と農業で生活して自給度が高かった。樫や椎を使って炭焼きをしていたが、薪炭から石油への燃料革命で消滅した。総じて、林業から農業へ重点を移し、野菜や果物栽培に転換してきた。現在は会社や役場などに勤める人が増えて農業は衰退し、都市近郊の住宅地になりつつある。

行政の変遷を概観すると、江戸時代は糟屋郡の行政機構の下で統治されていた。当時の糟屋・宗像の二郡は同一の郡奉行の治世下にあり、村内の政治は大庄屋と小庄屋が取り仕切った。若杉では辻下に居住する安河内甚十家が庄屋を世襲で務めた。明治5年(1872)4月の太政官布告第117号で、庄屋、名主、年寄などは廃止され、戸長、副戸長に改められた。明治6年4月には糟屋郡を23小区に分け、若杉は第10小区(津波黒、尾仲、若杉)所属の村となったが、明治17年7月の町村分割で若杉村として独立し村長が治めた。しかし、庄屋の権威は隠然として残り続けたという。明治22年(1889)4月に町村制が実施されて、高田、田中、津波黒、和田、乙犬、尾仲、庄、若杉の8つの「部落」が合併して勢門村となった。その後、しばらく行政改革はなかったが、昭和30年(1955)4月1日に、勢門村が篠栗町(1927年から町制)と合併し、篠栗町大字若杉となって現在に至っている。若杉の本村(大字若杉)の戸数のうち、古くからの在住者とされた家の戸数は昭和32年(1957)には54であったが、2005年に

は48となり、徐々に減少している。篠栗団地や今里団地（1997）が出来て都市化の波が押し寄せ、行政上は本村と二つの団地からなる若杉区を構成している⁴¹。若杉区の人口は1990年には、世帯数67、人口354であったが、平成23年（2011）3月31日現在では世帯数366、人口936であった。

住民構成を本村の昭和11年（1936）に遡ると、合屋22、安河内10、深沢6、三宅3、大塚2、原田2、石井、稲永、井上、仲木、大石、久保山、渋谷各1戸で、総計では52戸であった。当時の廃家は合屋12、安河内2、深沢2、三宅5、大塚5、合原、津田、湯下、宮原、長、箱島各1戸の総計32戸である〔合屋 1957: 5〕。合屋姓が一番多く、安河内がそれに次ぐ⁴²。このうち明治維新以前からの居住者は、合屋、安河内、深沢、大塚、三宅、石井、津田、合原であるという。平成20年（2008）現在、合屋24、安河内12、深沢5、三宅2、大塚2、石井1、原田1、稲永1の48戸が若杉山の管理を行うことを目的とした霊峰会の会員で、本村の運営を担っている。若杉の本村では、合屋と安河内の二つの系統の家筋が社会組織の中核にあり、行政と祭祀の双方で様々な役職についてきた。特に霊峰会の会長は、常にこの二つの家筋の者が務めていて、社会統合の要になっている。霊峰会は実質的には地縁集団の組織である。

(3) 寺院と集落

若杉山の歴史は、平安時代初期に遡る。現在の若杉の集落は中世には右谷（篠栗町）と呼ばれ、反対側の佐谷⁴³（須恵町）と対をなしていた。右と左の由来は明らかではないが、寶満山から若杉山へ向かう峯入りで来た場合の地形認識とは対応する。右谷の中腹にあった若杉観音堂の千手観音像⁴⁴と佐谷の観音谷にある建正寺観音堂の十一面観音像は、共に平安時代初期の造像で⁴⁵、観音信仰が基底にあった。右谷の向ノ山出土の保安元年（1120）銘の経筒と血書法華経を納めた應安8年（1375）銘の経筒⁴⁶や、佐谷の建正寺背後の経塚出土の天治2年と3年（1125・1126）銘の経筒が信仰史を物語る。天治3年の経筒には「宋人馮榮」「弟子鄭」と中国人名が刻まれ、上宮には宋風獅子⁴⁷が残るなど中国との関係は深い。また、佐谷には正中2年（1325）銘の板碑「法華経壹万部読誦成就結願石碑」が残り、大日、釈迦、阿弥陀の種子が刻まれ、碑文に「有智山寺末寺、佐谷山賢聖院」とあり⁴⁸、寶満山の天台宗寺院の有智山寺の末寺と明記されている。

『縁起』（後出史料2、史料3）によれば、西武天皇の御代に延年寺太祖山三蔵院という宮寺が建てられ、右谷には石泉寺東北院を総称とする堂宇があったとされる。ただし、石泉寺の名称の初出は千手観音像の台座板に墨書された明德3年（1392）の書付である。一方、佐谷は建正寺西南院を総称とし、院主坊をはじめ多くの堂宇があったという。最盛期には両谷に三百坊を数えたと伝える。また、史実か否かは不明だが、縁起によれば、貞和3年（1347）三月に一山の衆徒等の間に法論が巻き起こり左谷右谷が相互を敵視して戦さとなり、猛火が全山に及び寺坊伽藍一字も残さず灰燼と化し、僧徒は離散したという。その後、元亀天正年間（1570-1592）に、高鳥居城の落城の戦さに巻き込まれて衰退したとされる。天正年間（1573-1592）の争乱は史実であり、城址跡に当時の名残が窺える。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの後に、黒田長政が筑前国主となり、右谷の荒廃を悲しんで、寶満山（竈門山）の亀石坊宥弁に命じて当山に住ませ、廃寺になっていた石泉寺を再興させて、座主職の石井坊とし⁴⁹、真言宗から天台宗に改めたという⁵⁰。石井坊は一坊のみの修験で、若杉山太祖宮の別当寺として奉仕し、下宮の山王社の維持にもあたった⁵¹。石井坊は、正式には、寶満山寶印寺楞伽院（聖護院末）に属し、表槽屋郡総社若杉山太祖宮の社務別当を務め、槽屋郡と宗像郡の竈門派修験の

触頭ふれがしらであった〔森山 1986: 31〕⁵²。石井坊が記した『葛城峯中花供案内』(文化9年(1812))によれば、寶満山修験の3月・4月の春の峯入りは、寶満山から佐谷を通り、若杉山(太祖山)を経て山伏谷へ、葛城嶽、首羅山、熊野嶽(犬鳴山)に至り、里に出て綾織宮・香椎宮・筥崎宮、福岡城を経て戻る修行であった〔森 2008: 542-599〕⁵³。首羅山までは金剛界九会曼荼羅の峯で、佐谷を寶波羅密(谷山童子)、太祖嶽を寶生仏(分杉童子)とした。拜所には仏菩薩に仕える護法童子も祀られていた。修験は山々を仏菩薩の顕現、あるいは神仏が住まいする霊地と見なし、山中での修行を重視した。石井坊には慶長2年(1597)から明治30年(1897)に至る548点の文書史料が残り、近代に至る変遷が示されて、中世後期以来の修験の由緒が偲ばれる。江戸時代には、右谷と佐谷は寶満山と深い関係にあり、相互の社会的な繋がりが深く、通婚も盛んに行われていたという。若杉(右谷)に多い合屋姓の人々は佐谷にも住んでいて、双方の谷筋の有力者である⁵⁴。

(4) 篠栗霊場との関係

江戸時代の後期には篠栗新四国霊場ささぐりしんしよくわいじょうが成立し、若杉山は札所に含まれなかったが、弘法大師留錫るしやくの地として多くの巡礼者や参拝者を集めることになった。篠栗霊場の発祥は、享保7年(1722)に平井勝幸が霊窟を求めて供養を営んだのが始まりとされ、霊場として知られるようになった。天保6年(1835)3月に早良郡姪浜(福岡市西区)の尼僧の慈忍が弘法大師の霊跡を訪ねてきて、城戸の平家岩の洞窟⁵⁵に草庵を営んで滝修行をし(現在は南蔵院境内)、里人に弘法大師の教えを説いて霊徳を得て、当地に新四国八十八ヶ所の草創を發願し、浄財で十八体(一説には二十体)の仏像を刻して城戸に安置したことに始まるとされる⁵⁶。別の伝承では四国遍路を終えての帰路に篠栗を通りかかると当地では疫病がはやっていたので滝行をして平癒を祈り、霊場の開創を決心して着手したという。古仏(天保仏)を祀る古堂から初めて、徐々に札所が城戸を中心に整備されていった。慈忍は志半ばで何らかの事情で失踪した(死亡説もある)。その後、田の浦の藤木藤助ふじきとうすけが、若杉の修験、石井坊賢貞けんていに師事する傍ら、嘉永3年(1850)から篤志家の浄財を集めて仏像を刻み、安政2年(1855)に自ら四国を巡拝し、持ち帰った砂と共に仏像を祀って霊場を完成したと言う⁵⁷。これによって、弘法大師礼賛や仏蹟再興の機運が高まり、霊場の整備と共に若杉山の歴史が見直され、巡礼の中に組み込まれた。篠栗の霊場は、明らかに本四国に対する新四国だが、ウツシ霊場の性格は多義的であり、「移し」(移動)、「写し」(模倣)、「映し」(類似)の作用を通して土着化して、幕末期には地域社会に定着していた。

しかし、明治維新の神仏分離政策により、篠栗新四国霊場は廃仏毀釈で大きな打撃を受け、明治19年(1886)には県令によって霊場の寺院やお堂の廃棄が命じられて危機に瀕したとされる⁵⁸。これに対し、篠栗村では明治31年(1898)7月13日に、霊場維持を目指す「金剛会こんごうかい」が、有力者の藤喜一郎と内川愛道を相談役、藤木喜八郎と桐生源四郎を幹事として発足した〔西 1982: 71-72〕。そして、高野山の真言宗大本山金剛峯寺と交渉して、千手谷にあった南蔵院の寺格の移転を請願し、霊場の総本寺として迎えて、八十八ヶ所の堂宇境内を南蔵院の飛び地仏堂・飛び地境内として寺院の形態を整え、明治32年(1899)3月に正式に認可を得て、危機を乗り切った〔西 1982: 75〕⁵⁹。同時に初代住職として林覚はやしかく運を迎えた。若杉でも明治以降、太祖神社を主体とする神道化が進み、社寺は再編を余儀なくされたが、篠栗霊場の再構築以後、若杉山は明確に篠栗霊場の奥之院と位置付けられ、篠栗との関係を深めて民衆の信仰を維持した。明治時代には、善無畏や弘法大師の伝承に因んだ場所に、金剛頂院や養老寺やうらうじ明王院など真言宗の寺院が再興・創建されるなど新たな復興運動も起こった。篠栗霊場の開創には、女

性の行者と、修験の石井坊の弟子という男女の民間宗教者が尽力した。民間では巫覡が外来の仏教などの受容基盤になっていたのであり、若杉奥之院、金剛頂院、明王院の成立も類似した経過をたどっている。

(5) 森と水

若杉山の西北上部は杉の自然林の森で、樹齢数百年の杉が鬱蒼と茂り、幾つかの樹木は神木として崇められている⁶⁰。太祖神社の縁起⁶¹（後出史料2、史料3）によれば、神功皇后が朝鮮出兵に際して、神木の杉の枝を鎧の袖に挿して、神の加護を願った。戦さは流血に至らずに勝利を取って目出度く凱旋し、生色を失わなかった杉の枝を香椎宮^{かしいくう}の脇に植えたのが茂って綾杉と呼ばれた⁶³。この分け植えの故事に因んで「分杉山」と名づけ、後に「若杉山」となったとされる。若杉山の樹木の伐採は禁忌であったが、大内義隆は慣行を追認する形で、天文13年（1544）に、太祖山での乱暴・狼藉や「竹木採用」、特に神木の「杉樹」の伐採を固く禁じ、違反すれば厳罰に処するという禁令を出している（『大内義隆下知状』）。筑前国は天正15年（1587）から慶長5年（1600）まで小早川隆景とその子の秀秋が統治したが、秀秋は秀吉の朝鮮遠征に際しての軍船製作のために神木を乱伐したので、神罰を受けて病いを得たという伝承が残る⁶⁴。慶長5年に、新たに筑前国の統治を任せられた黒田長政が杉を補植したと伝える。若杉山は藩の統制下にあり、樹木は伐採を逃れて、現在まで多くの自然林を残すことになった⁶⁵。若杉集落では肥槽を作る時には檜材を使用し、杉材を用いないなど、杉は特別な由緒を持つ神木で、愛着を持って守り育ててきた。

また、右谷は、江戸時代には「藩主鹿狩」を行う藩主指定の禁猟区であった⁶⁶。そのため、鹿が繁殖して食餌をあさり、里方に出て作物を食い荒らしたので、農民は「鹿追番人」を置いて防いだが捕獲は出来なかった⁶⁷。結果的に、若杉山の森は、樹木の伐採禁令や動物の捕獲禁止によって、動植物の生態環境が長く保たれてきたと言える。

若杉山は、山麓に流れ下る若杉川の水源（水分）である。山からの水流は、糟屋郡（勢門、篠栗、大川、仲原）の田畑の灌漑水として使われて農業生産を支えてきたが、水量が豊富というわけではない。水不足の時には山頂の八大龍王窟で雨乞いの祈願が行われ、明治・大正に入っても継続した。若杉山の東方に聳える米の山の名称の由来も豊作祈願に因むと思われる⁶⁸。西北の支脈上に「五穀神」が村を見下ろすように祀られていた。水系は、米の山からの流れと、若杉山に発する養老ヶ滝からの流れが、集落の上部の「押石」で合流して押石川となり、更に若杉観音堂（現在は消滅）の前で、高鳥居山に発する別所谷川と大谷川が合流し、更に下部で押石川と合流して西浦池に下る（図1）。観音堂は若杉水系と高鳥居水系の「合流点」近くにあり、水と観音とは関連が深かった。押石川の谷を隔てて対岸の上に、修験の石井坊が居住し、女人門も付近の一瀬屋敷にあったとされる（図2）。江戸時代末期から明治初期の状況を伝える『郷社太祖宮境内見取図』（図3）には、観音堂の下手の川の「合流点」に女人門跡とある。明治31年（1898）の『大日本名所圖録・福岡縣之部』（大阪大成館編纂）に掲載の銅版画『太祖神社全景之図』（図4）には観音堂は「女人堂」と記されている〔清水 1898〕。女人結界がこの付近に設定され、ここから上部を聖域とし女性の入山を禁じたと推定される。女人結界に関しては、若杉山の縁起にも記載されているが、確実な史料はない。中堂とされた高尾の薬師堂は上手にあり、上部と下部の境界の意識が強い。五穀神は明治32年（1899）4月に山上から降ろされて、高尾の薬師堂の近くに祀られている。この付近は集落の中腹にあって信仰の核心部である。観音堂の西北は殿屋敷といい、



図1 若杉の集落とその周辺 (昭和11年・1936) [合屋 1957: 5]

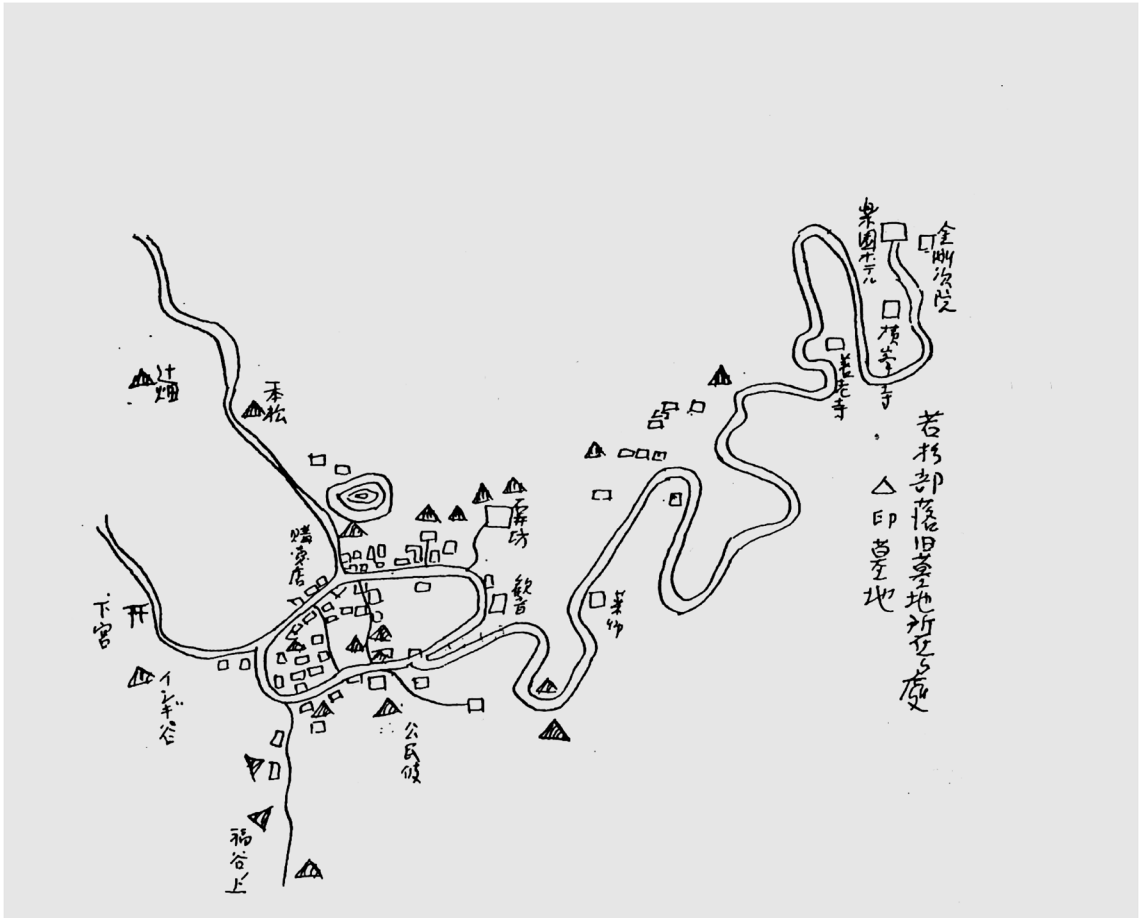


図2 若杉の集落の中心 [合屋 1957: 98]

高鳥居城の落城後に、城主であった杉弾正^{すぎだんじょう}の落武者が住み着いたと伝える。殿屋敷は谷を隔てて石井坊と対峙して、集落の西南に武士、東北に修験が、川を境界として住み分けた構図となり、近世初期の集落の成り立ちが立地に投影していると推定される。

別の水流としては、高鳥居山の支脈に水源を持つ福谷川^{ふくたがわ}とイシギ谷川があり、下宮の側で合流して乙犬に入り、山の鼻で篠栗川と一緒に成り、中流で砥石山^{といしやま}を水源とする多々良川と合流して海へ下る。下宮も観音堂と同様に「合流点」にあり、根源には水の信仰がある。一方、浦田川は米の山の中腹に源を發して浦田溪谷から庄部落へと流れるが、奥行きが浅くて急傾斜のために保水力が弱いという。若杉山は保水性に乏しく水利には恵まれなかった。沢水から樋を引いて導いたり、井戸水を利用するなど、用水には常に不安定さがあった。そのために溜池が作られ、自然水と雨水を大谷池、イシギ谷池、肥前谷池、浦田池^{しげんた}という四つの池に集めて利用した。山麓の肥前谷池は天保5年(1834)、浦田池は慶應2年(1866)の築造で、旧村で言えば、勢門、篠栗、大川、仲原の水源となっていた。江戸時代池の水は部落で管理し、「彼岸から彼岸」まで水をとると言われ、農耕期の春から秋まで水の管理を行った。特に

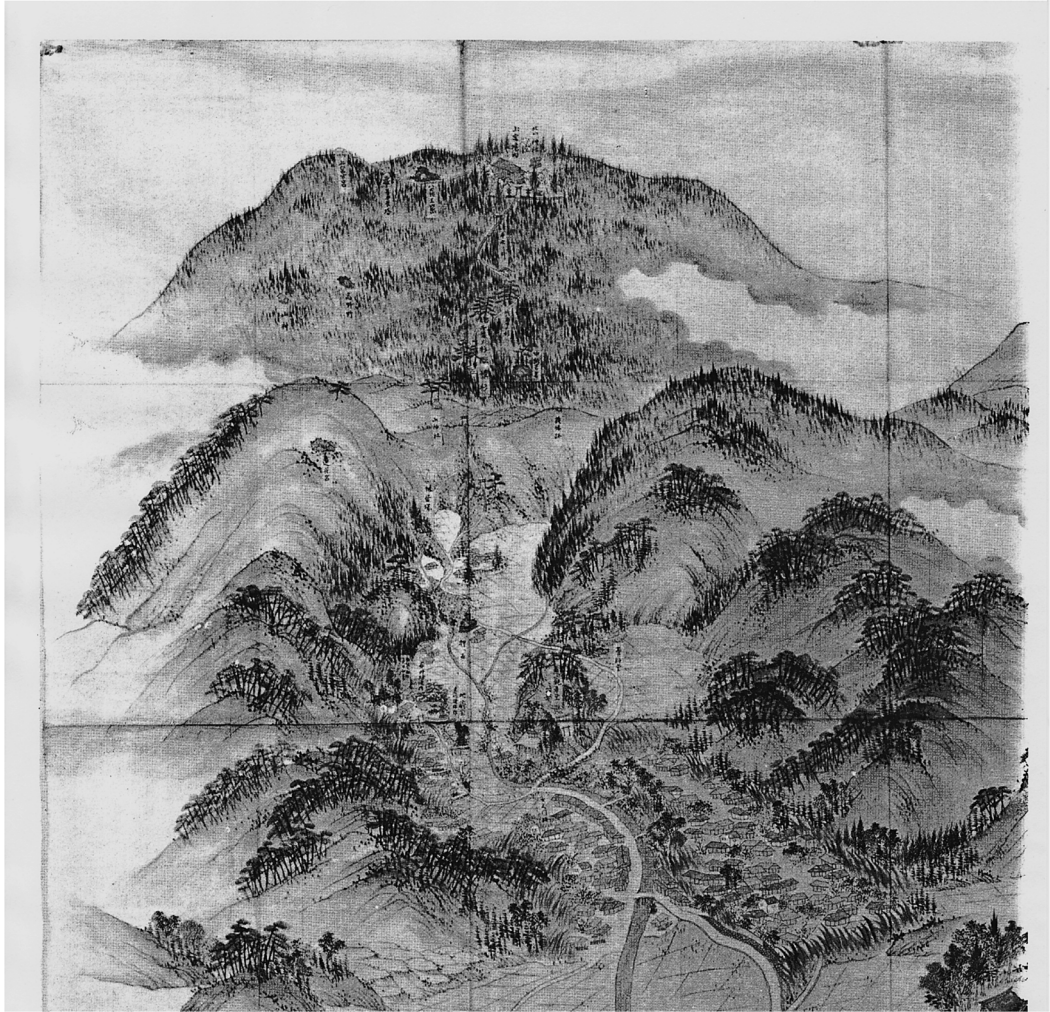


図3 郷社太祖宮境内見取図【『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』1986: 4】

田植え後の水を必要とする時期が渇水になった時は、水を管理する「池守」が絶対的の権力を持って差配し、更に郡奉行とおおじょうやが管理を統括した。現在は農事組合長が中心となり、水利委員へ権利行使を委ねて管理している。森と水は「霊峰若杉」の根源にある。

2. 歴史叙述と歴史意識

(1) 寺院の開基伝承

「霊峰」若杉山に祀られる太祖神社（太祖権現）について、その由来を説く縁起や地誌の内容を検討し、縁起に表れる歴史叙述と歴史意識の諸相を考察する。縁起は自らの歴史を正当性や正統化によって構成する言説であり、書き手の権力作用も含みこまれている。大きな流れは、縁起の歴史化であり、偽史の真史への転換である⁶⁹。

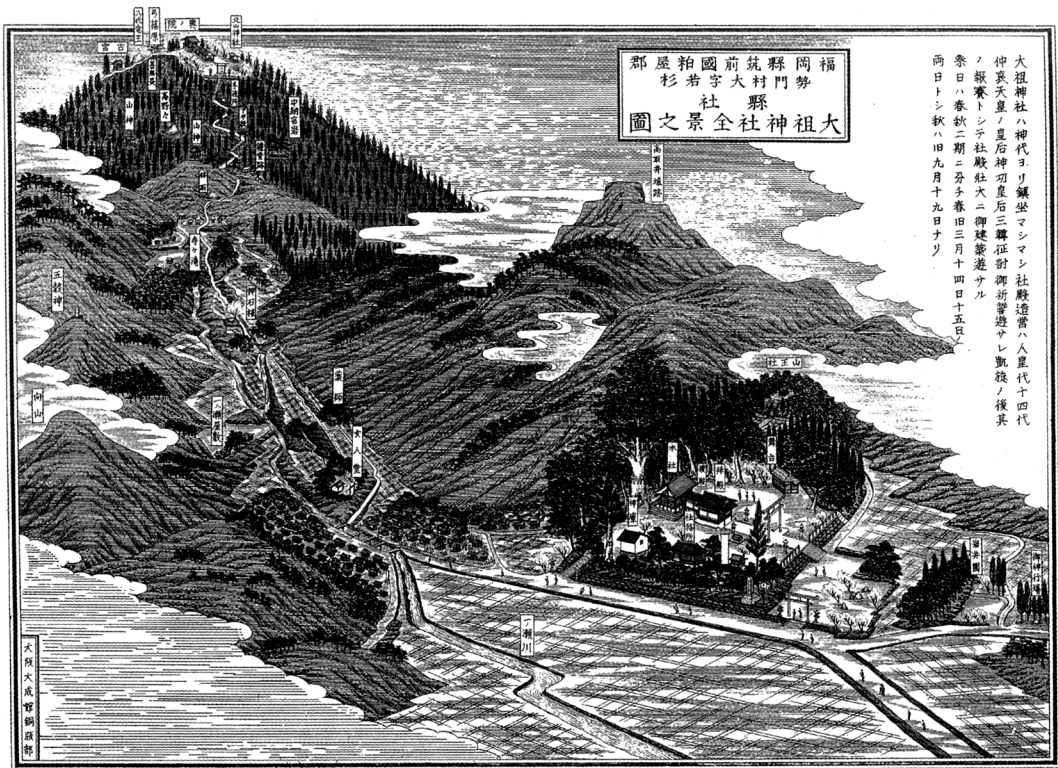


図4 太祖神社全景之圖（明治31年・1898）[清水 1898]

最も古い縁起は、『筑之前州粕屋郡大祖大権現宮記』（慶長2年（1597）。史料1）で、奥書に「右谷山東北院石泉寺衆徒宥弁謹誌」とあり、黒田長政が石泉寺を寶満山の修験、亀石坊宥弁に命じて再興させた時の縁起とされるが、長政が筑前国主となったのは慶長5年（1600）以後で、縁起に宥弁謹誌として記す慶長2年とは食い違いがある。仏教の教理を用いて後世に書いたと推定され、修験の影響もある。主な内容は以下の通りである。

- ① 大祖山は金剛界・胎藏界の両部の曼荼羅で、両部不二の峰である。左谷を胎藏界曼荼羅、右谷を金剛界曼荼羅とする。両部の峰、両界嶽ともいう。
- ② 地主は北山大明神、地神第二代天忍穂尊で、国土擁護、下化衆生、和光同塵の相を示す。
- ③ 景行天皇の御宇、神託で宮柱を両界嶽の神野埜に立つ。異域の夷賊を征伐して鎮護した。
- ④ 元正天皇養老2年（718）、密教第六祖で天竺の善無畏三蔵が、仏法の弘通を志して日本に渡海した。海上で風浪が高まった時、智拳印を結び観念を凝らし一心に祈ると、船中で神野埜嶽の地神が出現して風を鎮め、八大龍王も現われ龍頭に乗って無事に上陸した。
- ⑤ 善無畏は、上陸後に峰に登って精舎を営み、山の神霊を祀った。神野埜嶽は両界嶽からは北山にあるので、北山大明神として崇めた。八大龍王を岩窟に祀り龍王窟とする。
- ⑥ 善無畏は、曼荼羅院を住院とし三国伝来の千手千眼像を守護として置く。密教經典や曼荼羅を置き一山を石泉寺と名づけ、十三大院と十三宝坊を開基して十三仏を安置した。

- ⑦ 院坊は明王院、曼珠寺、行願院、瑠魔寺、慈尊院、高雄寺、普門院、月光院、瀧本坊、靈巖坊、灌頂院、勝泉院で、高雄寺は薬師を祀ると温泉が湧出した（湯谷原の由来）。
- ⑧ 平城天皇大同元年、空海が山に登り、善無畏を密教の大祖に因み大祖大権現として神祠に祀る。百八の僧坊、講堂、金堂、法塔、宝蔵、鐘楼、経蔵、温室、食堂を作る。
- ⑨ 結界清浄の道場として女人の登拝を許さず、一ノ瀬に楼門を作り女人門とする。
- ⑩ 空海は金剛頂院を庵として三密瑜伽の行を懈怠なく行い、毎早朝に山頂に登り關伽加水を捧げた。これが独鈷水の遺蹟である。治国利民、四海安恭、万民豊樂を願った。
- ⑪ 嵯峨天皇弘仁5年（814）4月、最澄が密教擁護のため当山に登って120坊舎を創建した。空海と心を一致させた。同9年10月7日に聖忌を迎えて祭日とする。この日、神輿を出して祭礼と流鏑馬を行う。曼荼羅供を執行し柿などの果物を供えた。祭供の始まりで、祠を建てて祀った。祝園（祝始、馬場園）の祭礼は継続し、刺史や郡司が崇敬して糟屋郡の三百町を寄進し、毎年10月7日の祭りでは、息災増益を願い、群集が参集した。
- ⑫ 貞和3年（1347）3月に兵火で諸堂僧坊は残らず焼失し、僧侶も分散した。
- ⑬ 曼荼羅院の鑊海法印と石井坊の寶因僧都が留まり、草庵を結んで仏事を勤修してきた。

本縁起の内容の要点は以下の通りである。山を曼荼羅とし、金剛界と胎蔵界の金胎一致の両部の峰とする。地主神は神野埜に鎮座する北山大明神で神託で社を建てた⁷⁰。密教の祖師の善無畏が渡海中に北山神が出現して加護したので山上に祀り、八大龍王も龍王窟に祀る。善無畏は曼荼羅院に住み、一山を石泉寺と名づけ、十三院坊を開基した。空海が山に登り、善無畏を大祖大権現として神祠に祀り、百八の僧坊などを整え、女人結界を設けて修行場とし、金剛頂院を庵として山上で關伽行を行い独鈷水が遺蹟として残る。最澄が密教擁護のため当山に登って百二十坊舎を創建し、空海と心を合わせ、聖忌に祝園⁷¹で曼荼羅供を修し祠を建てて祀り、継続して行われている。貞和3年3月に兵火で僧坊は焼失し、曼荼羅院の鑊海法印と石井坊の寶因僧都が留まり、草庵を結んで仏事を勤修してきた。

本縁起は、山を外來の仏教、特に密教や修験の教義や実践で意味付ける一方で、在地の山神や龍王など土地の神を祀り、修行場から僧坊の立ち並ぶ靈地となった経緯を述べる。密教の高僧の善無畏の修行と空海の開創、最澄の来山で権威付け、下宮での祭祀の創始を記して神仏混淆の諸相を伝える。衆徒集落は、右谷・金剛界・東北院（鬼門）—左谷・胎蔵界・西南院（裏鬼門）という象徴空間に意味付けられた⁷²。女人門は右谷は石井坊近くの一瀬屋敷にあったと伝えられ、左谷には観音堂の七町下にある仁王門跡に女人門があり、やはり一瀬であった。結界の設定は、川を境界とし山を浄域として強く認識していたことの証左である。しかし、兵火で僧坊は焼失し、二つの院坊の僧が残って仏事を継続し、龜石坊宥弁に再興が託されたという。本縁起は、開山の謂われと仏事・神事の創始を語り、神仏習合の由来を提示し、象徴空間と浄域を構築するなど、外來の教義と実践が、在地の自然観や神靈観と融合し、外部と内部の力学が相互作用する状況を描き出している。善無畏の来山については、『宗像大菩薩御縁起』（文政元年（1444））に、太祖権現の唐土からの渡来や若杉山への鎮座、本地は真言祖師の善無畏と記され、宗像大社⁷³の影響を受けた可能性がある⁷⁴。宮崎宮、香椎宮と同様に異教退散に靈験のある大社である。ただし、善無畏が来山したとされる養老2年（718）は、長安で善無畏に師事した道慈が密教經典を携えて帰朝した年で、日本への密教伝來の記念すべき年であった⁷⁵。文献に通じた僧侶や修験が中世の社寺の開創縁起の形式を踏襲し、在地伝承と混淆させて作成したのであろう。この時代は太祖が「権現」と呼ばれているように、神仏習合が定着した時代であった。外來の文字知識と在地の口頭伝承

の融合であり、歴史意識にも食い違いや齟齬がある。

(2) 神社の創始伝承

寺院の開基を説く縁起（史料1）に対し、神社の創始を説く『筑前糟屋郡分杉山大祖神社縁起』（元禄5年（1692）。史料2）がある。貝原好古が「古き文共を考へ且故老の口実を傳聞きて」、糟屋郡の税吏の浜貞元の求めで記したとされ、現在の伝承の根本になっている。内容は以下の通りである。

- ① 糟屋の高山に鎮まりたいという神託で宮柱を立てて伊弉諾尊を祀る。
- ② 神功皇后の朝鮮出兵（三韓征伐）に際し、香椎宮で武内宿禰に敵に討ち勝つ方策を訊ねると、国土の諸神を祈り祭れと神託があり、天神地祇山神海神まで悉く祀った。
- ③ 太祖宮の伊弉諾尊は国土化成の神で、「国土人民の太祖」として厚く祀った。
- ④ 神功皇后は、太祖宮の神木の杉の枝を手折って鎧の袖に挿し、御守にして遠征すると血塗らずして勝利した。帰朝後、杉の枝に生色があったので、後世の印として香椎宮の脇に植えさせると生い茂ったので、人々は「綾杉」と呼んだ。
- ⑤ 当山はこの分け植えの故事に因み「分杉山」といい、後世に訛って「若杉山」となった。
- ⑥ 太祖宮の戊亥13丁に「綾杉原」があり、神功皇后が手折った杉があったが、慶長の初めに筑前中納言小早川秀秋が伐採して今はない。
- ⑦ 神功皇后は御社を改造し、山の絶頂に西向きに宮を作らせ、異敵降伏を願い、中座に伊弉諾尊を太祖として祀った⁷⁶。この神は「国土人民の太祖」である。
- ⑧ 太祖宮は右側に八幡大明神、聖母大明神、寶満明神を祀り、左側に天照大神、志賀大明神、住吉大神を祀る。故に「七社明神」ともいう⁷⁷。
- ⑨ 太祖宮は山麓から50町あるので、老幼の輩のために戊亥の麓に下宮を建てて七神を勧請し、日夜の参拝は下宮で勤めた。昔の繁栄時には朝夕の祭典は嚴重であった。
- ⑩ 伊弉諾尊は陽神なので、一陽来復の霜月を祭月と定め11月7日に祭礼を執行した。御幸所は、上宮より西40町の山麓の「祝園」である。この日に流鏝馬を執行した（下宮の西の馬場園）。その後には礼式が絶えて行われなくなり、祭日も3月14日に改められた。
- ⑪ 元正天皇の養老年中に天竺の善無畏が、当山に登って真言宗の秘法を修した。上宮から半町の所に善無畏の石塔が残り、塔の谷という。聖武天皇は各地の社に宮寺（神宮寺）を建てたが、当地では太祖権現を祀り寺号を「延年寺太祖山三蔵院」とした。宮寺の創始や善無畏の伝承は高僧伝になく、社司（石井坊）⁷⁸の口伝による。
- ⑫ 寺家が繁栄して左谷（今の佐谷村）、右谷（今の若杉村）に分かれ、左谷の寺の総号を建正寺西南院、右谷の寺の総号を石泉寺東北院と号した。両谷の僧坊300と伝え、その跡が山中の所々にある。
- ⑬ 空海も大同元年の帰朝時に当山に登って秘法を修し、独鈷水がその跡と伝え、しばらく止まった。寺坊跡は高野埜といい上宮の北二丁に、大講堂、鐘楼、寺院の跡がある。
- ⑭ 太祖宮本社の西25丁の下に別峰（岳城山）があり、大内家が西国を領知した時に、家臣の杉豊後守奥行を当国の鞍手郡に遣わし、龍徳の城で政治を行わせた。奥行は別峰に城を築いて高鳥居城として、城代を置いて糟屋郡の政治にたずさわった。
- ⑮ 佐谷右谷の衆徒が争い、火を放って攻めあったので、両谷の僧坊は全て失われた。
- ⑯ 天正5年（1577）に豊臣秀吉の九州統一の後、筑前国を小早川隆景に給わった。義子の中納言

こばやかわひであき

小早川秀秋が当国を領することになった。この地には神領がないので、山にあった神功皇后の手折の「分杉の霊木」を伐採した。その罪で病死して子孫もなく滅びた。

- ⑰ 慶長5年（1600）黒田長政が筑前国に封じられたが、神田は与えられなかった。寶満山の亀石坊宥弁を分杉村に居住させ、右谷の法頭職の廃寺、石泉寺の再興の任に当たさせた。
- ⑱ 浜貞元が荒野をきり開いて墾田とし、祭日の神供料にあてた。
- ⑲ 右谷に残る神社、仏閣、旧跡とその謂われが記される。右谷は、北山三社大明神（地主神。上宮の南）、八大龍王窟（海神。上宮の寅方）、大講堂跡（上宮の戌亥）、鐘楼址（古堂。大講堂跡と同所）、湯屋原（同所）、中堂（本尊薬師、山号高尾山。上宮の戌亥）、観音堂（善無畏三蔵招来の三国伝来の守護仏）、女人門址（本地堂石泉寺、元は一瀬屋敷にあり）、阿弥陀堂址、山王社（日吉七社を勧請。上宮の三十五丁山麓）。
- ⑳ 左谷に残る神社、仏閣、旧跡とその謂われが記される。左谷山観音堂（三蔵法師伝来の守護仏。寺内に薬師堂、大日堂、権現堂）、釈迦堂址、大師堂（院主坊屋敷址。伝教大師を祀る）、仁王門址、女人門址（一瀬屋敷にあり）、百堂址。

本縁起の内容の要点は以下の通りである。神託で高山に伊弉諾尊を社に祀った。神功皇后の朝鮮出兵に当山の杉の枝を御守にして無事帰朝し、杉を香椎宮の脇に植えた故事に因み分杉山と呼ばれた。神功皇后は社を改造し異国降伏と鎮護国家を願い、中座に伊弉諾尊を祀り太祖とした。六神を合わせ祀り七社明神ともいう。山麓に下宮を建てて祭祀を継続し、一陽来復の霜月が祭月で、11月7日に祝園まで神幸した。後に祭日は3月14日に変わる。石井坊（社司）の口伝では、善無畏の開山で太祖権現を祀り寺号を延年寺太祖山三蔵院とする。左谷と右谷に僧坊が三百ほどあって繁栄した。空海も山に登って秘法を修し、独鈷水の遺跡が残る。中世に至って佐谷と右谷が争い焼失して衰亡した。文亀天正の頃の高鳥居城（岳城山）の攻防にも巻き込まれたという⁷⁹。その後、筑前の領主となった小早川秀秋が神木を伐採して滅びたが、黒田長政が領主となり、右谷の廃寺の石泉寺に、寶満山の亀石坊宥弁に居住させ、石井坊として再興を果たした。

本縁起は、神功皇后を冒頭に登場させて、香椎宮との関連を強調し、社の成立と祭神の由来を主題とする。伊弉諾尊を太祖として祀った経緯を述べ、神木の杉の霊験を語って神霊の力の強さを誇示する。香椎宮は神功皇后を祭神とする社で、元々は夫の仲哀天皇が三韓遠征の途上に崩御した場所に祠を建てて天皇の霊を祀ったことに始まるという⁸⁰。神功皇后を聖母大明神として祀る慣行は、12世紀末頃に香椎宮で石清水八幡の僧侶の関与によって始まったが〔須永 2000〕、その影響も受けている。また、若杉山は歴史的には八幡神を祀る博多の筥崎宮（筥崎八幡宮）との関係も深く、神功皇后伝説にはその影響もあろう。佐谷の建正寺境内にある正中2年（1325）銘の板碑には、正和3年（1314）に筥崎宮で読誦され始めた法華経一万部を読み終えた記念と記されている。筥崎宮は、醍醐天皇が神勅で「敵国降伏」の宸筆を下賜して社殿を建立したとされる社で、鎌倉時代の蒙古襲来（元寇）では神風を呼んだとされる厄除け勝運の神として武士の崇拜を集めた⁸¹。若杉の人々は筥崎宮に浜砂を取りに行く「御潮井取り」を定期的に行っており⁸²、右谷の旧観音堂は北九州観音霊場巡りの第一番、筥崎宮は第三十三番であるなど相互の関係は深い。寶満山修験の3月・4月の春の峰入りは、若杉山から葛城嶽を経て、香椎宮と筥崎宮を経て帰還した。篠栗町の奥山には香椎宮と筥崎宮の土地もあったという⁸³。

若杉山の神功皇后伝説には、外部との交流が投影している。古代の道は大宰府から宇美を経て、須恵の佐谷・若杉の右谷へと延び、沿道には伝説地が点在する。佐谷から右谷へ行く途中、若杉山東南の鞍

部であるショーケ越の名は、神功皇后が産後にショーケ（竹籠）に入れて峠を越えて帰京の途についてことに由来するという。途中の宇美（宇瀨邑）は神功皇后が応神天皇を生んだ所とされ、近くには神功皇后が妊娠中の体を休めて「あなわびし」と言ったことに因む旅石八幡宮もある⁸⁴。海岸部の糸島郡二丈町深江（旧怡土郡深江村）の子負原は、神功皇后の新羅遠征時に二つの石を腰に挟みつけてお産の鎮めとし、帰国後に石を戻したので里人は鎮懐石として祀り八幡宮のご神体とした。その後、皇后は宇美で出産したという。海岸から山岳へ、神功皇后が出産前、出産、出産後と、点々と移動したという伝説が残り、人々の移動経路と照応する。しかし、神功皇后伝説は蒙古襲来によって新たに古代史から見出されたのであり、香椎宮や筥崎宮での敵国降伏の祈願で武神に成長した八幡信仰によって広まったと見られる。

一方、善無畏の開山については「善無畏日本にわたられし事、宋高僧傳等には見へず。今しはらく社司の家に云傳ふる所を以て是を記すのミ」と記し、善無畏伝承は石井坊の口伝で、史実か否かについては疑義を呈している⁸⁵。石井坊は、『八幡宇佐宮御託宣集』（正応3年-正和2年（1290-1314）編集）や『宗像大菩薩御縁起』（文政元年（1444））などを参照して独自の内容の縁起を練り上げたのであろう。石井坊には、善無畏使用の独鈷（元禄16年（1703）発見）善無畏三蔵掛軸（寛政7年（1795））や、神武天皇巻軸（元禄14年（1701））が伝わっている。元禄期には、堂社の修復や再興が盛んになり、歴史や由緒を見直して、過去に遡って権威を創出し文書化する動きが現れた。当時の記録類の『重修筑前州太祖山石泉寺観音霊像并堂宇記』（元禄17年（1704）。以下『堂宇記』と略す）や『筑前國表粕谷郡若杉村太祖山延年寺石泉寺神軀佛像經卷再興記』（宝永4年（1707）。以下『再興記』と略す）で実態を知ることができる。密教で重視される『虚空藏求聞持法』や『大日経』の訳者であることを評価して、元禄期（1688-1703）に善無畏の開基伝承が創出され、遺物が作成されたと推定される。

山麓に下宮を祀った経緯については、史実に照らし合わせると、鎌倉時代に岳城山に高鳥居城が築かれて、戦略上の拠点となって以後に、里宮として建立した可能性が高い⁸⁶。下宮の西側では鎌倉時代の中世集落の跡地が見つかり（若杉肥前谷遺跡）、有力者の居地と推定されている⁸⁷。参詣路は、博多から、扇、大隈、乙犬、法事、総門⁸⁸を通る道が利用された。下宮の祭では、江戸時代には、踊・操・角力、浄瑠璃・講談・流鏑馬などが行われ⁸⁹、表糟屋郡での文化交流の拠点であった。縁起には、下宮の祭りは、霜月（11月）に行われ祝園まで御神幸したとあり、後に祭日は弥生（3月）に変わったという。3月の祭りは『御祈禱控記録』に「三月太祖宮祭礼麦作成就祈禱」と見え、麦の豊作祈願の意図があった。江戸時代は、下宮が民衆との接点の場で、中腹の観音堂と合わせて賑わった。

本縁起は、祭神は大祖権現、伊弉諾尊を垂迹とし、神観念と祭祀、杉の霊験を主題としており、神を主体、仏を従属させる語りを展開する。史料1のような密教風の山の意味付けはない。縁起の変化の要因として、寛文5年（1665）に幕府が通達した『諸社禰宜神主法度』の影響が考えられよう。本法度によって、全国の神職は京都の神祇管領の吉田家の官位を得ることが義務付けられた。吉田神道は、古代との連続性や神道の純粋性を主張したので、神仏混淆の神社は従来の仏教色を払拭し、縁起の再構築も行われたと考えられる。本縁起は在地の神を主体とし、内部の秩序の確立を意図する内容である。

(3) 縁起の異伝

史料2とさほど内容が異なるものではないが、江戸時代中期に書かれたと思われる太祖を神武天皇とする縁起『筑前國表糟屋郡太祖山傳記』（史料3）があり⁹⁰、異伝として紹介する。その内容は以下の

とおりである。

- ① 太祖山上には神武天皇の陵がある。
- ② 神功皇后は宝殿を造営して太祖像を安置した。
- ③ 神功皇后は3月11日に祭りを行った。
- ④ 神功皇后は三韓征伐をした折に、神木の杉の枝を鎧袖に指して御守とし、凱旋後に香椎宮の側に植えた。これが今の綾杉でこの山を分杉山といい、後世誤って若杉となった。
- ⑤ 仁徳天皇の御宇に勅に従って社壇を築き、^{かしひしよもだいぼさつ}檀日聖母大菩薩の像を鎮座させた。
- ⑥ 養老3年（719）に大早魃があり、善無畏三蔵が修法を用いて雷雨をもたらした。
- ⑦ 善無畏は天照、寶満、八幡、志賀、住吉など七社権現を祀り、開元23年（735）11月7日に示寂した（中国年号で表示）。
- ⑧ 聖武天皇はこの山に宮寺を立て、太祖山延年寺三蔵院と号す。
- ⑨ 寺坊は繁栄して佐谷右谷に僧坊三百坊、佐谷の惣号は佐谷山建正寺西南院、右谷の惣号は右谷山石泉寺東北院であった。
- ⑩ 平城天皇の御宇、大同年中、空海が来山して、^{こうやの}高野埜で祈禱した。
- ⑪ 正親町天皇の御宇、天正年中、佐谷右谷が争い僧坊は全て灰燼に帰した。
- ⑫ 慶長年中、黒田長政が竈門山の亀石坊宥辨に命じて石井坊として再建させた。

本縁起が史料1や史料2と異なる点は、太祖宮の祭神を神武天皇とし、山上に陵ありとしたことである。そして、神功皇后が宝殿を造営し太祖像を安置し、後に皇后は聖母大菩薩として祀られ、引き続き、善無畏が大早魃を克服した^{れいげんだん}靈験譚が述べられ、七社権現を祀り、11月7日の示寂に因んで下宮の祭日にしたという。神仏習合の展開が語られ、雨乞いの靈験が重視され、善無畏の神格化が進む。聖武天皇が延年寺を建て、空海が来山して高野埜で修行したとする。史料1の神野埜は北山大明神鎮座地で、史料2は高野埜と表記が変わって寺坊址となり、史料3も同様に仏教風の縁起に仕立てられている。地主神の土地名であった神野を高野と読み替えることで空海の留錫の伝承が創り出された可能性がある。

史料3と内容は重なるが、石井坊に伝わる写本『筑前國表糟屋郡太祖山傳記』（年代不明。元禄期か。史料4）では、山頂に神武天皇の御陵があり、神功皇后が宝殿を造営して太祖像を安置し、「太祖神武聖皇帝宮」の八字の額をかけ、3月11日皇后が祭儀を執行したと記す。引き続き、神功皇后の分杉の伝承を述べ、仁徳天皇の御宇に下勅で社壇を築き、聖母大神の像を異敵退散のために西に向けて鎮座させたという。養老3年（719）は大早魃で善無畏三蔵が太祖山で雷を起し雨を降らせたので⁹¹、万民の信仰を集め、山には七社権現を奉祭した。開元23年（735）11月7日に聖武天皇より太祖山延年寺三蔵院の号を給い、左谷右谷で寺坊は繁栄を極めた。大同年中、空海が来山して高野埜で祈念を行った。天正年中に衆徒に諍い事があって諸堂僧坊は全て焼失し、慶長年間に黒田長政が寶満山の亀石坊有弁を移して石井坊として再建したという。内容は史料4とほぼ同様であるが、神功皇后が神武天皇を太祖として3月11日に祭りをを行い、後に聖母大神として異敵に対抗して鎮座したと、善無畏の雨乞いの靈験と七社権現の勧請を述べるのが異なる。

史料3や史料4は、神武天皇を太祖とする皇統譜を重視し、神功皇后や聖武天皇の事績を強調する。元禄期の神武天皇の神格化には、元禄16年・17年（1703・04）の下宮の改築など神社再編の動きが背景にあると推定され⁹²、由緒を見直して権威を高めるために、太祖を読み替えた可能性がある。元禄14年（1701）作の『神武天皇画像』が現存し、石井坊蔵の『再興記』（宝永4年（1707））にも「神武天皇

垂跡之地也」とある。ただし、『筑前國續風土記』[貝原1977(1688-1710)]をはじめ地誌類は神武天皇の伝承には否定的である⁹³。

一方、石井坊賢林が記した天明5年(1785)の『分杉村太祖宮之記』(史料5)[合屋1957:32]によれば、養老3年(719)6月に大早魃があり、善無畏が当山で雨を祈願して瑞雨が下ったので民衆の信仰を集め、同年に天照大神、寶満宮、八幡宮、志賀宮、住吉宮の五社を祀ったとあり、七社が五社になっている。善無畏の真言の秘法による雨乞いを重視する。慶長年間に黒田長政が宥弁を当山の座主職とし、真言宗から天台宗に改めて、坊号の石井坊を給って⁹⁴、太祖権現宮の別当寺となった経緯を述べ、宗派の変更を明示する。太祖権現の本地は仏で神は垂迹として現われ、9月19日のオクンチの祭りは神仏習合であった。ただし、「権現宮」と呼ばれて「神社」の形式で祀られている。祭りの祈願の主題は五穀豊穰で、日照りは最大の危機であり、雨乞いが頻繁に行われるなど、水分の山への信仰は時代を超えて維持されてきたことがわかる⁹⁵。

(4) 佐谷の縁起

佐谷には『左谷山建正寺縁起』が伝わり、永祿4年(1561)に左谷山賢聖院賢正坊宗祝が漢文で書いている⁹⁶。本縁起は冒頭で住人による座霊神の熊野三所権現の勧請の由来を述べる。最澄が延暦23年(804)に中国に渡る前に、寶満山の竈門山寺で薬師像四軀を造像して航海安全の祈願をしたという。最澄は郷内を行脚して、一本の樹木から本木、中木、末木の三体の大日如来像を造り、末木の大日を「須惠の谷山」、現在の左谷字観音谷に移した靈験譚を記す。最澄は寶樓閣に大日如来を安置し、十一面観音を彫って主尊とし、阿弥陀と薬師を彫って、三所権現の本地仏として堂舎に安置し、精舎を造り「賢聖院」と号したという。菩提所を龍華寺、総号を佐谷山建正寺と名づけ、竈門山寺の大衆を要請した。三所権現の廟前にて両部神道の秘儀を行い、十種神寶⁹⁷の秘文を唱えた。清水を請うと三人の童子が飛来して井戸が出現し、最澄はそれを水鏡にして自分の肖像を刻んだので、井戸を得好水と名付けた⁹⁸。帰朝後、弘仁5年(814)に竈門山(寶満山)の有智山寺にきて、大衆に頼んで僧侶を要請し、法相宗の僧侶が当地に来て、天台宗に改めて左谷山寺を開基したとされる。堂坊は天正14年(1586)の杉弾正忠重の出兵に際して焼失したが、明和4年(1767)に竈門山座主の楞伽院真雅法印が仲谷坊附第の良辨⁹⁹を印寿坊に入れ、院主坊と改名して再興させたという。

佐谷には伝教大師堂があり、最澄が水鏡に映した姿を彫刻したという「鏡之像」と呼ばれる12世紀終わり頃と推定される伝教大師像が安置され、古代中世の隆盛が偲ばれる。建正寺所蔵の十一面観音と大日如来は平安時代初期の仏像とされ、寺伝では最澄作と伝える。境内には正中2年(1325)の銘の板碑が残り、天治2年・3年(1125・26)銘の経筒が出土している[『須惠町誌』1983:1075-1079]。歴史は平安初期までは確実に遡れる。

佐谷右谷の歴史的経緯については、佐谷は最澄の足跡を記し、右谷は善無畏の修行や空海の開創を伝えることから、佐谷は天台宗、右谷は真言宗と分離していたように見える。しかし、九州北部の状況から判断すると、平安時代は双方ともに天台宗で、中世のある時期に右谷が真言宗に傾き、善無畏や空海の伝承を生み出して開創伝承を作ったと推定され、双方が別々の道を歩み始めたことが、争論や戦いの伝承になったと考えるのが妥当のようである[八尋1986:27]。伝承であるが右谷の石井坊の本尊の大日如来は最澄作と伝える。

近世は、佐谷が仏教寺院を主体として熊野信仰との神仏習合を展開していたのに対して、右谷の若杉

は太祖宮に關与した皇統譜の流れを強調し神功皇后伝説を主軸に神道色を強めた。ただし、若杉山の右谷側は江戸時代末期は、篠栗新四国霊場の成立によって、弘法大師空海の伝承を浮かび上がらせ、明治時代以降は、霊場の奥之院として民衆の支持を集めた。正確にいうと「最も人気がある番外」となった。佐谷と右谷に共通する要素は、観音信仰を維持してきたことで、建正寺観音堂の十一面観音と若杉観音堂の千手観音（共に平安時代初期作）は民衆の篤い支持に支えられた。観音は女神の様相を帯び、豊かさを齎すと信じられた。その根源には水分の山の信仰があり、農耕にとって最も大切な水の恵みを祈願し、時に雨乞いも行った。山上の湧水は空海の独鈷水（右谷）や最澄の得好水（佐谷）として権威付けられ、観音は水の信仰と結合して民俗神の相貌を帯びた。弘法大師信仰は、八大龍王窟を基盤として形成されている。

(5) 縁起の基本主題

右谷に伝わる縁起の比較によって、基本主題とその変容の諸相を検討する。史料1から3までの主な主題を整理すると以下ようになる。

縁起は知識人の歴史意識に基づいて書かれた特異な歴史叙述で、その中には意図的な作為や記憶による想像が含まれ、同時代の政治や経済の影響を受けており、権力作用を内在させた言説（discourse）と表象（representation）であると言える。その中から民衆の思考を浮かび上がらせて、内部と外部の力学に注目して持続と変容の諸相を整理すると、以下の点を指摘できよう。

① 山の神聖視と水の信仰

主神である「太祖」の神名は不定であり、山の神聖視が基本で自然そのものを神霊の顕現と考えていた。江戸時代には、国土化成を行った伊弉諾尊を祭神とする考え方が主体となった。内部の思考が外部の知識によって再構築されたのである。史実ではないとしても、善無畏の来山伝承は、密教の呪法による雨乞いの霊験を伝えており、水分の山の信仰が強かった。山を霊力の根源とする内部の力は継続してきた。山頂付近に湧き出て枯れることのない独鈷水への信仰は時代を越えて受け継がれてきたのである。

② 地主神から護法神へ

地主神は北山大明神で、山神を祀っていた。主峰に「太祖」を祀り、地主神を別峰に祀るとされるが、重要なのは根源的な「場所の力」の重視である。善無畏の渡海の暴風に際して、地主神が海上で出現し、上陸後に祀られたという故事は、比叡山延暦寺の護法神の赤山明神や新羅明神と同じ語りで、いずれも外来神が仏菩薩を護持することになった。これに対して、北山大明神は在地の神である。現在では、山頂の上宮の脇に磐座のような石があり、寶満山を彼方に望む場所に小祠がある。外部からの働き掛けによって顕在化する内部の力の代表が地主神で、北山大明神は北方の山に居ます土地神の意味であった。

③ 根源の場所とその仏教化

神野壑が地主神の鎮座地で当初は北山大明神を祀っていた。後に空海の来山伝承で密教の影響が加わると「高野壑」になり、空海の修行地とされた。多くの僧坊の遺構は、少し下の「古堂」近辺に残っており、中世には寺院群（総称・延年寺、法頭・石泉寺）が隆盛を誇ったと推定される。ここには山神が祀られ、若杉山の山開きには祭神として祀られるなど地主神の祭祀は継続してきた¹⁰⁰。神野から高野へという変化は、外部の思想で内部の伝承を読み替えて、仏教色を強めたことの現われであろう。

表1 縁起の比較

主題	史料1 (慶長2年, 1597?)	史料2 (元禄5年, 1692)	史料3 (江戸時代中期)
太祖	善無畏 (密教の太祖)	伊弉諾尊 (国土化成)	神武天皇 (皇祖)
地主	北山大明神 (天忍穗命)		
山の意味	曼荼羅 (金胎兩峯)		
社の創建	神託・神野埜 (異敵鎮護)	神託・糟屋の高山	
神功皇后		来山。分杉山由来 (香椎宮) 社の創建 (七社明神=聖母・寶満を含む)	来山。分杉山由来 (香椎宮) 宝殿の造営 (太祖像安置) 3月11日祭礼
仁徳天皇			聖母大菩薩像安置
下宮		七社勧請	
善無畏	来山。北山大明神・八大龍王 (海上出現, 山上祭祀) 曼荼羅院・石泉寺 十三院坊 (十三仏)		来山。養老3年・雨乞秘法 七社権現を勧請。 11月7日示寂
聖武天皇		宮寺・太祖山延年寺三蔵院創建 (太祖権現を祀る)	宮寺・太祖山延年寺三蔵院創建
空海	留錫。金剛頂院・独鈷水 僧坊108・女人門を建てる 神祠 (太祖大権現) を祀る	留錫。寺坊・高野埜・独鈷水	留錫。祈禱・高野埜
最澄	留錫。坊舎120		
祭日	10月7日 (太祖聖忌) 曼荼羅供・祝園神幸 (神仏習合・流鏑馬)	11月7日 (霜月祭祀) 祝園神幸 (神事・流鏑馬)	
左谷右谷	胎蔵界・金剛界	僧坊300。建正寺・石泉寺	僧坊300。建正寺・石泉寺
高鳥居城		山城	
焼失	貞和3年3月焼失。曼荼羅院と石井坊の僧は現地に留まる	衆徒の争いで焼失	天正年中に焼失
小早川秀秋		杉の伐採・崇りで滅亡	
黒田長政	再興	亀石坊宥弁が石泉寺を再興。	亀石坊宥弁が石井坊を再建。

④ 外国との相克

神功皇后の朝鮮出兵と「分杉」伝説、^{しょうものおかみ}聖母大神 (聖母大菩薩) の勧請、異敵退散の鎮護の伝承は、博多に近く朝鮮や中国との交渉が密接であった歴史的背景が投影している。中国との交渉の証左は、佐谷の平安時代の経筒の中国人名、上宮の宋風獅子 (鎌倉時代。13世紀前半) などの遺物に残る¹⁰¹。しかし、太祖宮の社殿を西向きとして朝鮮半島と対峙させたという伝承は、外敵に対する備えを意味し、緊張をしいる対外関係の歴史が投影していると言える。外来の要素は受容や変容と共に相克と葛藤を伴い、外部は両義性を帯びるのである。

⑤ 密教による権威付け

右谷での善無畏や空海の来山伝承は、右谷が真言宗に傾斜した段階で、佐谷への対抗伝説として作り出されたと推定される。佐谷は熊野権現の勧請や最澄の開基を説き首尾一貫しているが、右谷の縁起は空海の後に最澄が来山して空海と心を通わせたと苦しい説明をする。右谷の別当寺の石井坊は寶満山と同じく天台宗で、密教という大枠の中で空海の伝承が浮上したと見られる。石井坊では、本尊大日如来像は最澄作、不動明王像は空海作、地藏菩薩像は恵心作と伝え、天台宗も真言宗も受容したと思える矛

盾した伝承を持つ。右谷と佐谷は共に内部と外部の対抗と葛藤を含むが、曼荼羅世界の金剛界と胎藏界に充当される相補的關係にあり、金胎一如として、内部と外部を融合した宇宙を形成した。

⑥ 民衆との接点

民衆と太祖宮の接点は下宮の秋祭りであった。江戸時代に至り、黒田家が当社を郡の宗廟とし、郡司が経営して祭祀を司ったとされ、祭日には元禄以後は能楽や大相撲が行われて藩主も参拝した記録がある。縁起では、祭神が陽神であることに因んで一陽来復の霜月（11月）に祀ったという伝承（史料2）を記しており、秋祭りは農業終了後の収穫感謝の農耕儀礼であった。祭事は祝園まで神幸して流籠馬を行うと共に芸能を奉納するなど娯楽性を伴っていた。祭日は、3月に変更されたという伝承も記されているが、秋祭りに対する春祭りであり、麦の豊作祈願と農耕予祝の祈願で、年中行事の一環であった。太祖宮は高い格式をもっていたが、藩主から民衆に至る幅広い社会層の接点として機能しており、神仏習合が複雑に展開して、内部と外部の独自の混淆による祭りが創造されたと言える。

4. 神社の再編と祭日の変化

江戸時代までの歴史叙述と歴史意識の諸相を踏まえて、近代の民俗の諸相を検討する。その中には、持続・変容・創造が含まれている。最初に検討するのは神社の再編である。明治維新の神仏分離以後は太祖権現宮は大きく変化した。以下に幾つかの点を指摘する。

(1) 政治の民間祭祀への影響

第一は政治の影響が広範に民間祭祀に及んだことである。若杉では太祖権現宮は若杉太祖神社となり、神職が主体となる祭事の運営に変わった。政府の政策に基づいて神社の格付けが行われ、太祖神社は当初は郷社とされたが、明治29年（1895）に県社に昇格した。糟屋郡の宗廟という記載も登場する。明治31年（1898）の銅版画『大祖神社全景之圖』（図4）には、「神功皇后三韓征討御祈誓サレ凱旋ノ後其ノ報賽トシテ社殿壮大ニ御建築遊サル」とある〔清水 1898〕。日清戦争（1894-1895）の直後に県社となり、軍神としての位置付けが高まった経緯が推定される。日露戦争（1904-1905）後は、5月27日の海軍記念日（バルチック艦隊撃破の日）を祭日として祭典を行うなど軍神の性格を強めた¹⁰²。篠栗町では、明治末年頃には、男児の端午の節句を海軍記念日に行う慣行が広がったという〔『篠栗町史 民俗編』1990: 118〕。大正13年（1924）の鳥居建立時に配布された由緒書には、太祖神社は、日本武尊の熊襲遠征の時に九州鎮護の主神として伊弉諾尊を祀ったとあり軍事色が強まっている。また、祭神が皇祖の神武天皇で、春祭りはその祭日という江戸時代の縁起を援用して、官幣社にする動きもあったが実現しなかった。太陽暦への移行で3月3日の雛祭りは大正時代初めには「神武天皇祭」となった地域もあり〔合屋 1957: 178〕、天皇制の復活は民間に大きな影響を及ぼした¹⁰³。また、「御潮井取り」の習俗も変化した。この行事は、年2回の春秋の社日（春分・秋分に近い戊の日）に、海岸の近くにある筥崎宮へ行って浜の砂を拝受し、帰宅すると各戸はテボ（籠）に入れて玄関先に吊り下げ、家を出る時に振りかけて身を清め「除災招福」を祈り、田畑の虫よけ、豊作祈願、病気全快、防火も願った。しかし、日清日露の戦争後は、筥崎宮を武神として尊崇し、出征兵士の武運長久を祈る目的で毎月朔日と15日に行くように変化した。戦後は年間2回に戻って存続したが、近年には衰退した。

一方、神職に関しては、『県社太祖神社明治維新前後沿革』と『神職沿革』などの地元史料で当時の状況を知ることができる。明治以降、神職は若杉の出身者ではなくなり、外部者があてられた。初代

は村木梨^{むらぎなし}で明治8年(1875)に勅任し、二代目は尾仲村の佐々雪^{ささすすく}、三代目は佐々保^{ささたもつ}であった。佐々保は47年間奉仕して昭和17年(1942)に死去したが、古い文書を燃やすなど地元との葛藤があった。初代宮司は当初は官幣大社香椎宮宮司の木下が兼任し、その後、山田村県社大神宮社司の豊丹生源吉^{たにいじんぐうしやし}、志免町八幡宮社司の世利五三郎^{せりござぶろう}へと変わった。祭祀の主導は外来者に委ねられて、地元の人々は氏子として参加することになった。現在の神職は内川道臣^{うちかわみちおみ}で、篠栗の中町の諏訪神社の宮司と兼務し、前宮司の内川道方^{うちかわなおかた}の子息である。外部者が若杉の祭祀を行うという流れは継続してきた。

(2) 祭祀組織の変貌

第二は祭祀組織の変貌である。氏子は若杉集落の居住者、つまり本村^{ほんむら}(部落)の人々から構成され、60戸から80戸が祭りの運営に携わる(宮と丘の10戸を含む)。新住民の篠栗団地と今里団地の住人は含まれないが、参拝するといえば拒まない。神社の掃除は60戸が担当し、隣組が当番となり1月あたり2戸を割り当てて、1日と15日に行く。若杉では、神社に奉仕する当番のことを「宮座」と呼び、毎年10月の注連降ろしの時に、御神籤^{おみくじ}で選ぶ。神社の神官が、旧若杉村の居住者の48戸(古くは50戸)の中から、次の宮座に予定される候補者の戸主の名前を紙片に書いて丸めて紙玉^{かみだま}にし、三方に載せ、御幣で撫でつけて、順次6戸を選ぶ。最初に御幣についた紙玉の戸主が座主となる。座主の家に神官が赴いて注連を張りお祓いを受ける¹⁰⁴。6戸が組になって氏神に奉仕する。「宮座」は地元の呼称で、北部九州ではお座元^{おざげん}や神和^{かみわ}などと呼ぶ地域もある¹⁰⁵。「宮座」は、年中行事のうち、正月、4月、10月、11月23日の四回の祭典に奉仕する決まりである。戦前は、旧暦の正月(大晦日と元旦)、3月と9月の大祭、10月の注連降ろしの計四回の奉仕をしていた。主な仕事は、神事の準備で、幟立て幟下げ、縄集めと縄ない、神木や神社の注連縄張り、社の飾り付け、御札作り、注連おろし、宮座帳付けなどに携わり、一年ごとに交代する。御神田に当たる田圃(深澤久^{ふかざわひさし}所有)が観音堂の上部にあって、若杉で最も早く稲が実ることから、これを瑞兆として注連縄はこの田の稲藁を利用していた。現在は、宮座は消滅したが、名称は残り、集落の内部区分である5組(谷下^{たにした}、谷上^{たにうえ}、横岩^{よいわ}、辻下^{つじした}、辻上^{つじうえ})が毎年交替で担当する方式で、2005年は谷下が担当した。現実の機能は各戸が順番で担当する「村組」である。毎年10月1日の注連降ろしが交替日であったが、現在は10月第一日曜日に受け渡しを行い、帳面を貰い受ける。10月第二週頃の大祭に先立って御神籤^{おみくじ}をおろして、責任者の座主^{ざす}を決める。座主は毎年10月1日から正月までが担当で、福引の時に交替する。オクンチが主な任務であった。秋祭りは、座主の家に集まって祭りの準備と用意をする。お祝いの紅白の餅、煮しめ、甘酒を造り、蓮根^{れんこん}、蒟蒻^{こんやく}、牛蒡^{ごぼう}を串刺しにした供物を作る。集金は神社、作業と接待は宮座が行う。氏子総代は5名、4月1日から3年間担当する¹⁰⁶。20年に1回御遷宮を行う決まりで、最近では平成7年(1995)1月に実施した。民俗学者は「宮座」を「神事の執行に関して特権的に参加する資格を持つ人々によって構成される組織」とし、家筋や血縁による「株座」と、地縁による「村座」があると考えている[原田 1976]。若杉では「宮座」という言葉を日常的に使い、担い手は古くからの居住者としており、「村座」の意識が強い。現在では「宮座」は消滅したが、祭祀で「平等性」を維持する機能は持続し、民俗社会の秩序を確認して、統合を強化し、相互の関係性を再構築をする。

(3) 縁起の変化と神社の改築

第三は時流に合わせての縁起の内容の微妙な変化と神社の改築の動きである。昭和に入ってから書か

れたと思われる『太祖神社鳥居の略歴』¹⁰⁷によると、太祖宮は景行天皇の御宇に日本武尊が熊襲征伐に向かう途上で、九州鎮護の主神として皇国の始祖伊弉諾尊を齋き祀り、その後、仁徳天皇が社殿を改築し、斉明天皇時代に、山の中腹に石鳥居が建立され、この地（岳城山）を高鳥居と呼んだと記してあるが〔合屋 1957: 47〕、史実とは言えない。神社としての一貫性を説くことは鳥居の由来としては当然であるが、日本武尊の熊襲征伐、皇祖を九州鎮護の主神として祀る、古代の天皇の社殿造営、古代の大鳥居の建造という虚構の言説は、鎮護国家と異国降伏を基軸に、日清戦争や日露戦争を経て、大陸へと進出していく帝国日本の時代のあり方を映し出している。昭和9年・10年（1934・1935）には、上宮と下宮の改築が行われ、戦意高揚に神社が大きく貢献していった様相が見て取れる。上宮は昭和9年に起工し、上宮境内林の老木を伐採して、旧社殿の破風型を神明作りに改め、屋根は檜皮を銅板葺きにし、昭和10年5月16日に竣工した。下宮は昭和10年4月14日に社殿改築を始めて、昭和11年9月に竣工した。村人にとって太祖神社の神は守護神の性格を強く帯び、戦争遂行の精神的な支えになっていったのである。

昭和10年には若杉の文化の進展を期して作った公会堂（現在の公民館）も完成した¹⁰⁸。合屋家のうちで代々学者を出した家があり、当時は病院経営をしていた人が寄付した¹⁰⁹。昭和9年9月3日起工、昭和10年4月3日竣工である。公共施設ではあるが、祭場の趣きもある。天照大神と伊弉諾尊の二神を中央が祀られていて、合わせて八柱の神を祭祀する。その中には寶満宮も含まれる。木造十一面観音立像（福岡県文化財指定：平成11年3月19日）と木造阿弥陀如来立像も安置されて、荘厳さがある。場所は村の中央で村の内部区分では辻上と辻下の境にあたり、各種の集会の他に神楽の練習場としても活用されている。昭和10年前後は若杉の文化の再興に関して異様な盛り上がりがあり、神社造営はその一環と思われる。当時は、日本が急速に戦争に傾斜していく時代で、戦意高揚のために郷土に精神的な拠り所を求める文化運動であったのかもしれない。

(4) 祭祀の継続と変化

第四は祭祀の継続と変化である。村の氏神、産土神の性格を持つ太祖神社には、権威を示すような大鳥居が大正13年（1924）に下宮参道に建立された。これは大旱魃での雨乞い祈願が叶ったの奉納で、藩政時代の雨乞いが継続していたことがわかる¹¹⁰。太祖神社の祭神は昭和10年5月の記録では、八幡大神、寶満大神、天照皇大神、伊弉諾尊、志賀大神、住吉大神、聖母大神の七神明神とされ変化はない。昭和10年当時の神社の祭日は下宮標札によれば、元旦祭1月1日、元始祭1月3日、紀元節2月11日、祈年祭2月17日、春季大祭4月14・15日、天長節祭4月29日、大祓6月30日、境内編入記念祭7月15日、治風相撲祈願祭7月27日、夏越祭8月7日、秋季氏子大祭10月16・17日、例祭11月7日、新嘗祭11月23日、大祓12月31日であった〔合屋 1957: 19-20〕。明治以後の官制の祭りが加わっているが、地元の重要な大祭は4月の春祭りや10月秋祭りで、平野部での稲の播種と刈取の時期に相当する。特に収穫がほぼ終る秋の大祭が盛大であった。大正3年（1914）以降は、春と秋の大祭には神楽が奉納されるようになった。

江戸時代の祭日については、神社や寺院の関係者が記した縁起類では、秋の祭りは10月7日や11月7日で善無畏の忌日や霜月祭祀と説明されている。しかし、開山の高僧の忌日に由来する祭りの起源伝承は知識人による作為性が高い。江戸時代後期の地誌では太祖権現の祭日は9月19日で、『筑前國續風土記』〔貝原益軒編。元禄元年-宝永7年（1688-1710）〕、『筑前名所圖絵』〔奥村玉蘭著。文政4年（1821）〕、

『大宰管内志』[伊藤常足編。文化元年—天保9年(1804-1838)]など同様である。北九州では産土神うぶすながみの秋祭りは9の日か9の重日が多く、オクンチと呼んで村全体が産土神うぶすながみに収穫感謝の祈願をして供物を上げてもてなし、遊び楽しむ。漢字で「お宮日」と書くこともあった。太祖宮の下宮の秋祭りは、江戸時代までは神仏習合で、芸能や催事もあって民間での農耕儀礼の様相が強かったと推定される。

明治初期の『福岡県地理全誌』(明治5年-明治13年(1872-1880))では、七社明神の祭日はオクンチの9月19日で、11月7日の祝園への神幸は過去の行事と記すのみで、変化していた。その後、9月19日は10月16・17日の神嘗祭かんなめさいに変更となった。神嘗祭は、皇祖を祀る伊勢神宮の大祭で、皇室の繁栄と国家の安泰、五穀豊穰・国家安穩の願いを籠める祭事で¹¹¹、戦前は国民の祝祭日であった。神社の例大祭はこの日に合わせて行うようにと指令がきたので、若杉は従ったのだという。太祖神社は、皇祖の祖先いざなぎのみことの伊弉諾尊を祀っていたので、神道重視政策に従う必要があったのであろう。ただし、太陽暦への移行に伴って、新暦9月の祭りは農作業との日程が合わず、季節感も異なるために10月にしたという事情もある。祭日が変わっても、地元では10月16・17日をオクンチと称して、神嘗祭としてよりも収穫祭として意識していた。若杉の場合、新たな祭日となった17日は観音の縁日(通夜)で、習合しやすく定着した。氏神と観音は共に民衆を支える神仏であった。ただし、オクンチは村ごとに祭日が異なり、「おくんち歩き」と称して、相互の村人が招待してもてなしをする村同士の社交の場であったが、祭日が固定することでこの機能は失われた¹¹²。

春祭りは江戸時代には大きな行事ではなかった。『筑陽記』(安見有定編。宝永2年(1705))には「三月十四日少しはかりの祭あり。所祭神神武天皇。」とある¹¹³。民衆は当初から神武天皇を祭神としていたのではないが、農作業が始まる前の予祝行事は農民の春祭りとして大事であった。江戸時代後期には、芝居がかかるなど催事が加わって賑わっていたようである。明治時代には、春祭りは一月遅れの旧暦4月14日・15日に移行した。4月15日は村人にとっては農耕の守護神である五穀神の祭日で、村人は太祖神社の祭りと五穀神を共に農耕予祝の神として合わせて祀り、春の本格的な農作業の前に五穀豊穰を願った。五穀神の祭りの日は、農作業を休んでご馳走を作り、「山上がり」と称して祠に登り、奠座を祠の前に敷いてお籠りを行い、昭和40年代までは続いていたという。五穀神は集落の東方のキメダカと呼ばれる山上に祀られる石神で、「米こめの山」の支脈上にあつて、村全体を見下ろして五穀豊穰を見守っていた。しかし、明治32年(1899)4月開催の部落の会議で、坂道が急峻で子供や老人にとって参拝は不便ということで、協議の結果、高尾に移して祀っている。15日は氏神の祭りと重なるので、青年会だけが15日に集まり、幕を張って大太鼓・小太鼓を打って祀る。村人は各自参拝して饗応を受け、賽銭の収入は青年会に入った。

太祖神社の春と秋の大祭は政府の宗教政策の影響を受けつつも、農耕儀礼の様相を帯びて、民衆の暮らしや祈願と密接に結び付いて維持されてきたのである。

5. 年中行事の持続と変化

(1) 主な年中行事

若杉の集落では、奥之院の法要や太祖神社の神事を遂行するだけでなく、多くの年中行事を維持してきた。祭事暦は明治20年代まではほぼ旧暦であったが、大正時代の初めに新暦に移行し、旧暦の一月遅れになったものが多い。昭和30年代初期の状況を『若杉郷土誌』[合屋 1957:172-195]から抜き出して、補足を加えると以下の通りである(表2)。現在では廃絶しているものも幾つかある。

以上の他、毎月の行事として、1日と15日は代表者が筥崎宮（筥崎八幡宮）の前の砂浜に「御潮井取り」（御潮井汲み）に行き、持ち帰った「潮井」の浜砂を下宮に捧げた後に各戸に分け、家々では籠に吊るして、清めや防火の祈願とした。元々は春と秋の土用どように近い戌つちのえの日に行っていた行事である。集落には幾つかの講集団があった。庚申講は、当番が中心となって六十日の庚申の日ごとに猿田彦命を祀った。秋葉講は二組で、毎月18日の夜に当番の家に集まって防火の祈願を行った。火事の恐ろしさが身に染みていたのか熱心に行われていた。大師講はオハツカとって、弘法大師の命日にちなみ、11月から3月の暇な時期の20日の夜に、組ごとで当番の家に集まって、大師の掛軸を掲げて、花とごはんを供えて光明真言こうみょうしんごんを唱え、御詠歌を朗唱し、数珠繰りも行った。女性の社交の場としての性格も強い。伊勢講の集まりは資金を貯めてお伊勢参りに行くことを目的とし、女性だけの女同行おんなどうぎょうもあった。年中行事の基本構成と内容は以下のようである。

(2) 年中行事の基本構成

① 正月の年頭の祝い

正月は盆と並ぶ年間の二つの大きな行事である。特に正月は年間最大の祭りで新年の祝いを盛大に家ごとに行う。年末の煤払いと餅つきなどの準備をして、神棚の飾りつけは年内に済ませておく。大晦日には蕎麦を食べて年越しをする。炉には火をくべて、年木の櫓うしは絶やさずに年明けを迎える。元旦には櫓から発火する。初詣は氏神の太祖神社と奥之院へ行く。大晦日の夜は上宮に登り、零時を回ると初詣をする。参拝者は、地元の篠栗だけでなく、福岡、佐賀、熊本、長崎など北部九州の人がきて300～500人ほどで、最盛期の半分から三割程度であるという。お神酒の接待と福引がある。福引は空くじなしで、御判を入れておいて、干支の置物だるま、達磨ひょうたん、瓢箪、灰皿、キーホルダー、タオルなど500個用意している。日の出を拝んで万歳を唱えて帰る人もいた。上宮の参拝後は、下宮での祭典に参加する。三が日は家でのお祝い事が続き、各家は相互に訪問して正月の挨拶をする。1月4日は福入りといい、鯛ぶりの雑炊を食べる。前年に結婚した嫁が各戸を廻って挨拶をする（14日も同様）。七日正月には神棚の飾りを外し、辻に竹を切って大きいやぐらを作って飾りを持ち寄り火をつけると、大きな音が出て燃え上がり神送りとなる。これを「ほっけんぎょう」という。正月餅を割って火にくべて、焼けると持ち帰ってぜんざいにする。子供が主体の行事で、最近では団地の公民館グランドで行う（近年は第一日曜日）。小正月の十四日正月はもぐら打ちをして、大晦日から絶やさずに燈してきた年木の櫓ほだを焼いて、一連の正月行事を終了する。年木の火を正月の間は保持して時の流れを継続させる。その後、二十日正月、2月1日の太郎粥と続き、ほぼ一ヶ月間にわたる正月が終了する。

② 盆の先祖供養

盆行事は本来は旧暦7月の行事であるが、現在は8月に行う。一月遅れの日程に変えたのは戦後のことという。準備は7月1日から始まり、7月の前半の半月は盆行事が展開する。盂蘭盆うらぼんは7月13日・14日・15日の三日間で、墓参りを行い先祖供養をして、寺の施餓鬼せがきに参加する。親戚同士は盆客として相互に訪問して仏壇で先祖を拜む。特に新盆の家は祭壇を立派に飾って供養する。盂蘭盆では綱引きと盆踊りが大きな行事であったが、綱引きは昭和初め頃に廃絶した。14日・15日の二回行い、15日は綱が引き切られたのを合図に、精霊送りと墓参をする。綱を引くことで浄土に先祖を送りこむ意図があるという。綱引きの準備は子供組の担当であった。盂蘭盆は先祖供養に留まらず、人々の交流の機会であり、家の継続と繁栄を願う現世利益の機能も持つ。

表2 主要年中行事一覧

日付	行事名	内容
1月1日	元旦。上宮参拝。下宮で元始祭。	大晦日までに飾り物は済ませておく。餅。団子。
1月1日～3日	三ケ日。	正月の祝宴が続く。子供は遊び。
1月4日	福入り。	新嫁の二日歩き。各家を巡る。金剛頂院の鏡開き
1月7日	七日正月。ほっけんぎょう。	鏡開き。正月飾りをとって火で焼く。
1月14日	十四日正月。もぐらうち。	嫁歩きを行う。大晦日の櫓を焼く。
1月18日	小豆粥を食べる。	
1月20日	二十日団子。	引き物。
2月1日	太郎粥。	
2月丑日*	お白様(丑の日祭り)。耕作の神くる。	白の上の箕に供物と柴。餅。
2月11日	紀元節。下宮で祭典。	
3月3日	雛祭。桃の節句。雛壇に人形を飾る。	餅(三色の菱餅。紅・白・青)。母の里方から祝意。
3月14～15日*	春祭。氏神の祭り。	現在は4月14・15日に移行。
春彼岸(3月)	墓参。	餅(蓬餅, ぼた餅)。団子。
4月15日*	五穀神の祭り。山あがり。参籠。	祠は高尾に移設。若衆組が接待。村中の者が参拝。
4月14～15日	春季大祭。下宮で神事。	神楽。昔は若衆の獅子舞の各戸巡り。餅(ぼた餅)
4月麦収穫時*	作入り祝い。麦の収穫祝い。	麦の収穫は新暦5月下旬～6月中旬(麦秋)。
4月21日	奥之院・春季大法要	元来は3月21日。20日連夜。
5月5日	菖蒲の節句。大将人形などを飾る。	団子(粽団子。節句団子)。粽の笹は雷よけ。
5月	田植。豊作の祈願。	田圃で飯と煮メで食事。田植歌をうたう。
6月7日*	薬師祭。七夜祭。	7月7日に移行。眼病の者の絵馬奉納。団子。
6月17日*	観音祭。十七夜。子供組が準備。	明治半ばに7月17日に変更。移転で消滅。団子。
6月23日*	地藏祭。二十三夜。子供組が準備。	7月23日に移行。石井坊で行う。団子。
7月15日	夏祭り(祇園と兼用)。下宮で御籠。	弁当・酒肴を持寄り饗宴。博多祇園見物に行く。
7月1日*	盂蘭盆入り。	仏前に、ホウズキ, 盆花, 果物, 落雁。団子。
7月初申日*	山王祭。神官の神事。	下宮境内の社。青年老年壮年のみ。女性は不参加。
7月7日	七夕。笹飾りを6日晚から用意。	祭壇に供物。清書を掲げる。女性は糸枠。団子。
7月7日	田褒め。早苗洗髪。サナボリ。田巡り。	早苗(田植の三把)を荒神の竈上に置く。団子。
7月7日	風止め相撲。大人の相撲大会。	現在は若杉山を水源とする村の小学校の子供相撲
7月竿	七夕。物干竿や衣紋竿を造る。	竿に衣服を竹の根元からも穂先からも通せる。
7月第一日曜	山開き。神官祝詞奏上。山の神を祀る。	旧楽園の前の広場。山の神の祠。
7月13日*	盆縄編み。夕方に迎え火。子供組は葛蔓を刈り集める。初盆は御詠歌。	現在は8月13日。初盆は各戸から素麺と麩を贈り、 当家では灯笼を掛けて荘厳。明王院の僧侶の読経。
7月14日*	盆客。綱引。盆踊。若衆組はニワカ。	現在は8月14日。綱引きは昭和10年代まで。
7月15日*	盆客。綱引。盆踊。若衆組はニワカ。	現在は8月15日。精霊送り。13-16日殺生禁断。
8月1日	八朔。短冊に菓子と団扇を付ける。	女子は土人形と団扇を贈る。早稲の初穂が実る頃。
8月15日(旧)	中秋の名月。	月に供える。団子。
9月15日(旧)	芋名月。	豆と芋。団子。
9月19日*	オクンチ。宮座入り。氏神の祭り。	現在は新暦10月17日。甘酒, 餅(オクンチ餅)
秋彼岸(9月)	墓参。	団子。餅(ぼた餅)。
9月29日*	神渡し。若衆の行事。出雲への神送り。	明治末年中断。10月29日に変更し, 昭和30年代に 消滅。下宮で火を燃やし酒を飲み一晩中騒いだ。
10月1日	注連おろし。神官の祭典。	宮座当番座元宅。宮座の者が各所に注連をはる。
10月	駄祈禱。押石川で竹に藁苞作り祈禱。	牛馬供養。飼育者が順番で当番制。明治末年迄。

表2 続き

日付	行事名	内容
10月亥日*	亥の子。稲の刈り上げ祝。	鍋墨を女性につけ魔除。臼の上の箕に生大根。餅。
10月16・17日	秋季大祭。下宮で神嘗祭。宮座入り。	神楽。餅。稲の収穫は新暦10月末～11月初旬。
10月第二日曜	奥之院・若杉荒神柴燈大護摩供。	昭和55年(1980)に開始。
秋土用	荒神祭。天台宗法印の盲僧の琵琶。	供物は米麦の初穂、小豆飯。餅。
11月丑日*	お白様。耕作の神が帰る。	臼の上の箕に供物と柴。土産に餅を持たせる。餅。
12月24日～25日	煤払い。	豆腐と蒟蒻を作る。24日は鏡餅あげ。
12月27日～28日	餅つき。上宮では28日は御鏡開き。	29日は「苦の餅」といってつかない。
12月31日	大晦日。蕎麦祝い。借金返済。徹夜。	野胡桃を焼く。年木の櫓を炉につぐ。丑三つ時迄。

*は旧暦の表示で大半は一月遅れとなった。②(旧)は月齢で行う行事である。③団子と餅を作る日については、『篠栗町史 民俗編』1990: 56-57 [西 1981: 76-77] で補足した。④太祖神社の祭日は、春季大祭が4月14日に近い日曜日、秋季大祭は10月16日に近い土曜日に変更されている。

③ 田の神と山の神の交代

2月の丑の日にお白様と呼ばれる耕作の神がやってきて、霜月11月の丑の日に帰るといふ。「下り丑」と「上り丑」という言い方もある。土間に臼を出し、その上に箕を敷いて一升枧に白餅と小豆餅を詰め、酒を置いて東向きに供える。農作業の期間は村に滞在して守護するとされ、祭りを怠ると守護しないという。また、神送りに土産の餅を供えないと、家の子供をユルリ(爐)に蹴込んで昇天させるという恐ろしい話も伝わる[合屋 1957: 177]。牛が神の乗り物なので丑の日に祀るのだという。牛は、春田すき、麦しりかえし、田かき、運搬など農作業に頻繁に使われ、家族の一員のように慈しんでいて、農耕の守護と結びつくのは自然である。お白様の由来は、臼が食べ物を作る用具で、空洞に神が宿するという意味があり、ウシとウスは音が近く観念連鎖が働いた可能性もある。村人を守護する民俗神は祠も社もなく季節に応じて去来するのであり、氏神の太祖神社の祭神とは別の次元で人々を守護する。お白様は、春になると山の神が里に下って田の神となって農耕を守護し、秋の収穫後に山に帰るといふ日本各地の民俗と共通し、この地域では田の神がお白様と呼ばれているのであろう。亥の子も春2月と秋10月の二回祀り、神の去来を祝う習慣があったという¹¹⁴。10月下旬から11月初旬にかけて稲の刈りとりがあり、五穀神、お白様、亥の子は農耕守護の作神の祭りであったが、生活の変化で衰退の傾向が顕著である。

④ 農作業に合わせた神祭り

農耕に関わる年中行事は、季節の動きと連動し、農作業の過程に従って展開している。春は、4月15日の五穀神の祭りに始まり、4月の麦の収穫時の作つくりの祝い、5月の田植えの祈願がある。夏の行事は7月7日に集中し、田圃に向かって大声で田唄を歌う田褒めを行い¹¹⁵、早苗洗髪として五月田植えの三把を荒神様を祀る竈の上に置く。この日は若杉山を水源とする地域の子供相撲と風止め相撲もあり、稲の成長が本格化する時期に集中して豊作を願った。7月の盂蘭盆は麦の収穫祭の様相があり、この時期は天候不順や虫害に対する祈禱が行われ、8月は治風防災で相撲が奉納されるなど¹¹⁶、農作業には大事な季節であった。

秋になると収穫感謝の意味が強まり、9月19日のオクンチ(10月17日に移動)、9月29日野火焚き、10月注連おろし、10月駄祈禱・牛馬供養、10月の亥の子と続く。秋土用の荒神祭は、米と麦の初穂と小豆飯を竈の上の荒神に供え、食物が十分にあることを感謝する。盲僧(座頭。天台宗)を頼んで¹¹⁷、

竈の前の土間に筵を敷き、琵琶を弾じて「荒神経」や「じしんきょう地神経」を読誦してもらう。家ごとの竈神の祭り（荒神祓い）は、十二月上旬から三月中旬まで続く。竈の荒神の前に注連を張り、藁苞に御幣を立てて祀る。藁は稲の苗取りにのぼせ藁（苗を結ぶ藁）として使う。盲僧は荒神に合わせて井戸で水神の祭りも行った。荒神は火に関わる荒ぶる神とされ、土を司り農耕の守護神でもあった。

一般には、若杉では、農作物としては、米は余り作らず麦を多く栽培した。米食だけを食べるのは、正月・盆・お祭り日くらいで、通常は米と麦を混ぜて食べていた〔西 1981: 70〕。稲作では4月から10月が農耕期であり、若杉でもお白様が2月から11月の間は村に滞在して、耕作の神の守護を受けるとされ、収穫感謝の秋祭りが年間最大の祭りであった。行事は季節の運行と農作業に対応し、米の農耕サイクルの影響が大きい。年中行事の主な祭りには、餅や団子を供え、日常と異なり気持ちを新たにす¹¹⁸。

⑤ 氏神の神社での春祭りと秋祭り

太祖神社は村の氏神・産土神を祀っており、春と秋の年二回の大祭が下宮で開催される。季節は農耕期の始まりと終了に合わせていて、オクンチと呼ばれる秋の大祭が盛大で、相撲や芸能も奉納されて賑わった¹¹⁹。漢字で「おくんち御宮日」を充てる所もあり、氏神の大祭と認識されている。明治31（1898）年の銅版画『太祖神社全景之圖』（図4）では、春は3月14日、秋は9月19日と記されているが〔清水 1898〕、その後、太陽暦に合わせて現行の4月と10月になった。現在は、春秋には祭典と共に神楽を奉納して、祭りを盛り上げる（後述）。4月の神楽は昼の奉納で、14時からオコモリと称して公民館で直会をする。昔は楽しみで、減多に食べない卵を食べたという記憶が残る。今はひたすら食べることに終始する。秋の神楽は夜の奉納で、ヨドノバンと呼ばれる宵宮である。4月14日と10月16日が奉納日であったが、現在はその日に近い4月10月の第二土曜頃である。祭りの準備と片付けは「みやざ宮座」が奉仕して、しんぼく幟の上げ下げ、しめなわ神木や神社の注連縄張りなどをしてしたが、村内の五つの地区の廻り番が変わった。春と秋の大祭は、村全体の年間最大の行事である。

⑥ 十七夜と二十三夜

若杉山の中腹で二つの小川の合流点の上部に観音堂があり、集落の上部に位置する。堂内には元禄年間奉納の千手観音と、阿弥陀仏を合わせて祀っていた。本尊千手観音は善無畏三蔵による三国伝来の守護仏とされ、村人から深く信仰されていた¹²⁰。明治半ばまでは陰暦6月17日に「観音祭」を挙行し、改暦後は7月17日になった。子供が観音堂を万灯で飾って団子・菓子・果物などの供物をあげ、女性が主体で観音経を唱えて参籠し、「十七夜」の月待ちとした¹²¹。観音堂の東側には石井坊があり、特に屋敷の中にある地蔵は村人の信仰を集め、6月23日は「地蔵祭」として子供が地蔵堂を万灯で飾り、団子・菓子・果物を供えて「二十三夜」の月待ちを行った¹²²。観音祭と地蔵祭は共に子供組（7・8歳から15歳まで）が準備や清掃を担当する決まりである。現在は地蔵祭に子供が集まる程度になっている。

神仏分離で寺院は衰退したが、観音と地蔵は「月待ち」の行事として維持され民俗神として生き残った。なお、かつて中堂と呼ばれた高尾の薬師堂は上約三丁にある。この一帯は、民衆が現世利益を願う薬師・観音・地蔵を祀る堂宇が集っていて、各堂は旧暦6月の7日、17日、23日を祭日にして（現在は7月）、集落上部の独自の祭祀空間を形成していた。かつての女人結界もこの地点にあり、上部の浄域と下方の集落の境界をなし、中堂や中宮に当たる。神仏習合は姿を変えて維持され、伝統の連続性の根強さが窺える。

6. 神楽の成立と展開

(1) 神楽の導入

神楽は近代になって太祖神社の祭りに新たに導入されて、「太祖神楽」として根付き、現在では民俗芸能として継続している。春の大祭（4月14日に近い日曜日）は11時から下宮で祭典の後、12時から13時30分まで神楽殿で神楽である。秋の大祭（10月16日に近い土曜日）は17時から祭典の後、19時から20時30分まで神楽を奉納する。かつては春の例大祭は4月14日、秋は10月16日が奉納日であった。

太祖神社に奏楽や神楽などの芸能を取り込む動きは、明治以降の国家神道への展開に伴って起こった。明治26年（1893）に奏楽の伝授を受けたことが始まりであった。下宮の屋根変えを行った時に、工人で福岡市馬の狩野久治郎が奏楽の技に優れていたため、安河内善次郎、安吉、三宅仙太郎、合屋武雄、合屋市郎、三宅甚太郎、三宅作太郎、大塚鹿吉などの当時の青年が師事して、横笛、箏、太鼓などの役割を決め、馬頭、越天楽などの舞楽の曲を習得して祭典に奉納することになった。畑信一から再伝授を受け、香椎の浜男在住の本郷与吉を迎え、安河内往太郎、大塚甚次、深沢利太郎などが教育を受けた。祭典ごとに白丁姿で烏帽子をつけて奉仕することになった。

一方、神楽は大正3年（1914）に天皇の即位祝賀の神事を行って神社で参籠した時に、記念事業として、保存することを主旨にして発足した。明治維新によって、糟谷郡の社家に伝わっていた筑前神楽の神楽座が廃止され¹²³、廃絶の危機に見舞われたので、篠栗町尾仲の老松神社（永正年12年（1515）創建）¹²⁴の神官の佐々雪が復活を図ったという。若杉側の受け入れは内川道方（現宮司の父）であった。佐々雪が師となって氏子に伝授した。安河内吉太郎、三宅時次郎、合屋栄太郎、合屋梅吉、合屋亥之吉、大塚文太郎、深沢往太郎、安河内往太郎、合屋敬造、深沢利太郎などが、合屋九衛門宅で、毎夜、伝授を受けた。

(2) 神楽の内容

舞神楽と面神楽の二様式が根幹である¹²⁵。楽人は大太鼓、横笛、鑊（土拍子）で演奏する。舞殿は四方柱に五色の幣をつけた榊の注連を飾り、天井中央には、赤・青・白・黒の幣をつけた榊4本を十字に組み、中央に開扇二本をつけた天敷を吊る。一人舞の場合は必ずこの下で舞い始める。演目は、舞神楽七種、面神楽（物語舞）五種の計十三種目に「湯立」がある¹²⁶。演目の内容は以下の通りである。榊舞（一人舞）、御和幣舞（二人舞）、五行、久米舞、蓼目舞（弓）、平手舞（四人舞）、四剣舞（四人舞）、手草舞、蛭子舞（恵比須舞。鯛釣り）、天孫降臨、龍都（山幸彦・海幸彦）、磐戸、異国降伏（磯良）、湯立を順番に奉納する。特に、最初の榊舞、御和幣舞、五行の舞は「三神楽」として、奉納の際は必ず順序を違えずに挙行する決まりであった。久米舞以下は、適宜に按配して舞い、最後に磐戸で岩戸開きを演じて終了する。もし、異国降伏（異国征伐）、つまり油断大敵の舞を奉納する時には、庭火の神楽として岩戸開きの前に演じる。ただし、通常は「神主の舞」とされて演じることは稀であった。岩戸に巻いた布を願い受けて腹に巻くと安産になると言われ [『篠栗町史 民俗編』1990: 114]、民俗として根づいていった様相がある。

舞神楽の基本は、榊舞で右手に榊、左手に鈴を持ち、通常は中堅の上手な人が舞う。蓼目舞と四剣舞は動きが早く所作が荒々しい。四剣舞は足を踏み鳴らし中央と四方を往復する。蛭子舞は恵比寿が主役

で、釣竿で祈願成就の奉納酒を釣り上げ、最後に鯛釣りをを行う。途中で紅白の餅を撒いて参拝者に配る。採り物は、五行は五色幣、久米舞は米と折敷、手草舞は笹、平手舞は扇を持って舞う。神楽の最後が岩戸開きであり、伊勢に祀られる皇祖神の天照大神を迎え祀ることになり、明治以降の国家神道の皇室重視の動きと合致する。村祭りのオクンチは、天照大神を祀る伊勢の祭祀に合わせて神嘗祭に変更されたことと同様に、神楽の導入は国家神道の影響を被りつつも自らの歴史に権威を施す効果はあったであろう。神楽は村人の新たな精神的な拠り所となって根付いた近代の民俗とでも呼ぶべき現象である。教本としては、『御神楽本末』^{おみかぐらほんまつ}があり、直方の神官が著わしたとされる。

太祖神楽は、福岡県文化財指定（昭和35年（1960）3月19日）、後に福岡県無形民俗文化財（昭和51年（1976）1月24日）となった。地元を離れての公演として、昭和34年（1959）1月17日に中国・四国・九州郷土芸能大会に出場し、昭和38年（1963）10月15日には九州代表として神宮奉納第6回全日本民謡踊大会に出場して、伊勢神宮で四剣舞を舞った。この時は5～6日滞在して各地を回って奉納した。

その他に出向いた所として玄海島があり、ここは縁起を担ぐので熱心に見る人が多く、昭和38年9月頃から昭和40年頃まで興行を行った。一晩泊って境内ではほぼ全部を舞ったことがある。その後、島では大漁が続いたという。神楽には自然界に働きかける力があるとされる。また、琵琶湖の畔の能登川町^{のとがわ}に招待されたこともあったという。文化財に指定され、その権威を背負うことで、地元止まらず、各地に出向くことになり、相互の交流を通じて、神楽を演じることの自覚が高まり、文化資源として活用することになった。奉納や信仰からイベント化への途を歩んできたのである。

(3) 神楽の維持と保存

神楽の維持と保存に関しては、太祖神楽保存会がその役割を担う。以前は神楽座と呼ばれたのを、昭和51年（1976）の文化財指定を契機に保存会と改称し、会長は神社の氏子総代と兼務することになった¹²⁷。会員は12-13人であるが、17-18人いないとうまくやれないといい、後継者難が続いている。2004年2月以降は、稽古参加者が10人ほどになり、2005年は7～8人に減ったが、これは最低限の数である。若杉の子供（7-8歳から15歳）は2008年現在で4～5人しかおらず、入会者は2007年に2人、2008年に1人であった。資格は若杉の本村の在住者（72～73軒）の長男筋に限定し、女性は入れない。入会しても10人のうち7人程度が残る。

内部は神楽組と雅楽組に分かれ、親が神楽ならば息子は雅楽を習得して、芸の伝達がうまくいくようにする。一家の者は同じものに属さない。但し、親が死亡すると、雅楽から神楽^{かがく}に変わることもある。雅楽組は年間7回の祭典の時にも出る。会員は通常は10年ほど続けて次の人に譲っていたが、最近は無手不足で、20年も30年も続けるようになった¹²⁸。通常は20歳から始めて15年間ほどで、全盛期は36歳くらいという。若杉の舞は激しいとされ、15分も続く舞もあって、年取ると息が続かない。最近では宮ヶ岡地区の人々も加わるようになり、少し範囲を広げた。経験者は全てで70人位になるのではないかという。かつては農業に従事していて、山付きの家も多く、山仕事もしていたので時間に余裕があり、昭和31-32年頃は、雨が降れば、仕事がないので、朝から練習し、夜も毎晩やっていた。正月・三月・四月、秋など年間6ヶ月は常に練習を行った。練習は2ヶ月間毎日行ったこともある。現在のように、一晩か二晩では復習くらいで、前に進まない。

現在の演者の世代の師匠は三宅時次郎で、安河内徳太郎と合屋颯郎と共に戦後に神楽の消滅を憂いて戦前の神楽座の再興を図って昭和27年（1952）ごろから教え始めた。旧座員には戦死者も多く存続が

危ぶまれたが、現在まで継承されている。三宅時次郎は舞はせずに、チャンペラを打って教えたが、神楽本は暗記していて、伝承者として優秀であった。現在は、外での仕事が多いので早くは帰れず、夜勤もあって練習は十分ではない。近年の状況は、春の場合は、3月から土曜日・日曜日ごとに公民館（辻上）に夜7時30分頃に集まって10時・11時まで続く。秋は9月に入ると本格的に練習を開始し、十三番のうち十二番は出来るようにしてきた。演目のうち「異国降伏」は「神主の舞」なので演じない。現在の演目は榊舞、御和幣舞、五行、暮目舞、平手舞、四剣舞、磐戸、蛭子舞の八番で、五行は余り舞わず七番止まりである。榊、御和幣、久米、四剣、磐戸、蛭子は必ず行うという人もいた。五行は木火土金水の神をかたどって舞い、科白が多く問答や掛け合いがあり、中臣が司会役を務めて、1時間30分程度かかるので、2・3回しかやっていない。玄海島では五行を演じた。幣束みてぐらと鈴を持っての4人舞で、位置は東西南北になる。この時の神楽興行では、建御名方神たけみなかたのかみ、鹿島、善駆（年寄り）、猿田彦命さるひこ、天鈿女命あめのうずめのみことなどを出した。会長が磐戸の中の天鈿女命を舞った。磐戸は、降臨（高天原から下る）に続いて演じる面神楽で、天鈿女命が岩戸前で舞い、手力男命たじからおのみことが岩戸を開くという筋で最低でも8人が必要であるという。10年ほどの休止を経て、2006年の秋の大祭で復活し、現在は秋には磐戸を行うので、祭りは1時間程度伸びている。2005年の春の大祭では、榊、暮目、四剣、蛭子の舞神楽のみ四番の奉納であった。秋の大祭には御和幣舞、平手舞、磐戸の三番を演じて、計七番の舞を行う。従来は面神楽中心であったが、衰退してきた。

神楽の導入は神社祭祀を活気付けて新たな「伝統文化」として定着した。特に文化財の指定は評価を高めて太祖神社の立場を強化する効果があった。創られた伝統ではあるが、春祭りと秋祭りの双方に演じられることで、現在では年中行事の中に溶け込んでいる。

7. 社会組織の変化

(1) 戦前の動き—年齢階梯制の解体—

若杉の集落は近代以降、大きな変化を遂げた。その変化の諸相を社会組織のあり方を主体に見ていく。若杉では江戸時代からの年齢階梯制が明治末年頃までは機能しており、子供組（7・8歳から15歳まで）、若衆組わっかし（16歳から25歳まで）¹²⁹、壮年組、中老年組に分かれていたという¹³⁰。年齢階梯制は近代になって再編成を繰り返して変貌し、特に青年から大人の組織に対する国家の関与が強まっていった。大きな動きは以下の通りである。

第一の動きは、明治22年（1889）の「若杉同盟倶楽部」の成立で、町村制実施に伴って年齢階梯の組織を再編成し、16歳から25歳までを若衆組と定め、「会員制」として、安河内平右衛門宅にて発会式を行った。当時、若衆組、壮年組、中老年組は、一号組、二号組、三号組と呼ばれていたが、若衆組を軸に、壮年組と中老年組と協同して村の運営に携わることとした。祭りの主役は若手で、若衆組は、豊年踊りや盆踊り、博多ニワカ（盆ニワカ）を演じた。若衆組は時間があれば「若者宿」に集まって、太鼓・小太鼓・鉦・笛などの練習に余念がなかった。婚姻に関しても自主的統制力を持っていたが、村内婚¹³¹が変化して通婚が広域化するに伴い機能が失われたという。一方、少年組は、地藏祭り、観音祭り、そして盆の綱引きを担当していた。

第二の動きは、生活改良運動の一環として「青年会」が組織されたことで、日露戦争（1904-05）後に、「若杉同盟倶楽部」の主体である若衆組が、「青年会」となった。その役目は、部落内の公事奉仕、特に消防・治安・祭典の執行である。これに合わせて、子供組は「少年団」に改称され、小学校入学か

ら高等小学校卒業までと年齢に合わせるようになった。壮年組と老年組は顧問格になる。戦争の展開に伴って、銃後の組織化に従来の若衆組が利用されたのであり、行政や教育からの統制の動きが強まってきた。

第三の動きは、大正2年（1913）4月の「勢門青年会」の成立で、組織の範囲を広域に拡大した。勢門村全体の小学校卒業後の15歳から25歳までが会員となることが義務付けられた。同時に、郡内全町村の青年会を合わせた、「糟屋郡青年会」が組織されて郡長が会長になった。主な役割は、道路や溝渠の修理、体育会、講演会の開催など社会事業が主であった。大正3年には「婦人会」が創設されて社会奉仕事業を展開した¹³²。同年には「女子青年団」も成立し、大正6年に改組されて、15歳から25歳までの未婚女性の全員加入による「処女会」¹³³が発足し、修養団体として婦人会との協力を深めた。銃後の組織化は男性だけでなく、女性にも拡大したのである¹³⁴。

第四の動きは、「青年会」から「青年団」への移行である。これは、文部省学務局が発令した「青年団訓令」（大正4年9月）に基づくもので、大正5年（1916）に「勢門青年会」が改称されて「勢門青年団」となり、同年5月に総会を開いて、団員年齢を15歳から25歳までとし、団長・役員を団員中から選定して、村長、学校長、有志先輩を顧問とし、本部を公民学校内に置いた。国家の統制が強化されて村落の内部に及んだことを意味する¹³⁵。昭和に入ると軍国主義体制を支える基盤となり、軍事訓練が進められ、戦争遂行の中核を担う末端組織に組み込まれた¹³⁶。

第五の動きは、大正12年（1923）の「若杉発展期成会」の成立である。明治22年（1899）以来継続してきた「若杉同盟倶楽部」を改組して、会員を青年に限定せず年齢に拘らず入会できるようにした。「若衆組」→「青年会」→「青年団」と変化してきた組織をより開放的にして、時代の変化に対応し村落の「発展」に寄与する意図を強めた。年齢の限定を外して自由になり、「発展期成」の名のように、地域振興を図る組織として活動し、観光施設である若杉楽園ホテルの開設に尽力した。

総じて、村落の社会的基盤は、既存の組織を核としながらも、時代の変化と共に徐々に内容を改めていくと共に、行政からの指令に応じて、内容や名称を変更し、広域の地域との連携を確立してきたことがわかる。大きな流れは内部から外部への志向である。

(2) 戦後の変化—若杉霊峰会—

戦後の若杉で大きな活動をしている組織は「若杉霊峰会」である。大正12年（1923）から続いていた「若杉発展期成会」を改称して、昭和29年（1954）4月17日に発足した¹³⁷。「霊峰」を名乗ることによって、若杉山の山岳信仰の歴史の維持・存続に強い願いを籠めた意志があった様子がうかがえる。また、戦前の一時期は組織の全てが部落会に統合されたが、機能を分離して戸主を単位とする組織にして、「若杉発展期成会」の会長は区長の兼務であったのを、霊峰会では独立させて新たに会長を置いた。会長は合屋姓か安河内姓のどちらかの家に限定されていて短くても二期（二期二年）は務めている¹³⁸。合屋姓は岳城山にいた杉藤正一族の流れを引く村の草分け筋とも言われ¹³⁹、安河内姓は旧庄屋筋の家系で三つの流れがあるとされており¹⁴⁰、双方の家筋は、藩政時代からの社会的権威を背負っていると見られる。会員は2008年現在48戸で、入会資格は昔から若杉に居住していた家から一人ずつ出て、長男筋に限る（新規の者は権利のみ）¹⁴¹。中心となる役員は五名で、規約に従って¹⁴²、合議制で運営する。現在の若杉区は本村の他に、若杉団地120戸、今里団地80戸を含む大きな地区であるが、団地居住者には会員の資格はない。霊峰会会員の48戸は太祖神社に奉仕していたかつての「宮座」のメンバーと重

なっており、若杉を支える社会組織の根幹であった。「霊峰会」は実質的には「宮座」の近代版なのである。この組織はヨソモノを入れないことに特徴があり、若杉の内部の伝統と財産を守る目的意識が強い。

会の機能は若杉山の奥之院の維持・運営と、山の財産の管理、特に山林の手入れや間伐を行うことである。間伐は2～3月頃に行い、会員の事情にもよるが、10人くらいで10日間かけて行い、日当を払う。山林の三分の一が杉で、多くは70～80年、若くて50年なので、2006年にヒノキの植林をした。主な支出は、山の手入れ、草刈（夏と秋の二回一日で48人全員）、公園のごみ拾い、公衆トイレの清掃（町が支払い）、道の整備（町が行う）、奥之院の建物の管理などである。

奥之院の土地は神社所有だが、霊峰会が実質的に管理する。一部国有地からも借りているので、地代は熊本営林署から神社に請求が届くので、霊峰会にまわして、会から振り込みで支払うという。国有林の手入れは霊峰会が行う。霊峰会から神社へ維持費を出していた時期もあるが、現在は単独で経営する。カブトノモリ運動公園の土地は神社所有地であったが、売却して資産を取り崩し神楽殿を作る基本金とした。

霊峰会の収入は奥之院の売店の御札や御守りの売上と御賽銭である。売店の販売は参拝者の減少で現在では昭和30年代から40年代の最盛期の五分の一程度になった。4月20日・21日の護摩には昔は参拝者が沢山きたが、現在は少ないので、御賽銭は期待できないという。山上の店番は霊峰会会員の48戸の各家の奥さんが構成する「若菜会」（定年後の人々の集まりで50歳以上）の人々が交代で行う。金剛頂院の羽坂孔全が、毎日山に車で登る時に、公民館前の前から「若菜会」の人々を乗せて奥之院まで送る。担当者は総計13人で、3ヶ所（駐車場、上宮、奥之院）の売店を交代で担当し、最も売上げが多いのは奥之院の店であった。常駐者は5人で、365日休みなしで営業し、土曜日曜は金剛頂院の羽坂孔全もいるので6人であった。2008年3月の参拝者は少なく、一日ほぼ200人程度と推定していたが、実際は70-80人であった。10月の柴燈護摩の時は護摩板1枚につき、お土産に饅頭を参拝者にあげるのが決まりで、400個用意したが、150個くらいしか出なかった。2009年には3軒の店のうち上宮の店を閉めた。2009年は、シーズン中は12人が交代で働き、オフシーズンは4人が担当する体制とし、土曜日曜だけ開けるようにした。仕事は物品の販売とお堂の管理で、堂内の掃除や花の水かえ、四つのトイレ清掃などをする。草刈りも仕事で、役員報酬はある。かつては平日の当番は出にくい時もあったが、土曜日曜になったので出やすい。ただし、縁日の毎月21日は奥之院月例護摩供を厳修しているが、平日の場合には、役員が出ないことがある。

霊峰会の収入には、電力会社や電話会社が山に設置した鉄塔（送電塔）の敷地料や無線中継所の使用料が加わる。山頂のマイクロ・ウエーブには、MCA（九州移動無線センター）、九州電力、日本テレコムが三社が入っており、土地は神社名義なので神社の収入になる¹⁴³。最初の鉄塔は昭和30年設置の九州電力¹⁴⁴、その後KDD、日本テレコムからも使用料を貰うようになった。林業が経済的に見合わない現在、現金収入として貴重である。

山は神社の所有で、管理は全て霊峰会が行うが、会は独自の財産は持っていない。江戸時代には黒田長政が神社に下賜した3000坪の山林と土地があって、神社維持の経費にあててきた。明治の神仏分離と廃藩置県の際に、修験の石井坊と神職の佐々家が神社の土地の増加と確保を画策したので、神社の財産を維持することができたという。明治以降は寺地は取り上げられ、入会地は国有地や神社地になるなど大きく変動した。結果的に多くの土地が国有林（第17林班）となり、神社所有の山林は減少して維

持されてきた¹⁴⁵。昭和32年頃には若杉には国有林約100町歩、区有林約50町歩、財産組合数百町歩があったという。

現在の山林は、①神社（16町歩。米の山を含む）と奥之院（5町歩）、②国有林（16林班で熊本営林署が管理）¹⁴⁶、③部落共有林（3町歩）で構成されている。苗は杉の枝としてサンホを2年ほどして植える。最近では上部の道がヘアピンカーブする場所にサンホした。森林組合は若杉に一つあったが2000年に絶えた。5-6人は営林署の仕事をして、宗像の人もきて山仕事をしてきた。財産区を造り山の流木の管理も行う。昔は部落の共有林は村人が交替でデカタ草刈などの仕事で、下草をミシン切りにした。草刈場は米の山付近にあり、10町歩から15町歩で、以前は牛馬の放し飼いをしていた。各場所ですら草は納屋で干しておいた。この時は、通常の日当の半額分程度を負担した。3000円から5000円のうち1500円を負担する。共同作業に出る人は10000円、出ない人は5000円である。初めは無報酬で出ていた。雪害の時には霊峰会が手入れをする。間伐は補助金で行うこともあるが、日当は十分な金額とはいえないので霊峰会で予算を組んで支払う。

総じて、霊峰会の主な仕事は、奥之院の経営や管理と、神社所有の森林や土地などの山の手入れ、つまり、宗教施設の維持と財産の運営という祭事と俗事を兼ねて行うことである。役員は太祖神社の氏子総代とは別の人々であるが、若杉在住者に会員を限定しており、神社の旧宮座の構成者と同じで、幅広い活動を行える組織になっている。若杉の人々にとって山は大事な財産で、霊峰会はその管理と運営の中核にある地縁組織として、篠栗町の行政組織（若杉地区）の中にあつて、行政とは独立して活動する。ある意味では、神仏分離で解体した宗教組織の運営を、近代的な形で受け継いでいるとも言えるし、若杉という地域の社会統合を担う組織であるとも言える。全戸の長男筋の家長が参加義務を負うことは、若杉の共有する資源の維持・発展を平等性に基づいて果たそうとする強い意志の表れである。若杉山については、「霊峰会の会員の山」という意識が強く、山岳信仰に基づくだけでなく、この地で生活権を持つ人々が共有する山と認識されている。「山は誰のものか」という近代的な問いは、公共性を意識化し、歴史的連続性に基づいて再考を促され、生活の資源としての活用方法をめぐって、様々な思索と実践が試みられてきたのである。

8. 伝統の再構築

明治の神仏分離によって神社と寺院が再編成された。太祖神社は若杉集落が氏子となって維持する一方、奥之院は霊峰会の管轄となり、宗教組織は大規模な再構築をしいられることになった。しかし、社寺の担い手は若杉の住人の中では相互に共通し重なっているため、実質的には神仏習合時代との連続性がある。ただし、太祖神社の別当寺の石井坊は祈禱寺として残ったが勢いは衰えた。修験は明治5年に廃止されて再編成されなかったため往時の力を失い、若杉に大きな影響力を持っていた寶満山修験も解体した。こうした動きの中で、新たに縁起に基づいて金剛頂院や明王院などの寺院が創設され、若杉奥之院は単独ではなく、篠栗の霊場と繋がることで隆盛を見るまでに復興した。歴史と民俗は時勢の動きと連動して新たに創造され変化する。その伝統の再構築の実態を検討する。

(1) 若杉山の復興と「創られた伝統」—奥之院の変容—

奥之院は、若杉山の山頂近くの上宮の後方の八大龍王窟が中心で、「若杉の本尊」と言われる弘法大師を祀る。ご詠歌では「ありがたや高野の山の岩かげに大師はいまだおわしますなる」と詠唱される。

大同元年(806)に真言宗開祖空海が帰朝の砌に修行したとされて多くの参拝者を集め、堂内には弘法大師が神仏に供えるために湧き出させたという独鈷水があり、絶えることなく湧く靈験あらたかな水である。弘法大師の開創以前から住んでいたという八大龍王を祀り水との縁が深い。奥之院の水は「お神水」ともいい、1年たっても腐らないとされ、癌を治す効用があるという。蜂に刺された時、頭痛の時にもつけ、薬と一緒に飲むと効き目が増すとされる。20年以上毎月来て1升汲んでいく人もいる。根源は水の信仰である。

江戸時代末期に篠栗新四国八十八ヶ所靈場を作った時に、札所になる誘いがあったが、受諾しなかったという。「奥之院」の名称は江戸時代には使われておらず¹⁴⁷、明治時代の篠栗新四国靈場の再興運動に合わせて明治20年代に出現したと推定されるが史料はない。篠栗側からは、当初から八十八ヶ所札所の一つとして靈場の中に加わる提案もなされたが、独自性を主張して参加せず、靈場からは番外札所の位置付けである。

奥之院の名称の出現は明治時代に入ってからと推定される。若杉山の江戸時代末期から明治時代初期の状況を描く『郷社太祖宮境内見取図』には、遺蹟名が貼紙に墨書されているが、山頂部には奥之院の貼紙はなく、上宮、北山神社、八大龍王窟、善無畏塔、高野埜、上宮古宮と記されている。明治22年(1889)9月20日には篠栗靈場の最古の靈場巡拝図(荒巻幸右衛門発行)が出ているが、奥之院の名称は見えない¹⁴⁸。明治31(1898)年の銅版画『大祖神社全景之圖』には「奥之院」と記され、同書「糟屋郡」の項には「土俗之を奥之院と稱せり」とあり[清水 1898]、地元の呼称として定着していた。奥之院の名称は、明治29年の県社昇格前後であったのではないだろうか。篠栗新四国靈場は明治32年(1899)3月に高野山の南蔵院に寺格の移転を要請して靈場の総本寺とすることで、廃止の危機を乗り越えて再興を果たし、その後、弘法大師の信仰は一層盛んになって奥之院や独鈷水への参拝者は増加し、春と秋の篠栗新四国靈場の巡礼の季節には賑わいを見せた¹⁴⁹。若杉奥之院は、縁起に説かれた弘法大師ゆかりの山を「再発見」して、南蔵院と共に篠栗靈場の中核を担う場所になったのである。奥之院の名称は近代の創出にもかかわらず、縁起の権威や参詣者の巡礼の実態を通じて篠栗新四国靈場全体の中に溶け込んだ。戦後になっても弘法大師信仰は衰えず、巡礼ブームが訪れ、積極的な支持がなされた。昭和29年10月には新しい大師像の造像を富永朝堂師に依頼して、同年4月に開眼供養を行ったが、本像は昭和31年12月の火災で焼失し、再度造像した。昭和40年にも奥之院は火災にあったが再建を果たし、現在はコンクリート製の建造物になっている¹⁵⁰。本尊の像を新しく造像し、御堂は焼けても直ぐに建て直すなど、集金力と強い意志があり、信仰の力は衰えなかった。縁日は毎月21日で、こんこうちょういん金剛頂院の僧侶が午前10時から法要、10時30分から月例護摩供の内護摩を焚く。実質上の運営主体は靈峰会で、奥之院を管理するだけでなく、古堂に明治以降に再興した金剛頂院(真言宗)の運営にも関与し、役員は寺総代(5人で編成)を兼ね、寺の行事には靈峰会の人が参加する。相互に靈山を守って伝統の維持に努めてきた。

昭和40年代後半以降、参拝者は徐々に減少し、平成の初め頃(1990年代初期)から賽銭が減ってきた。かつては多くの人で賑わい、山上の「はさみ岩」を通る時には1時間もかかったという。参詣者は春3月が最も多く、3月7日・8日頃に学校の春休みを利用して子供連れできて、新四国靈場の札所巡りも兼ねて篠栗で泊る日程が多かった。若杉からではなく荒田から奥之院に登る人もおり、奥之院から荒田に降りて靈場を巡る人もいた。現在は大半が日帰りで福岡から車でくる人が多い。巡礼の季節も春とは限らず土曜日曜の参拝に移行してきた。長崎・熊本・八代などの遠方から来る。

奥之院の年間最大の行事は春季大法要で、4月20日・21日に行う。導師は金剛頂院の住職が務め、弟子で構成する「密厳会」が主体となり僧侶10人ほどで行う。明王院と文殊院は住職が加勢にくる。弘法大師の命日が3月21日なので月遅れで行い、金剛頂院では御逮夜みつけの法要が前日の20日に営まれる。篠栗町からは、町長・議員・観光協会が法要に列席し、町長と金剛頂院が挨拶をする。この頃は春の巡礼の季節にあたり参拝者で賑わう。春の法要は、特別のポスターを作って宣伝し、鹿児島までパンフレットを配るなど町ぐるみで力を入れている。ただし、近年は参詣者が減少し、平成16年(2004)からは大護摩供は21日のみとした。糟屋郡は旧村ごとに大師講たいしこうがあって春の行事には必ず参加し、通常は100～150人、多い時は300人が訪れていたが、近年は減少傾向にある。弘法大師は雨乞いに大きな力を発揮したとされ、糟屋郡の人々は雨乞いのために奥之院と大祖宮に祈願することが多かったという。平成18年(2006)は若杉霊峰会主催で「弘法大師奥之院るしやくご留錫千二百年法要」が4月20日午前10時から、奥之院駐車場・弘法大師尊像前で執行され、柴燈護摩を行った。引き続き、21日には内護摩を行った。同年5月28日には篠栗霊場を完成させた藤木藤助像の落慶法要、11月25日には城戸南蔵院駅前駅前で「篠栗霊場開創百七十周年結願法要」の柴燈大護摩供など、大きな行事が続いた。

秋の10月第二日曜日には、奥之院の遥拝所の北に道場を設営して、「若杉荒神柴燈大護摩供」を行っている¹⁵¹。本尊には三宝荒神を祀り、金剛頂院と明王院(養老ヶ滝)が合同で執行する。荒神は、昭和55年(1980)に金剛頂院の住職が長男と一緒に高野山の奥の荒神岳から特別に勧請し、米の山の山頂に祀った。立里荒神たてりといい八面荒神である。昭和57年からは荒神を本尊とする柴燈護摩を開始して、金剛頂院の下部で3回ほど執行し、昭和60年からは霊峰会が護摩の準備と行事を取り仕切ることになり、奥之院の遥拝所の北方の広場で行うようになった¹⁵²。元々の意図は、昭和48年(1973)7月に大水害があり、今後災害が起らないように願って柴燈護摩を行ったのが始まりとされる。当初は金剛頂院の住職と、明王院の弟子が主体で行っていたが、若杉霊峰会が取り仕切るようになり、村中の守護を願う開かれた儀礼になった。秋の柴燈護摩は信仰の新たな展開である。篠栗に巡礼が多く訪れる春だけでなく秋にも弘法大師留錫の地とされる奥之院を参拝する機会を作り出そうとしたとも言える。

近代になって若杉山は、篠栗の新四国霊場との一体性を強調することで、「奥之院」の鎮座する山として魅りを果たし、篠栗の原点とも言える権威性を獲得していく。篠栗の新四国はあくまでも本四国の「写し霊場」であり、弘法大師の来山伝承を持つ若杉山は「正統性」と「真正性」を持つ霊山である。若杉山は、豊富な伝承と伝説の地を配置し、「創られた伝統」(invention of tradition)を維持する「特別な場所」(topos)として残り続けたと言える。

(2) 寺院の再興—金剛頂院の成立—

奥之院の法要や勤行は、金剛頂院が担当し、時流に合わせて大きな変貌を遂げてきた。明治31年(1898)に古堂の勝泉院跡しょうせんいん¹⁵³に大門院として大師堂を建立し、弘法大師を祀って宿舎や鐘楼を再建した[合屋 1957: 53]。一説によれば、南蔵院ともいい、別称は「西野山奥院」で「西の高野山」と自負したとされ、現在の城戸南蔵院が再興に関わった可能性がある。その後の15年間は堂守を置いて管理した[合屋 1957: 131]¹⁵⁴。当時は寺院ではなく出張所で、仮堂だけであった。大正15年に金剛頂院の名称に改め、昭和15年に宗教法人登録をした。再興寺院とされるが、実際には新設の寺院と言ってもよい。ただし、開基は縁起に基づいて、弘法大師空海が留錫した大同元年(806)とする。寺伝によれば、空海は唐から帰朝した時に、善無畏三蔵の遺蹟を拝するために入山して、御住坊として高野塾に庵を結

び、108の僧坊を作り、金堂、鐘塔、宝蔵、温室、食堂などを整えて、女人禁制として栄えたが、火災や争乱で衰退したとされる。江戸時代は、若杉山は修験の石井坊を中心に仏事を継続してきた。幕末期の篠栗新四国霊場の成立に伴い、弘法大師礼賛と仏蹟再興の機運が高まり、若杉山が大師信仰と共に民衆の支持を得るようになった。

一方、若杉山頂の八大龍王窟は篠栗新四国霊場の再興と共に参詣者が増加し、篠栗霊場の奥之院として賑わった。明治末年に秋吉芳顕あきよしあきという修験の行者がこの地に住み着いて、法印と呼ばれ大正・昭和にかけて30年以上堂守をした。毎朝、奥之院に登って勤行を務め、多くの信者もついていたという。秋吉法印は大分県玖珠郡出身で、篠栗にとっては外来者であったが、弘法大師の霊徳に感銘して、四国八十八ヶ所を巡拝し、この地を住坊と定めて落ち着いたとされる。欄間に四国霊場八十八体の仏像を刻んで奉納した¹⁵⁵。晩年は八代に移って亡くなった。専門の僧侶が居ない小堂を修験の行者が維持し奥之院に奉仕してきたことは、民衆の支持があって実現できた。住職によれば、金剛頂院は若杉の「ムラの寺」として建立したのであって、現在も地域社会を守護する寺院の意識は残っているという。

村人にとっては、寺院の再興は悲願で、「若杉高野山」を建立する予想図も出来た。田代亮観たしろりょうかん（熊本出身）が山主になって、大正12年（1923）に成立した「若杉発展期成会」¹⁵⁶と信徒総代5名の協力を仰いで再興の運動に乗り出して賛助を求め、高野山管長の土宜法龍、高野山学監の丹生実栄など本山の役職者をはじめとして、宗教家、教育家、実業家、軍人、郡長、町村長、その他有志約100名から賛同を得た。そして、大正15年5月に真言宗若杉高野山金剛頂院布教所を建設した。大規模な寺院の建立はできなかったが、これが実質的な寺院活動の始まりである。当時の参詣道は、昭和5年から6年頃には林道が通り、トラック、タクシーも通行できた。その後、本格的な寺院の建立に着手し、昭和15年10月27日に落成式を挙行し、高野山管長など同宗の僧侶が参集した。当時の堂守の秋吉芳顕は昭和16年3月30日に高野山管長から表彰状を受けた。昭和17年10月に改築し、羽坂法順あさかほうじゆん（田川市伊田町出身。清弘きよひろ）の尽力と秋吉芳顕の助力で、高野山管長はじめ真言宗の多数の僧侶が参加して、落慶法要を行った。寺院の建立は、村の人々の熱意によるところが大きく、博多の東長寺49世住職の藤田紫雲ふじうんが多額の尽力をして中興の祖と言える。紫雲の息子の慈雲は、名前だけの住職を昭和21年まで務めた。奥之院が無人であったので、金剛頂院を昭和28年に宗教法人に正式登記し、横峯寺よこみねでらへの権利移行を防いだという話もある¹⁵⁷。法的な登記が維持存続に必要な時代になったといえる¹⁵⁸。横峯寺は明治時代後半に四国霊場の六十番から分転して建立されたが、その経緯は明らかではない¹⁵⁹。須恵の長澤家が管理していた。

戦後の金剛頂院はしばらく無住のままであったが、昭和21年8月に羽坂法順が臨時住職（特任住職）として寺院に住まった。昭和24年から長男の羽坂孔忍こうじんが正式に住職になり、現在に至るまで60年間務め、奥之院での勤行も維持してきた。明治末から奥之院を守ってきた秋吉芳顕の跡を継ぐことになった。若杉の人々からの期待や信頼もあった。堂宇は昭和30年2月27日に火災で全焼し、昭和34年に村人の尽力で再建した。息子の羽坂孔全が跡をつぎ、弟子は27人ほどいる（篠栗、宗像、筑後、久留米在住）。総じて、当初の寺院の運営は村が主体であったが、徐々に寺院中心に動くようになり、最近では信者中心になるなど、三段階の変化を遂げた。現在の信者組織は密厳会といい23人程度で、居住地は福岡・熊本・佐賀・大分などである。正月の修正会の祈禱（1月2日-4日）、4月の春大祭の淡島あわじま様の祭り（4月3日。現在は第一日曜）、7月20日の夏大祭の大護摩供、11月20日の秋大祭のお砂踏み年間4回は奉仕する。

現在の住職の羽坂孔忍（大正15年1月14日生）の話は以下の通りである。本人は昭和7年に父親が寺を建てたので、小学校の頃から跡を継ぐことを考えていた。得度は昭和13年3月に福岡市大橋の大乗寺（家庭裁判所の近辺）で行った。小学校卒業時であった。昭和12年の13歳の時に高野山の大円院に入って修行を始めた。高野山の中学校に入学し、寺から学校に通った。忙しいときは寺の加勢をした。ただし、昭和20年に大学は中退して、若杉に一旦帰った。高野山に通算で8年間いたことになる。昭和21年に父親が寺の住職となったので、同年に東京に出た。ただし、昭和24年に当地に戻って父の跡を継いだ。当時は弟と妹を含めて五人で生活していたが、ほぼ自給自足であった。麦、豆（少々）、芋、ジャガイモ、サツマイモ、サトイモを山中で作し、昭和30年まで畑仕事を続けていた。大半の食料品は自給で賄い、ニワトリを飼い、エサをやり、野菜を作った。山寺であったが楽しみもあった。街に下りるのは買い物に出る時で、味噌、醤油、魚、果物、酒（貰い物）などを手に入れた。田圃の肥料は農協からもらって家内と担いできた。祭りの時は重量が40キロにもなったが、三回ほど上と下を往復したこともあった。寺が忙しくなると畑仕事は出来なくなり、買い物に出るようになった。畑仕事は21年間ほど続けたことになる。

奥之院へは昭和35年頃から車で通うようになった。一般の人々が車で奥之院と山麓を上下するようになったのは昭和40年頃である。昭和35年から55年まで21年間、奥之院に毎日登ってお勤めをした。村人が二人ほど付いて歩いて登った。大祭でなくとも奥之院に8時から17時まで詰めていたが、現在は15時頃にかたづけて降りてくる。参詣者は篠栗の巡礼も含めて、近年は急速に少なくなったという。

(3) 寺院の展開—金剛頂院の現状—

金剛頂院の本尊は大日如来で、左と右に不動尊と毘沙門天を祀る。大日如来像は黒田長政の寄進と伝え、不動明王像は室町時代の作である¹⁶⁰。薬師如来と千手観音も安置してある。伝承では千手観音は、善無畏三蔵が当山に来た時に奉納した尊像だという。法要は毎月20日に定例護摩供を行い14時30分から弟子や信者さんが10-12名ほど参加する。福岡から来る人が多い。弘法大師の忌日は21日なので、前日の御逮夜に法要を行うのである。春の4月20日は大祭で、21日は奥之院で10時30分から大きな法要と護摩供を行い、沢山の参拝者がきていた。昔は真言宗の四種三昧の法要を行っていたが、現在は内護摩を焚くだけである。護摩の方が信者が集まるということで変わった。夏の大きな法要は、7月20・21・22日の夏祈禱で、参詣者は500人ほど集まっていたが、現在は250人程度である。三日間、施餓鬼をして、先祖供養と三界万霊の供養を行う。現在は「夏祈願祭」として、7月20日の一回だけになっている。夏祈禱秘法護摩を10時30分と17時の二座行い、五穀成就・悪疫退散を祈願し、引き続き千灯明大施餓鬼供で、各家の先祖供養と三界万霊供養を行う。昭和41年（1966）には「善無畏三蔵若杉山開基千二百五十年大法会」（4月6日・7日）を行った。平成18年（2006）には「弘法大師奥之院ご留錫千二百年法要」を行い、宝塔を建てた。大同元年開基という縁起の伝承は実年号として定着し、記念法要などで始原に立ち戻る根拠となった。また、総本山の高野山との交流、特に大円院との関係は、明治以後に古堂での大円院の再興を契機として生まれた。時空を越えた絆の結合や伝統の創出は伝承の柔軟な解釈に基づいている。

境内には聖天（歓喜天）、不動、観音、淡島を祀る堂社があり、道沿いに拝み屋さんが建てた聖宮¹⁶¹がある。聖天は、毎月七日間「聖天秘法供修行」を執行し、本寺院の特色ある行事になっている¹⁶²。大根を供え、真夜中に行う秘儀で人には見せない。夜中の0時に起きて水垢離をとって準備する。かつて

は滝の水で行っていたが、現在は水槽の水を使う。勤行は午前2時から4時の一座である。聖天供は頼まれなくても行う自行であるが、特別の祈願を頼む人もいて、毎月名前を書いて拝んで唱えている。正月は「浴油」で、仏像に鍋から油を注ぐ。2月から12月は「花水供」という。仏像の配置は、中央に聖天、向かって左に八面荒神、右手前に弁財天を祀り、不動・観音を併置して祀る。愛染明王と如来荒神も祀る。荒神は一日のみの供養で、月一回は聖天と一緒に供養する。若杉聖天は「福德開運、和合敬愛」の効験があるとされ、信仰すれば、家庭が円満になり、商売が繁盛するという。篠栗の中町には毎回お札を頂きにくる熱心な信者の慶田さん（60代）がいて、一緒に信者を連れて滝に入る。修行としては滝の存在は重要であり、篠栗八十八ヶ所霊場と共通する。

淡島堂は、豊受大神と淡島大明神を祭神とし、2月8日に針供養を行う。昭和16年に創建し、平成4年（1992）4月に再建した。縁日は3月3日であるが、太陽暦の採用で月遅れの4月3日となり、現在は4月第一日曜に祭典と供養を行う。参拝者は200人から300人で、北九州や熊本などからきているという。信者には篠栗の外部の人も多く、熱心に信仰している。

不動明王は境内の小さな滝の上に祀られ、滝では修行ができる。不動は六人の信者の女性がお金を出して建てた。滝は人工で、昭和30年代に石を積んで作ったが、よい出来ではなかった。その後に長沢亀吉（上須恵）が昭和37年・38年に作り直し、200年たっても崩れないだろうという立派な滝を作った。石は須恵から取り寄せて、職人を6～7人雇って作った。昭和38年（1963）3月3日にお滝開きと開眼供養をした。この日は大雪であった。お滝開きの前に正月から2月にかけて10日間の修行を行い、6～7度修行した。現在でも久留米から来る熱心な信者がいて、弟子達3人程度と前日にきて泊まり、朝早く滝行をする。

観音堂の本尊は十一面観音で、11月20日には堂内で四国八十八ヶ所「お砂踏み法要」を行う。本四国八十八ヶ所霊場から持ってきた回向の砂を、札所の1番から88番までと番外20番を加えて堂内の地面に敷いて順に踏んでいく。終了後には堂内でお経をあげて、最後に本尊の下の砂を持ち帰る。本四国の霊場は信者を連れて昭和30年代と40年代の二度、伊予鉄道のマイクロバスで添乗員つきで二週間ほどで巡った。住職は先達を務めて費用は無料である。

境内には沢山の石仏を祀っている。山中に放置された仏像を集めている。宇美の八幡にあった十三仏を引き受けたこともある。昭和17・18年（1942・43）に祀り手が亡くなった十三仏を持参した人がいて、秋吉芳顕と相談して淡島様と一緒に祀った。今でも祀り手が亡くなった時に祀りきれなくなるという仏を持ち込む人が多い。善無畏三蔵は来山時に十三仏の寺を建てたという伝承があり、この地には由緒がある仏として重視されている。

寺院には寺総代の役員が5人がいて「霊峰会」の役員が兼任し、経営にも関与してきた。元々寺の土地は村から無償で提供されたもので、昭和15年（1940）から宗教法人として制度化され、戦後に宗教関係法により昭和28年（1953）4月に寺の財産を集計して、新制度の宗教法人として登記して管理している。現在の若杉4番地2（1500坪）が寺有地で、四分の一は山林からなり、主として檜林である（1000坪）。寺が間伐など管理と運営にあっている。駐車場も寺の土地だという。正式に宗教法人になって以降は、霊峰会は寺の財産には関与しない。

篠栗霊場との関係では、「篠栗四国霊場会」という札所の組織に参加している。霊場会は篠栗霊場の「各札所の守堂者」と「若杉奥之院の代表者」を会員とする組織で、金剛頂院は後者の代表者として参加している¹⁶³。霊場会は、45歳以下は青年部にあたる「法青会」、45才以上は「法徳会」となって幹部

として活動する。金剛頂院は札所ではないが「法徳会」の会員である。「法青会」は会報を出して広報活動を行い、遍路道や道標の整備、篠栗霊場の寒行・四国遍路参り・高野山参りなどを行い、篠栗霊場と真言宗の普及活動をしている。金剛頂院は奥之院を管理する寺院であるだけでなく、篠栗霊場との相互関係を維持し、本山の高野山との関係も維持している。

金剛頂院は真言宗の寺院として奥之院を維持・管理する役割を持ち、若杉集落の人々、特に霊峰会によって支えられているが、独自の広域の信者のネットワークを持ち、多様な仏教民俗を展開している。明治時代の再興とはいえ、実質的には新たな寺院を創出したのであり、初期は修験によって支えられていたが、奥之院と一体になることで篠栗霊場との関係を深め、単に集落内部の寺院に止まらない形で推移してきた。弘法大師信仰に止まらず、聖天や淡島、観音と不動などの身近な仏たちの信仰を取り込み、滝行や四国巡礼のお砂踏み、本四国霊場の巡拝などを通して、民衆との接点を数多く持つ寺として活動してきた。また、金剛頂院は、九州に点在する弘法大師のゆかりの真言宗寺院を巡る「九州八十八所百八霊場」の第八十九番の札所である¹⁶⁴。これは昭和59年（1984）に弘法大師入定千百五十年記念として創設された新しい巡礼である。金剛頂院は地元を展開する篠栗新四国霊場の札所には含まれず、九州全域を信仰圏とする広域に繋がる独自の生き方を展開してきた。

金剛頂院は、施餓鬼供養は行うものの死者供養には深入りせず、あくまで祈禱寺として現世利益をもたらすことに徹する姿勢を一貫して保ってきた。現在の住職によれば、金剛頂院が守ってきた山頂の奥之院は「霊峰若杉」の奥之院であって、「篠栗霊場」の奥之院ではないのだという。若杉という古い歴史を持つ地域にこだわる自負が、金剛頂院を支えてきたのであり、若杉本村の「ムラの寺」の意識は残り続けた。この場合はムラは若杉の本村（部落）を意味する。金剛頂院は単なる真言宗の寺院としてだけでなく、重層的な民間信仰を累積させて、民俗社会の民衆の熱い支持を得てきた。しかし、若杉の住民や信者の高齢化が進み、活動はやや弱体化しているのが現状である。

9. 民俗の近代化

(1) 観音信仰の流動化

若杉山の中腹にあった観音堂の本尊の千手観音像（平安時代初期造像）を、村人は「若杉の本尊」と呼んで地域の守護神のように厚く信仰していた。また、観音堂は江戸時代後期成立と推定される糟屋郡三十三観音霊場の札所第一番の石泉寺とされ、郡内の各地からも参拝者がやっていた¹⁶⁵。本尊は石井坊所蔵の『堂宇記』（元禄17年）によれば、善無畏が招来した「三国伝来之瑞像」で、明徳3年（1392）の大火の時に空中を飛んで焼失を逃れ、天文6年（1537）に杉弾正忠重が修復したとある。観音堂は、元禄17年（1704）に再建され、明治初年までは草葺きで、その後に瓦葺とした。場所は村の内部区分では谷上に属し、五穀神下に位置して集落のやや上手である。修験の石井坊は、川を隔てた対岸の斜面にあり、屋敷内の地藏堂は村人の信仰を集めていた。女人門は近くの一瀬屋敷にあったとされ、『郷社太祖宮境内見取図』（図3）では観音堂の下手の「合流点」をその跡地とする。観音堂の周囲には、村人の篤い信仰を集める身近な仏が集中して祀られていた。石井坊の上部の押石には十一面観音を本尊とする普門院があったとされ¹⁶⁶、普門院の横手の山で、五穀神の祠から延びる支脈上に阿弥陀仏が祀られ、観音堂の少し上には高尾の薬師堂（中堂）があった。観音堂を中心とした一帯は、村人の信仰が凝縮する空間であった。

戦後の新しい動きは、新しい観音像を神木の杉に刻んで作ったことである。昭和26年（1951）2月2

日の部落総会で造像の議題が提示されて満場一致で決議され、大宰府観世音寺在住の富永朝堂（日展特別審査員、1897-1987）に製作を依頼して一年かけて完成した。昭和27年4月18日に除幕開眼供養を若杉公民館で行い、新しい聖観音を改めて「若杉観音」と命名した。この時は53戸の協力を得た¹⁶⁷。開眼供養の案内状には、「西日本稀有の老杉巨木が逐年伐採され減少するのは、誠に痛惜の極みで、此の巨木の樹霊を後世に永存現影を偲ぶよすがとし、又第二次世界大戦に参加し尊き犠牲を捧げられた、戦歿者の英霊を慰め、併せて講和条約後、独立国家の発足を記念し、且つ平和の象徴新四国霊場に最も由緒深き当地に全国的類なき杉の巨木を以て観世音菩薩を建立することを企てました」とある〔合屋1957: 68〕。趣旨は、①巨木の樹霊の持続、②戦争の死者供養、③独立国家の発足記念、④世界平和での四つで、時代の趨勢に合わせつつも、若杉の人々の心の拠り所である杉の樹霊の永続への願いが籠められている。

戦後の復興の中で、樹木の霊と戦死者の霊を慰め、神木の杉で観音像を造って新たに御堂に祀ったことは再出発の精神的な支えとなった。杉の一本彫の聖観音は珍しいと言われ、杉の重要性や観音信仰の深さがわかる。新しい観音像は、昭和40年（1965）に奥之院の遥拝所に移され、現在では「平和観音」として信仰を集めている。一方、集落の中央にあった古い観音堂は平成13年（2001）に奥之院の遥拝所（現在の駐車場の脇）に移設され、平成17年（2005）には、本尊の平安時代の千手観音像をはじめとする仏像は、盗難や焼失の恐れがあるとして九州歴史資料館に寄託された。この出来事は、村人や巡拝者にとっては大きな精神的な転換点であった。戦後の新しい聖観音像は、神木の杉で作られた仏像で樹霊が籠められていると考えれば、古い観音像をある程度は代替できると見ることもできる。しかし、仏像を文化財として保護すること、新しく作った観音像を「平和観音」として世界へ向けて発信することなど、外部からの働き掛けは人々の意識を大きく変えた。旧観音堂跡には礎石だけが残り、周囲に凝結していた仏菩薩の宗教性は、戦後に建てられた納骨堂を焦点とする慰霊空間に変質し、若杉の集落全体の中での意味付けを変貌させた。個人や共同体の精神的・社会的な安定に寄与してきた観音信仰は大きく変質し、保護され利用される資源となった。

(2) 新たな寺院の活動—明王院—

明王院は真言宗の寺院で、通称は「養老ヶ滝」と呼ばれている。開創は若杉山の縁起に基づき、善無畏三蔵が来山したとされる養老2年（718）とする。明治時代の再興とされるが、実際には、金剛頂院と同じく近代になって新設された寺院である。ただし、滝を中心とする古い時代からの行場であったようである。寺伝によれば、善無畏がこの地に、滝で潔斎し真言の秘法を修して霊水を得て不動明王を初めとする神仏を祀ったとされ、それ以後、空海、最澄、円仁などの高僧や、行者や参詣者がこの滝に打たれて荒行をした。明治時代に入って、盲目の僧侶法印と呼ばれた高瀬無染が滝に参籠して修験の行を行い、弘法大師の霊夢を得て不動明王の霊像を祀れと言われ、お告げに従って明治38年（1905）に通夜堂が完成した。これが事実上の養老ヶ滝の開基で、博多の有力者の助力を得て達成した。養老ヶ滝の名称は、善無畏の開創年号とされる養老3年（史料3）に因んでおり、滝の命名も同時期と思われる¹⁶⁸。それ以来、この地は修験の霊場となり、無染は養老ヶ滝の中興の祖とされた。大分県佐伯市弥生にある修験の行場、尺間山（645m）で修行したと伝え、滝上の彫り物に行法の様子が描かれている。尺間山には魔物を祓う釈間大権現が鎮座する。明王院は篠栗霊場札所12番千鶴ヶ滝の千鶴寺と同様に修験の影響が強い。大正8年（1919）には通夜堂を改築し、大正11年（1922）には不動尊本堂（奉安殿）が完

成して本尊に不動明王を安置し、寺号は養老寺明王院とした。主尊は不動明王である。二階別殿には「長者の隈古墳」(6世紀半ば)¹⁶⁹から出土の「推古仏」を祀り、古代の権威をまとう試みを行っている¹⁷⁰。明王院は伝承によれば若杉十三大寺の第一で不動を本尊とした寺であったが、争乱などで衰退し、数百年を経て改めて再興したという。無染は昭和11年(1936)10月10日に73歳で亡くなったが、「日切地蔵尊」となって人々を救済し続けるとの衆生済度の誓願を遺言し、遺志を継いで一周忌の同日に「日切地蔵尊」像が完成した。好きなものを決めた日まで一つ断つことで願をかけると叶えてもらえる地蔵尊である。

戦後は荒廃したが、徐々に復興して、昭和29年(1954)7月27日に護摩堂が完成して開眼供養を行い、境内が整備されて状況は一変した。高瀬無染の跡を継いだ高瀬覚明たかせかくめいの時代に信者数が増えたという。昭和41年(1966)には「善無畏三蔵若杉山開基千二百五十年大法会」を執行して本堂を改築し、五大明王(不動明王、降三世明王、軍荼梨明王、大威徳明王、金剛夜叉明王)を安置して、山門と供養塔を建立した。平成10年(1998)には開創「千二百八十年祭」を執行し、護摩道場を整備して、五大力尊像と役行者像を建立した。現在は堂内には地藏菩薩あいでんみょうおう、愛染明王びしゃもんてん、弘法大師あたご、愛宕將軍地藏まほりしてんを安置する。境内には十三仏が祀られていて、善無畏の信仰を受け継いだと伝承されている。

毎月1日は不動尊建立者や灯籠奉納者の息災延命を祈願する息災護摩供を行う。1月1日は年頭息災護摩祈禱会である。27日は定例の護摩祈禱会を行い、月ごとに特徴がある。2・3・4・5月の27日は各家先祖供養と諸精霊追福菩薩のための施餓鬼と百万遍数珠繰り、6・8・10・12月の27日は大施餓鬼会を行う。正月・5月・7月・9月の各27日は、野外で柴燈護摩を行う。1月27日初不動尊星供大護摩祈禱会、5月27日五大力尊柴燈護摩供大護摩祈禱会、7月27日夏祭大護摩祈禱会、9月27日大般若経六百巻転読大護摩祈禱会を執行する。11月27日土砂加持法要で、12月27日は納め不動尊ともいう。正月の行事は盛大で、3日初毘沙門天祭、24日初日切地蔵尊祭、25日初文殊菩薩進学就職千巻経祈願会、26日初愛染明王祭、27日初不動尊星供大護摩祈禱会へと続く。一年で最も賑わうのは、7月27日の夏祭で、柴燈護摩の他に内護摩も朝昼夜の3回やっていたが、現在は昼だけになっている。特徴は現世利益と死者供養を取り混ぜて、現当二世の願いを叶えることである。これだけ頻繁に祈禱会や護摩を行う寺院は稀であり、沢山の信者がいることを物語っている。

平成22年(2010)3月27日は午前10時より本尊祭を執行し、御詠歌ごえいかの朗唱と散華、「高野山宗教舞踊」(父母観音わきん和讃わうりゅうと楊柳の二種)の奉納、信者の体験談を交えた法話、そして護摩法要(住職・高瀬覚明)と念珠加持へと続いた。大勢の参拝者があり、舞踊の奉納などアトラクションも加わって娯楽性にも富み、盛り上がっていた。終了後に参加者は一緒に食事をする。果物・お菓子・飲み物などの入った小さな袋が配られ、寺院の関係者は「お接待」と言う。篠栗霊場での巡礼への「お接待」と同様の考え方がある。人に分ち与える行為に特別な意味をもたせて、信心を媒介とした社会的な絆を作り出していると言える。

明王院は、一般には養老ヶ滝不動尊として知られ、滝行場に多くの信者がきて、福岡や佐賀から定期的に通う行者や霊能者も多い。毎月3回養老ヶ滝で滝行をして、自宅では寺院で得た加持の力で病氣直しの祈禱を行っている霊能者もいる。明王院で得度を受けた人々で組織する約80人ほどの講集団の「明王院初心会」があり、福岡、鹿児島、佐賀、長崎、熊本、大分、静岡などから集まり、多くは女性である。毎月1日と27日の護摩に参加し、御詠歌を朗唱する¹⁷¹。その中の宗像市在住で靈感があるとされる母と娘の行者は、「お行」と称して10人ほどの弟子を連れ、毎月三回(1・20・27日)滝行を行い、

27日の護摩には必ず参加する。養老ヶ滝の他に、「霊峰」として名高い、大分県の佐伯市弥生の尺間山^{しゃくまざん} (645m) や大野市清川の御嶽山^{おんたけさん} (569m) でも修行しているという。

明王院は、養老ヶ滝での修行を中核に置き、若杉の集落よりも、外部の人々の支持を得ている祈禱寺院であり、女性信者を取り込んで活発に活動が続けている。現在は死者供養を取り込み、27日の年間12回の定例の護摩のうち、4回は各家先祖供養と諸精霊^{つひくぼだい}追福菩提のための施餓鬼^{せがき}と数珠繰り^{じゆずく}、4回は大施餓鬼会^{だいせがきかい}を行い¹⁷²、祈禱寺から菩提寺へと変化する様相も帯びている。特徴は施餓鬼を頻繁に行うことで、無縁仏や死霊など祟りなすものを鎮め祀ることで民衆の不安を解消する。篠栗では明王院の他に、遍照院^{へんじょういん}、南蔵院、一の滝寺などが墓地や霊園や納骨堂を併設して、死者供養を行っている。時流の変化と信者の要望を受けて祈禱から供養へと転換して巧みに生きていく経営術が新しい寺院の戦略として取り込まれているのである。

昭和47年10月には隣接地に新たに若杉文殊院を建立した。開基は明王院院主の高瀬覚明で、高野山の弘法大師祖廟に参籠の折に、靈感によって文殊菩薩を感得し、本尊に安置したことによる。昭和47年は奇しくも初代の高瀬無染の五十回忌に当たり、多くの信者の寄付で文殊院境内に地藏堂が建立され、地藏尊霊場の本尊として「日切地藏尊」を安置し、永年の宿願を果たした。現在は九州二十四地藏尊霊場の第二十四番である¹⁷³。年中行事は、1月24日初日切地藏尊祭^{はつひきりじそうせん} (午前11時)、10月10日は地藏堂先師忌^{せんしき}で、毎月1日午前10時護摩祈禱、毎月27日午前10時30分法要で、1月、5月、7月、9月は大祭である。

明王院は、金剛頂院と同様に、篠栗霊場の札所が組織する「篠栗四国霊場会」のうち幹部にあたる「法徳会」の会員を務め、篠栗霊場とも深い関係を持ち、四国遍路や本山の高野山とのネットワークを維持して広域での展開も視野にいれている。信者は篠栗町よりも、福岡市を初めとして都市部に多く、外部世界を取り込んで伸びてきた寺院である。

明王院は、金剛頂院と同様に、明治初年以降に縁起に基づいて再興したとはいえ、実質的には新しく寺院を作り出したといえる。初期段階は金剛頂院と同様に修験の行者によって支えられ、滝の修行を中核に置いて現世利益をもたらす祈禱寺として発展し、高野山真言宗の単立寺院に成長した。やはり綺麗な滝があり行場として最適なことが発展の理由であろう。さらに近年は急速に死者供養や施餓鬼供養を拡大して、祈禱から供養へと展開し、様々な悩みや問題に応じて、娯楽性にも富む民衆寺院として発展している。信者には行者や霊能者が多く、占い師やヨガ講師も参加する。女性のネットワークを組織化して願いを叶える性格も強い。篠栗の南蔵院ほどではないが、時流を読んで臨機応変に対応する柔軟性に富む寺院である。金剛頂院が若杉の村人によって支えられる内部の寺院の性格が強いものに対して、明王院は若杉の村外の講集団によって支えられ外部と強く結びついている。

(3) 中堂の復興—高尾薬師堂—

旧観音堂の上部にある高尾の薬師堂は本尊を薬師とし、6月7日に堂内を荘厳して祀る。特に眼病の患者は絵馬に「め」の字を年齢数だけ書いて治癒の願かけをした。昔は若杉の六大寺の一つで中堂とも呼ばれたが、右谷佐谷の争いで焼失し、更に戦国時代の騒乱によって焼けて衰退したと伝える。本尊の薬師如来はその都度救い出された。平安時代の製作とされる古い仏像である。一般には「焼薬師^{やけやくし}」と呼ばれ、その由来は、堂坊が戦火で焼け落ちた時に、火中から「治右エ門、孫市(彦市)ようい」と二人の村人を呼んだので、双方が駆けつけて堂内から取り出して消火したが焼け傷は残ったことによる。そ

の後、若杉に大火があった時に二人の家は類焼せず、薬師のおかげとして信仰を強めたという〔『篠栗町史 民俗編』1990: 322〕。御堂は、長い間、再建のメドがつかなかったが、昭和13年(1938)に若杉発展期成会の尽力で再建がなり、村人の信仰を集めてきた。再建の時期は、上宮・下宮の改築(昭和9年から11年)の直後で、戦争に向かう暗い時代ではあったが、信仰の重要性が増して、神社だけでなく仏堂を新しくするという再生の機運が高まったといえる。

(4) 墓地から納骨堂へ

戦後の大きな変化は墓地から納骨堂への移行である。昭和28年前後に村々で個人墓を廃止して、納骨堂に一元化する動きが流行し、若杉でも時流に乗って納骨堂を建造した。元々墓地は屋敷裏や山中や丘陵など、集落の周縁部に二十数箇所に点在していて個人の所有であった。多くは近親者の集団墓地だが、単独に墓石を住居間近に設けて朝夕墓参をする所もあった。墓は自然石と彫刻石の二種で、彫刻石には蓮座が多く稀に円塔がある。蓮座は江戸時代からの継続で、円塔はそれよりも古く室町時代の高鳥居城の城主、「杉一族」に由来する墓¹⁷⁴とも言う。しかし、現実には150年を越える墓石は少なく、確実に中世に遡ることが出来る墓はない¹⁷⁵。近代の動きとして、大正時代に土葬の個人墓や夫婦墓を整理して家墓にまとめ、古い墓石も集積する「寄せ墓」の動きが盛んになり、多くは辻の畑の墓地に集約されたが¹⁷⁶、個別の墓地も幾つか残った。「寄せ墓」への移行は江戸時代後期以降、徐々に進行してきた現象で、近代の家制度の強化、墓地管理の合理化で急速に進んだとみられる。土葬から火葬への変化は昭和初期に生じたが、本格化したのは戦後である¹⁷⁷。

戦後の大きな変化は墓から納骨堂への移行である。昭和28年3月の部落総会で納骨堂建立の議が起こった。その理由は若杉区内の墓石は一戸あたり2～3基、推定総計で古墓が50基あるが、十年後には500～600万円の石代が必要で、祖先の永代供養が出来ない者も現れるかもしれないという危惧による。「寄せ墓」を推進しても、墓の値段は高いので、一挙に納骨堂にしようという提案がなされた。同年10月25日の部落の会合の決議に基づいて、無量寿会(当時の老人会)の深沢滝次郎むりょうじゅかいと石井真雄いしいまさおへ促進を進言し、10月27日に納骨堂建設と若杉発展に関する書類を区長の合屋光雄に提出した。しかし、昭和29年3月の部落総会に諮ったが決定には至らず、無量寿会に郡内の納骨堂の視察を委嘱した。同年の3月中に無量寿会会員は、近隣の久原、津波黒、別府、宇美、松崎、山田などの納骨堂を視察して現状を把握し、同年4月26日に部落総会を開いて報告した。更に同年5月2日に部落総会を開き、観音堂の境内に納骨堂を建立する議決を行った。納骨堂の敷地は部落有地であったので、話し合っただけで決めたのである。

納骨堂に関する規約を新たにつくり、加入者は居村者と、居村者の村外移転者に限ることとし、加入金は居村者1000円、他出者14000円とした。当時の加入者のうち、居村者は62戸、他出者は17戸であった。岳城山の部落共有林を売却して財源に充てることにして、委員(世話人)を選定して協議し¹⁷⁸、建築様式は鉄筋ブロック二層楼で、屋根中央頂上に九輪の塔を建てることに決定した。建坪面積は三間四角、正面及び入口四尺を除いて他を四十等分し、上下二段の仏壇を造り、真下に広さ約一尺平方、深さ約三尺四角の納骨用の穴を設定して、総計80戸分を作ることにして工事に入った¹⁷⁹。50基くらいあった各家の墓を崩して骨を掘り出す作業をしたが、骨はほとんど出なかったという。骨が少しでも出れば焼いて骨壺にいれ、骨が出ない場合は土を移した。古い墓は公民館の上のイチヨウの木の下に集めたが、その中には宝暦の年号の墓もある。共同墓地は、採石場近隣、辻の畑、一本松の向かい、辻上、名

上の境などにあったが、墓地の整理と移動に伴って管理が変わり町有となった。昭和29年（1954）12月13日納骨堂前にて落成式を挙行了¹⁸⁰。

平成20年（2008）現在の納骨堂の会員は73戸で、昔からの加入者は65戸だという。維持費は年間5000円（1戸あたり）で、新たに入る場合は入会金10万円を納入する。管理は納骨堂組合が行い、区長と組長が役員で2年に一度交替する。修理は個別に行うことになっている。納骨堂の中は、仏壇に黒い位牌を置いて、骨壺がある。維持は掃除組が行い、村の内部区分に応じて、横居場、谷上、谷下、辻上、辻下の5つの組が、一年交替で奉仕して、正月・春彼岸・秋彼岸・盆の年間4回掃除を行う。2008年は谷上の担当であった。納骨堂では、盆には8月13日に先祖迎えをして、15日の夕方に送る。毎月1日と15日は外だけの掃除、春と秋の彼岸の初日には明王院の僧侶がきて法要を行い、ご詠歌組の女性が10人ほど参加して詠唱する。5年に一度、秋彼岸に大きな合同法要を大祭として行い（2008年に執行）、関係する全ての寺の僧侶が集まる。浄土真宗は津波黒の真光寺と須恵の専能寺、浄土宗は庄の西林寺、真言宗は若杉の金剛頂院と明王院（文殊院）が参加する¹⁸¹。御詠歌の朗唱もある。会員は浄土真宗の門徒が多く、浄土宗、真言宗の家もある。真宗門徒は施餓鬼供養を行わず棚経の慣習もないので、他宗派には違和感があるが何とかやってきた。しかし、2000年代以降、納骨堂から出て新たに個人墓に改葬したり、霊園に移す人も出るなど多様な動きが現れた。屋根の葺き替えは2008年に執行し、内装工事もう二回行っているが、建替となれば、個人墓に戻るかもしれないと話す人もいる。

納骨堂建立の理由は、墓が将来は高額になって財政的に維持が困難になるという危惧に基づいていた。若杉は木材資源が豊かで共有林も多く、納骨堂建立の費用は岳城山の部落共有の山の木を売って捻出できた。当時は木材の値段が高く、財政面の心配はなく、納骨堂の建立は容易であった¹⁸²。また、敷地も部落有で作業は円滑に行われた。建立推進には、当時の九州一円、特に福岡県内での納骨堂建立のブームが影響を与え¹⁸³、戦後の高揚した気分の中で生活合理化の精神が働いた可能性もある。火葬の普及も影響を及ぼしたであろう。行政側の指導や補助金交付の形跡はないので、集落が独自の動きをしたと見られる。当時は村内の精神的社会的秩序を再構築する事業が連続し、昭和26年（1951）2月の新たな観音像の製作依頼、昭和27年4月の若杉観音の開眼供養、昭和28年4月の金剛頂院の宗教法人の登記、昭和29年（1954）4月の霊峰会の成立、昭和29年7月の明王院護摩堂の新築、昭和29年10月の奥之院の新大師像の新たな製作依頼、昭和30年新大師像開眼供養などが続いた。昭和29年3月には新四国霊場八十八ヶ所を管理する「篠栗霊場会」が成立し、若杉は番外として会員登録をした。これらの一連の動きと連動して、共同事業を促進する意志が強く働いたのではないだろうか。昭和28年3月の部落総会での納骨堂建立の議の提示と、昭和29年12月の納骨堂の完成はこの流れの中に位置付けられる。個人的には墓に愛着があっても、集落の結束力が強い場合、共同意志に逆らうことは難しいという事情もあったと見られる。戦後の社会の立て直しの中での「共同性」の再発見と強化は、納骨堂での死者の一元的管理へと展開した。

しかし、現在は納骨堂の建立以来50年が経過し、家族の状況や人々の意識も変化して、一元的管理の納骨堂では十分な供養が出来ないとして個別の墓を再建して寺院へ回帰する機運も生じており、今後は見直しに向かう可能性が高い。住民には、納骨堂の老朽化に伴って祭祀の継承や永続性への不安が生じ、高齢化・少子化、他出者の増加などの社会変動に伴い、寺院や霊園、個人葬など墓制や葬法の多様な選択肢への志向が高まってきている。

(5) 観光化

若杉は信仰の山を活用する手段として大正時代以降は、観光化に乗り出した。その最初の試みは、大正時代に起こった古堂上での若杉楽園ホテルの建設計画で、奥之院への参詣と観光を兼ねる施設を作ろうとした。推進母体は、大正12年(1923)に結成された若杉発展期成会で、年齢にかかわらず入会できる会員制にし、若杉の復興を目指して、観光施設としてホテルの開設を構想した。前段階として、大正12年には林間学校を誘致し、下宮の境内に天幕や机を並べ、遊技場を設けて児童の娯楽と訓練の場とした。その後、福岡日々新聞社の齊田紅葉らの援助と、金剛頂院の隆盛を画策し、若杉高野山の建立を構想していた田代亮観法印の助力を得て、若杉楽園ホテルの建設に着手し、昭和5年に開設し、旅館経営に乗り出した。当時は、林道が通じておらず、交通不便であったが、村民は建築資材を背負って運搬して建設に協力した。合屋利次は10000円の個人借款をして協力したという。昭和8年に隣接地にプールを作り、昭和9年にはホテル別館が完成し、8畳と6畳の客室を増設した。滑り台、円木、ブランコ、金棒を整えて、最盛期には11室、60人の宿泊が可能であった。大正・昭和期の資本家の成長や大衆のレジャーブームの到来が時代背景にある。

林道は大正13年(1925)には法事¹⁸⁴から古堂^{ふるどう}まで国有林の林道を開鑿し、昭和8年には庄の^{こしょうぼし}後生橋から若杉の^{のやしき}殿屋敷に至る道路幅12mの道路が出来た。楽園の設備と交通がこれで完成した。合屋利次は、合屋文助と市郎が植栽した杉苗500本を古堂付近に植樹して生態環境を整えた。昭和29年には、楽園から山頂までの自動車道が完成した。しかし、若杉楽園ホテルは経営に行き詰まり、管理者がいなくなり、昭和47年には取り壊しとなり、施設は金剛頂院と明王院が半分ずつもらった。明王院は昭和47年(1972)10月に跡地の一部を使って文殊院を新たに建立し、平成4年(1992)に建替えて現在に至っている。

近年は、近くにカフェ「茶房 わらび野」(2008年7月開業)と「蕎麦処 文治郎」が出来て、展望を売り物にした休息と食事の場所として、福岡市内からの観光客が増えている。ただし、カフェの外観は近代的な設計で奇抜であり、山の景観との調和という点では違和感があって、若杉山の歴史とは無縁で過去との非連続性が顕著である。

一方、高尾の薬師の近くには、近代的な浴場施設の「若杉の湯」(2003年11月開業)があり、岩盤層の滑石(温石^{おんじやく})の湯で売り出している。古堂の上部には、旧堂坊の浴場(湯屋^{ゆや})があったとされる湯屋原(湯谷原^{ゆのたにぼる})¹⁸⁵があり、その中の杉林内には滑石絨があって、火鉢の灰くらいの熱さで少量は採集可能で、江戸時代から明治初年までは、円石(辻の上)では、温石湯の蒸風呂が営まれていたという[合屋1957: 12]。「若杉の湯」は浴場を高尾に移して、現代風に復活したとも言える。温泉の由来は、最古の縁起(史料1)の中に高尾の薬師の靈験譚として言及があり、温泉による癒しや病氣直しは歴史の連続性の上で推移してきた。

楽園は荒廃していたが、平成3年度には霊峰会が主体となって助成金を活用し広場に給水設備を整えて、眺めのよいキャンプ場としてデビューした。7月第一日曜には広場の山の神(祭神: 大山祇神^{おおやまつみのかみ})の前で11時から宮司の祝詞奏上で「山開き」の祭典が行われる。供物は霊峰会から鯛・果物・米・スルメ・酒などが上がる。参列者は、霊峰会会員と町の関係者(町長、観光協会、議員の半分)、営林署、駅長で、観光客の安全も祈る。観光シーズンの幕開けの行事である。山の神は山仕事をする人々の守護神であったが、特定の祭日が決まっていなかった。しかし、現在では夏休み前の観光シーズンを迎える「山開き」が祭日となった。江戸時代末期の絵図では、山神は高野埜(古堂)の脇にあり、大杉の下に

山神社が描かれているが、祭りについての記載はない。山を観光地化したことに伴い、山の神は地域の発展と観光客の安全を祈願する祠として新たな意味付けを獲得したのである。楽園は、上部の「米の山展望台」と同様に、眺望で売り出すのが現代の観光戦略で、過去との連続性は乏しい。森の中にひっそりとたたずむ山の神とキャンプ場の併置は、歴史の連続性と非連続性の混淆を表している。

若杉山の歴史と深く関わりを持ちつつ、現在の観光化の軸になることを期待されているのは森林、特に杉を資源にしたグリーン・ツーリズム (green tourism) である。自然林の杉の大樹は若杉山のイシギ (下宮の上) からカブトの森 (肥前谷) にかけて数多く残っている。篠栗町はこの地域一帯を新たに「大和の森」と名づけて遊歩道を整備し、道筋に点在する巨大杉を見ながら一周できるコースを整備した。古堂の南側の登山道を整備して、途中に綾杉→トウダの二又杉→ジャレ杉→七又杉→大和の大杉をめぐる約2キロ90分のコースを2002年に設定したのである。その中には神功皇后伝説に因む綾杉も加えられている。この契機になったのは、2000年4月5日付け『西日本新聞』に林野庁が全国の国有林に自生する巨木・巨樹の保護運動として進めている「森の巨人たち百選」の最終結果を発表し、その中に篠栗町に所在する国有林 (87.83ha) の内のトウダの二又杉 (幹周り6.91m, 樹高30m) が選定されたことである。その後、幹周り16.15m, 樹高40m, 樹齢推定2000年の杉が発見されて「大和の大杉」と名づけられた¹⁸⁶。かつてのご神木を、森を精神的な安定をもたらす「癒し」の空間として甦えらせる試みである。篠栗町は2009年3月に国によって「森林セラピー基地」¹⁸⁷に認定され、2010年からセラピー運動を開始した。森林セラピストの指導のもとで森を歩いて心と体の健康を維持し、森林浴の効果に基づいてライフスタイルを変えていこうとする運動で、多くの人はヒーリングを目的として参加する。2009年からは「森林セラピスト」の資格検定が始まった。篠栗新四国霊場や遍路道はその運動の中に取り込まれ、独自の癒し空間として再構築されることになった。実際に森林セラピーに参加する人々は、遍路道をたどり、札所で参拝して野仏に賽銭を上げるなど宗教性を帯びつつあり、篠栗の地域性が色濃く反映している。篠栗町は、若杉に留まらず、篠栗全体を「心の湯治場」、「都心に近い森」として売り出す作戦を展開し、新四国霊場も取り込んで「森の鼓動が聞こえる遍路の郷」としてアピールしているのである。セラピー・ロードという癒しの道の構想は近年のものだが、森林、特に杉は若杉の歴史を通じて一貫して生業と信仰の拠り所であり、国の環境政策を伝統との連続性の中に取り込んで生かそうとする発想といえよう。福岡市の郊外として位置付けられつつある篠栗町は、都市住民を巻き込んだ新たな「文化運動」の発信地へと変貌しつつある。

若杉集落の人々にとっては、霊峰若杉山が暮らしの中心にあった。現代は信仰よりも観光へと焦点が移ったが、山の意味付けを微妙に変化させつつ、時代に適合して生きてきた。その中でも縁起に説かれ、山名の由来になっている杉は、一貫して若杉集落の人々にとっては、心の支えになってきた。現在では林業は奮わないが、杉を中核とする森林文化として新たに甦りを果たしつつある。連続の中の非連続とでもいべき伝統の動態である。若杉の集落では「霊峰会」という地縁組織が中核にあり、この名称にも表れているように、山岳信仰は姿を変えながら社会の凝集力の源泉として機能してきた。現在では若杉集落は伝承の持続を担う伝承母体とは言えなくなっているが、人々のまとまりのよさは維持されている。その根源にあるのが若杉山への想いであり、山への信仰というよりも抱かれ守られているという感覚が残っている。篠栗新四国霊場が醸成する宗教的な磁場は若杉にも及ぶ。

若杉奥之院と篠栗新四国霊場は、1998年の記録によれば、年間客数110万人に達していたとされ現代的な「信仰文化」の拠点であった¹⁸⁸。しかし、この統計は南蔵院が入口に置いてある自動計測器で図っ

た調査結果をもとにした推計で、南蔵院のみの参拝者や、南蔵院の職員や業者が含まれている。地元の関係者の予測では、霊場を巡る目的で来る人々はせいぜい年間10万人で、八十八ヶ所の全てを巡った人々はさらに少なくなるだろうという。昭和30年代は道を通る巡礼が引きも切らず訪れて、細い巡礼道ではすれ違うのでさえも困難を極めたというから、短期間で大きな変化である。高度経済成長期にも、巡礼のブームがおとずれて、1975年頃までは継続してきた。しかし、バブル経済(1987-1991)の崩壊、少子化・高齢化の進展や余暇の多様化、若者の信仰への無関心などから、巡礼や観光客は減少の一途をたどっている。現在は、地域の活性化のために観光と信仰を調和させた「文化産業」を起こす様々な企画が建てられてきているが、効果は大きくない。しかし、若杉集落の場合は、大きな歴史の変動の中にあっても動態的に変化し、変容過程で「伝統」の意識化が起こり新たな想像力を創り出し変化に対応してきた。民俗社会は近代になって閉鎖から開放に展開したのではなく、前近代でも内部と外部の相互交渉は継続していた。民俗社会を内部と外部の相互関係や相互連関が続くコンタクト・ゾーン(contact zone)として捉えなおし、そこに現出する民俗知と多様な実践を新たな眼で探求する必要がある。

注

- 1) 本調査はフランス国立極東学院との共同研究プロジェクト「外と内の相互力学—外部性による社会と文化の創造」(代表者: アンヌ・ブッシィ Anne Bouchy)に基づく成果の一部である。調査期間は2004年から2010年であった。
- 2) 民俗の研究を推進した柳田國男は「民間伝承」の用語を好んだ。この用語は、フランス語のtraditionale populaireの翻案である。後になって次第に「民俗」を使うようになった。
- 3) フランス語のハビトゥスhabitusとも近いが、学術上の定義はないが、好んで使ったとは言えない。
- 4) 教育大学の民俗学など学問化された民俗学の中から現れてきた[福田 1984]。
- 5) 源順が承平年間(931-937)に編纂した地名に関する辞書である。
- 6) 篠栗町の西方には、丸山と焼地山が城門のように聳えていて地勢が狭まっている。
- 7) 貝原益軒の『筑前國續風土記』[貝原 1977 (1688-1710)] 卷十八・表糟谷郡には、「迫門河内」十ヶ村と記され、河内は「民俗の称する所」として、形成に権力が関与していない状況を示す。河内は同じ川の流域に点在し、河水の分配に関する利害調整を行う組織として発達したようである。糟屋郡内には、迫門(戸)河内、宇美河内、須恵河内があった[[粕屋町誌] 1992: 224]。
- 8) 米山俊直の用語である[米山 1989]。
- 9) 今里団地と篠栗団地がこの地区には含まれ、新住民になっている。
- 10) 部落は本来はドイツ語のGemeindeの翻訳語であったが、次第に被差別部落を指す用語になり、中立的な概念ではなくなった。しかし、地域社会では日常語として使われている。
- 11) コムラ(小村)という言い方もある。
- 12) 竹城山、武城山ともいい、須恵村では城山と呼ぶ。高鳥居山の山名は、齊明天皇の代に山の中腹に大鳥居を築いたことに由来し、城が築かれて竹が生い茂ったので竹城山となったという伝承があるが[合屋 1957: 47。『須恵町誌』1983: 4]、史実とはいえない。山上には高鳥居城の城址跡があり、遺構としては十間樋(若杉山より引き通した溝で城内の用水に使用)が残る。道は若杉の福谷から立岩を通して12町、須恵の皿山から12町、下須恵から20町である。山麓を若杉と須恵を結ぶ切通し越(大切通し、小切通)が通る。
- 13) 伊弉諾尊を祀る太祖神社を西向きにした理由は、縁起では朝鮮半島に睨みを利かせていると記されている(史料2)。また、『筑前國續風土記拾遺』は、若杉山は伊弉冉尊を祀る早良郡の飯盛山(382m)と対峙し、陰陽和合の夫婦山とする[青柳(編)1993]。
- 14) 太祖は古くは「大祖」と表記した。原文は、「神亀五年戊辰。大祖権現自唐土渡日本。入香椎宮之坐時。玉垂権現告聖母大菩薩。志賀嶋明神而言。…分殖香椎枌於高山奉居大祖。今若枌山是也」(枌は「杉」の誤字か)と本地垂迹説に基づき、大祖権現は伊弉諾尊として垂迹すると説く。天神七代を経て、天照大神に繋がる神統

譜を記している。太祖を伊弉諾尊とする縁起（史料2）の典拠と見られる。『宗像大菩薩御縁起』（文政元年・1444）では、「香椎御縁起云、神龜五年、太祖権現（宗像大菩薩一体異名也）^{よりからつち}自唐土日本、來給」とあり、「太祖権現者、日本國三千六百餘權者實者神々祖父也」「香椎相分殖、奉崇太祖権現、是則今若杉山是也」「太祖権現即託宣云、我真言興起、往極樂薩埵也、本地真言祖師也…天竺國善無畏三藏者、是我也」と記す。太祖を善無畏とする縁起（史料1）が依拠した文献と見られる。原文は『筑前柏屋 若杉山の仏教遺跡』1986: 48-49]を参照されたい。一方、大宰府天満宮文書に、安楽寺所領の「太祖社」を若杉山の衆徒が横領したという観応3年（1352）2月付けの記録があり、史料上の初出である（竹内理三編『大宰府天満宮史料』巻11）。

- 15) 真言八祖とは、龍猛・龍智・金剛智・不空三藏・善無畏・一行・恵果・空海を言う。不空は中国密教の確立者とされる。一行は天文学に優れ、恵果はその弟子で、空海は中国で恵果に師事して真言密教を日本に齎した。善無畏（シュバカラシンハ）は、インドのオリッサの王子であったが、仏道に志してナーランダで達磨掬多に師事した。同門には龍智の弟子の金剛智がいた。開元4年（716）にインドから梵語經典を携えて中国の長安に到着し、經典の漢訳を行い、胎藏系の密教を伝えた。善無畏は、長安西明寺の塔頭の菩提院で開元5年に『虚空藏求聞持法』を翻訳し、入唐していた大安寺の道慈（三論宗）がそれを開元6年（718）に日本に請來した。その後、善議、勤操を経て空海へ伝わった。空海は、吉野や四国で山岳修行をして求聞持法を用いたとされる。求聞持法は、法相宗の元興寺も受け継ぎ、道慈から吉野で山林修行をしていた神叡に伝承され、比蘇寺を根拠地とする自然智宗に取り込まれた〔園田1991〕。法相修験へと連なる法脈である。善無畏が日本に來た記録はなく、若杉への來山は伝承に留まる。天台宗では、善無畏訳の『大日經』と『蘇悉地羯羅經』は、『金剛頂經』と共に基本經典として重視されている。
- 16) 養老2年は中国年号では開元6年（718）で、善無畏に師事した道慈が帰国した年であり、密教經典の日本への傳來という記念すべき年を、若杉山の開山年に転用した可能性がある。
- 17) 空海は大同元年（806）に唐からの帰朝後、大宰府に滞在したので、九州各地に足跡地や伝説が生まれたと推定される。しかし、空海の仕事は、大同4年（809）に嵯峨天皇が即位し、その招きで上京し、横尾山寺に現れるまでは空白である。日本各地に大同元年や大同2年の開基と伝える天台・真言系の寺院が多いのは、空海の帰朝年をあてて権威付ける意図があろう。なお、真言宗は『弘法大師御遺告』の記述に従い、大同2年を開教年としている。
- 18) 順峯は春峯・胎藏界入峯で2月-4月、逆峯は空峯・金剛界入峯で7-9月に行った。
- 19) 平安時代後期から鎌倉時代にかけて最盛期を迎えたとされ、頭光寺本覚院を法頭とし、寺坊が360あったと伝える〔『首羅山遺跡』2008〕。
- 20) 乙犬には隈遺跡（弥生～古墳時代）と片子遺跡（弥生時代）、田中には糸江遺跡（縄文～古墳時代）がある。乙犬の神木では箱式石棺が出土している。
- 21) 善無畏が人間が通れるように念力で岩を押し開いたと伝え、悪人や罪深い人は挟まれて通れないという。空海が杖の一撃で岩を割って山頂への道を開いたともいう。
- 22) 空海が独鈷で岩を掘って湧出させた霊水で御利益があるという。上宮の寅の方の奥之院にあり、岩窟に八大龍王を祀る背後の岩は陰石と陽石のようにみえる。
- 23) 高野埜ともいい、多くの堂坊があった跡とされ、崩れた石垣などが現存する。
- 24) 善無畏が潔斎し真言の秘法を修し、空海や最澄をはじめ、行者や參詣者の行場という。
- 25) 横居場に位置し、蓮華滝もある。
- 26) 全山が繁栄した時に、衆徒の浴場（湯屋）があったという。庶民も恩恵に浴した。しかし、高尾の薬師が二日市湯町の武蔵寺の薬師との賭けに負けて噴湯はもっていかれ、若杉の湯は止んで、二日市の温泉に変わったという。
- 27) 樂園の南400mの所にあつて、岩上に不動、岩陰に十三仏を祀る。小早川中納言秀秋が朝鮮遠征にあたり、豊臣秀吉の命令で軍船を作った時に、神木「綾杉」を切り倒した。この時に秀秋が指揮命令した岩だという。臣下に岩見重太郎がいて幼時に神隠しにあい、寶満山、三郡山、若杉山で天狗に従って武芸と兵法を学んだ。関ヶ原の戦いで徳川方に寝返った秀秋の下を去り、大阪冬の陣、夏の陣で戦い戦死した。その幼時の修行場だともいう〔西 1981: 31〕。
- 28) 高鳥居城時代の武士の宅地跡という。古井戸が残り、大晦日の除夜の鐘に合わせて井戸の中で「金の矮鶏」が鳴くという〔『篠栗町史 民俗編』1990: 325〕。別の説では金の瑞鶏である。高鳥居城の落城に際して、家宝や

財物を庭内や井戸に投げ込んで大岩で蓋をしたので、封じ込めてある鶏が鳴くとされる [合屋 1957: 219]。

- 29) 高尾にあって今も小さな御堂の薬師堂が残る。
- 30) 八大龍王窟では海神を祀る。矢筈竹が一叢あって神功皇后が自ら植えた竹という。
- 31) 神功皇后が三韓遠征の戦勝祈願で登山し、手で石を抑えて休んだら手跡が残ったという。
- 32) 憩居場の訛りで、押石と同じく神功皇后の休憩場と言う。別の説では横に突き出た大岩に腰かけた時に岩が折れそうになったので、あわてて中央に移り、大小二つの座型が岩に残ったとされる。弘法大師の腰掛け石という説もある。
- 33) 古堂にある岩で鬼が住み着いていた。弘法大師と力比べをして、弘法大師は石を揺さぶったが、鬼は全く動かさずに根元に落ちた。これ以後、鬼は悪事をやめて弘法大師の弟子になったとされる。重い岩なので千石岩ともいう。
- 34) 善無畏の来山時にグーズ（亀）が現れて背中に乗せてきたが、八合目で動かなくなった。善無畏は歩いて山頂にいき八大龍王を祀った。グーズはそのまま岩となって残ったという。
- 35) 米の山の頂の堂床（頂上の平地）に阿弥陀堂があり、後に中腹に移したが、山津波で御堂が川に流された所を阿弥陀淵という。海に流出し志賀島に至った [[篠栗町史 民俗編] 1990: 324]。現在、石井坊上部の山林を阿弥陀林といい、阿弥陀堂の所在に因む。
- 36) 一瀬屋敷にあったとされる。佐谷側の一瀬にも女人門の結界があったという
- 37) カブトの森運動公園建設に伴う発掘で、鎌倉時代の集落跡が見つかった。三枚田という地名にも関連すると思われるが、伝承はない。
- 38) 神功皇后が綾杉を採取した谷とされ、小早川秀秋の伐採後はなくなったという。
- 39) 養蚕戸数は昭和6年には20戸、昭和14年には30戸という記録がある。
- 40) 一町歩の1町は約0.9917ヘクタールha (9917m²)である。
- 41) 若杉地区は自治会が、本村・今里団地・篠栗団地の三つあった。本村は財産を持って独立採算でやってきた。しかし、2008年からは区の会計は一つに統合され、役職も各々から一人ずつ出すことになった。2010年度の若杉区長は篠栗団地、会計は今里団地、副区長は若杉本村から出た。2007年以前は区長は必ず本村から出た。三つの自治会が統合され、本村の独立性は揺らいで、行政区が一つになる方向へと踏み出した。ただし、若杉本村には、独自の区長もいる。行政村と自然村の二重帰属の意識は継続している。毎年5月には連合総会を開いて総代を決めていた。2004年の参加者は、霊峰会49軒（後に47軒）、若杉区（73軒）、神社（73軒）、農事組合（60軒）と全員が集まって、決算、予算、行事などに関して、地区全体の会議を行い、決算報告、経営状態の検討、予算の執行を行う。神楽組の決算と予算もこの時に承認を得る。農事組合は農業をやめても籍は残る。
- 42) 博多にある聖福寺の銅鐘（天文3年（1534））の寄付者名に合屋姓が見えるのが最も古く、古墓としては天明7年（1787）銘の墓石がある（俗名合屋勝治）。合屋姓の謂われは、嘉穂、築上、田川、京都の各郡で古墳をゴウヤといい、関係があるという説もある [合屋 1957: 5-6]。一本松墓地に残る記念碑には、合屋家は南北朝時代に北畠顯雄征西將軍の宮に従って、肥前筑紫の野に下ったが、奮わずして子孫は離散し、居を若杉に定めたとあるが、史実の確証はない。納骨堂落成と共に墓にあった記念碑は五代の孫にあたる合屋元素宅の庭内に移築された。
- 43) 現在は佐谷と書くが、江戸時代の文献には「左谷」とある。
- 44) 千手観音像は9世紀前半から8世紀後半に遡るとされる九州最古の作例の仏像である [[『空海と九州のみほとけ』 2006: 46]。『叡山大師伝』によれば、最澄は弘仁五年（814）に「為遂渡海願」として筑紫国を訪れ「檀像千手菩薩一軀高五尺」を制作している。本像はこの記録と一致する可能性があり、最澄作かもしれない。ただし、本像は最初から千手観音であったとは言えず、確定は出来ない。現在は八手で千本を表わすという。千手観音像の旧台座板は、明德3年（1392）元阿弥によって再興された蓮華座で、「石泉寺」の名称はこれが最古で、中世での存在が確認できる。
- 45) 旧若杉観音堂の千手観音像（8世紀～9世紀）と阿弥陀如来像（12世紀）、石井坊地藏堂の地藏菩薩像（10～11世紀）と護摩堂の不動三尊像（12世紀）は平安時代の作である。護摩堂には室町時代の大日如来像も残る。佐谷でも左谷山賢聖院跡の建正寺観音堂の十一面観音像と大日如来像、仁王像残欠、菩薩形頭部は平安時代の作とされる。
- 46) 『筑前國表粕谷郡若杉村太祖山延年寺石泉寺神軀佛像経卷再興記』（宝永7年（1710））によれば、貞享3年

- (1686) に出土し、傍らの石碑に年号が刻まれていたという。
- 47) 一方は首に鈴をつけ獅子を抱き、他方は毬を前足でもてあそぶ姿の阿吽の獅子で、類似の作例が宗像大社(建仁元年, 1201)、観世音寺(太宰府市)、飯盛神社(福岡市西区金武)許斐神社(宗像市)、首羅山(久山町)にある。中国商人の関与の歴史を物語る。
- 48) 上段に種子、中段に法華経経文、聖徳太子・最澄・空海・性空(原文は聖空)の名前を記す。下段には罪障消滅、過去二親の成仏を祈る。「当所観音」の文言から、今に伝わる観音像がこの時期に安置されていたことがわかる[『須恵町誌』1983: 697-700]。
- 49) 寶満山に残る『龜門山旧記』には宥辨が黒田長政の鹿狩の御伴に召され、若杉村で寺地野畠を下されて、井泉の禊を見て石井坊という坊名をいただいたとある。原文は[五来(編)1984: 540]を参照。
- 50) 『分杉村太祖宮之記』(天明5年(1785))には、慶長年中に、黒田長政公の下知で、龜門山亀石坊宥弁を当山の座主職にして、真言宗を天台宗に改宗して石井坊の号を与えたとある[合屋 1957: 32]。また、石井坊の牛玉宝印の元禄七年(1694)銘の版木に「太祖山延年寺三藏院主 右谷山東北院石泉寺石井坊 良弁」とあり、当初は延年寺を名乗っていた。若杉観音堂に法頭の石泉寺の名称を当てたとも推定される。再興に際し、本尊に最澄作大日如来を据え、空海作不動明王、恵心作地藏尊を奉安したと伝え、真言宗と天台宗の伝承が混淆する。庭園は雪舟築庭と伝わる。境内の地藏堂の本尊は宝永3年(1706)12月に再安置した。境内には護摩堂(大日堂)と地藏堂が現存する。なお、石井坊再興に合わせて、高尾の薬師堂と観音堂を復興して、辻堂には往時の仏像を安置したと伝える。
- 51) 山王社は下宮の裏手の石ヒシギにあった。神社合祀で無格社の整理の対象となったので下宮境内に移して日吉神社と扁額し、旧社地は大正13年(1924)に民間に払い下げた。
- 52) 東方の触頭を務め、西方の触頭は福岡市東職人町の蓮生院としていた。
- 53) 葛城峯は、金剛界・胎藏界の修行の後に、法華経二十八品と胎藏界曼荼羅の外縁部の外金剛部の諸尊の二十八の星宿の童子を充当した行所を設定している[森 2008: 568]。大和の葛城峯は、法華経二十八品の経筒を埋めた場所を巡拝しており、考え方が異なる。『葛城峯中花供案内』の原文は、『宝満山関係史料集』[森 2008 別冊]に収録されている。
- 54) 合屋姓の人々は右谷と佐谷には多いが、他の地方では嘉穂郡桂川村にいる程度だという。安河内家は、佐谷から養子を入れている。安河内健次は、佐谷の小山田家の四男だったが、安河内家(健次さんの母の妹: 叔母)は女子一人のみであったので、健次が養子に入った。若杉と粕屋のように水脈が同じ場合も、縁組して親戚になることもあったという。
- 55) 壇ノ浦の戦いに敗れた平家の落武者が安徳天皇を奉じて隠れ、追手からうまく逃れて、その御礼に不動明王を祀ったとされ、霊験あらたかとされる。慈忍がいたとされる寺が安徳寺と傳承されているのは、後世になってこの伝説と結びつけたためかもしれない。
- 56) 『糟屋郡篠栗村々是』(明治40年(1907))には「天保六年、僧尼慈忍来テ字城戸ニ住シ、心願ヲ以テ十八躰ノ佛像ヲ安置シ、故アツテ失踪セリ。藤木藤助之ヲ嘆シ、艱苦大ニ經營スル處アリ。嘉永三年ヨリ安政二年ノ間ニ於テ、八十八体ノ石佛ヲ勸請シ、後チ高野ニ至リ四國路ヲ遍歴シ、靈場ノ土砂ヲ持運ヒテ、之ヲ配置シ、開眼供養ヲ営ミシヨリ、信者四方ニ起リ、益々隆盛ニシテ」とある。明治28年(1895)7月に田の浦に設置された藤木藤助翁の顕彰碑の碑文[西 1982: 64]には、平井勝幸が享保4年(1719)に靈跡を訪ねて一字一石の供養宝塔を建てて以来、靈場として知られ、天保六年に慈忍が靈跡を尋ねて城戸に住し、四国靈場をこの地に移し、「衆生済度ノ冥福ヲ禱ラント。自業猶未ダ尽キズ、却テ他ノ障碍ヲ被コト、佛像僅カニ十有八躰ヲ勸請シ、成就アタワズシテ終リ、慈忍ハ故有テ失踪ス」とし、その後、藤木藤助が慈忍の志を継いで靈場を完成させたとある。
- 57) この事績は、明治40年(1907)の『糟屋郡篠栗村々是』に基づいて広まった説である。
- 58) 禁令については十分な史料はない。
- 59) 許可認定の年については決定的な史料はない。ただし、明治27年(1894)に各札所から出された『明細編入願』では一堂宇に数體合祀であったが、明治34年(1901)の桐生源四郎の『福岡県糟屋郡篠栗村新四国八十八箇所明細書』では合祀が解消され、現行配置に近くなっているため、この間に整備がなされたと推定されている[西 1982: 75]。
- 60) 権現、杉平、篝平の三つの小字、94町4反6畝28歩は、古杉や老檜が密生し、水源涵養林としても重視されて

きた。民間に払い下げられることに危機感を抱いた村民たちが、明治37年（1904）5月に福岡県知事あてに出した請願書に、その価値が詳述されている〔『篠栗町誌』1982: 228-229〕。

- 61) 慶長2年以後の縁起類が数本伝わる〔『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』1986: 35-48〕。
- 62) 現在の福岡市東区にある古社で、仲哀天皇と神功皇后を祭神とし、応神天皇と住吉大神を配神とする。明治時代には官幣大社として格式を誇った。
- 63) 上宮（本社）の戊亥（西北）にあつて太祖の神木とされ、^{しめ}七五三杉ともいい、神功皇后の植えた綾杉が繁茂したと伝える。皇后の手折の杉は、小早川秀秋が伐採したが、神罰を恐れて霊木を分ち植えたという。この場所は昔は^{あやすぎ}綾杉原、今は「参り尾」と称する。
- 64) 『筑前糟屋郡分杉山太祖神社縁起』（元禄5年（1693））の記載による（史料2）。
- 65) 江戸時代の大規模な杉の植林は、文化・寛政・天明間に平井清次郎一映、その息子の孫太夫一益父子によるもので、杉苗104万5839本が篠栗の^{あらかた}荒田で行われた。
- 66) 季節は晩秋で雪中のことも多い。数日前に見切と称して「^{おもまかり}御山方」が下見分し、庄屋が随伴して鹿の足跡を調べ、ニタという鹿の寝転んだ跡を調べ、鹿の数量と遊行の経路を策定する。御山方は庄屋に宿泊し、鹿狩り当日は赤の陣羽織を着用する。藩主は夜中に来て、庄屋と石井家に立ち寄って休憩して登山して狩猟を行った。
- 67) 鹿は六月に子を産み、九月には生育して、親鹿と共に里に出て食餌を求めて農作物を荒らす。里芋と小豆がやられた。農民は法螺貝を吹いて鹿を追い、稲糶は鹿の嫌う芒毛の種を選んで耕作した。江戸時代には鹿を銃殺・捕獲すれば重刑となり、概ね鳥流しなので、脅して追う以外に方法はなかった。夜は兎鼓（竹製。丸竹に水槽と杵を取り付け中央軸に支え谷川の水を利用して杵板を打ち発声する）を設けて襲来を防いだ。廃藩置県後は解禁となり、鹿群は数年で捕獲殺戮されて絶滅したという。
- 68) 明治初年までは秣山として使用され、植林で変化した。若杉区有林が大部分を占める。
- 69) 縁起類の原文は、〔『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』1986: 35-58〕に翻刻が収録され、内容は、右谷側は、『筑之前州粕屋郡太祖権現宮記』（慶長2年（1597）亀石坊宥辨謹誌）、『筑前糟屋郡分杉太祖神社縁起』（元禄5年（1692）貝原好古記。文政6年（1823）写本）、『筑前國表糟屋郡太祖山傳記』（江戸時代中期か）、『重修筑前州太祖山石泉寺観音霊像并堂宇記』（元禄17年（1704）。博多明光寺鉄相記）、『筑前國表粕谷郡若杉村太祖山延年寺石泉寺神軀佛像経巻再興記』（宝永4年（1707）。浜貞元記）、佐谷側は『佐谷山建正寺縁起』（永禄4年（1561）。宗祝書。正保元年（1644）、文政二年（1819）書継）、『粕屋郡佐谷村熊野神社記』（天保元年（1830）。長野種正記）、『左谷山院主坊略縁起』（弘化4年（1847）。院主坊貞伯記）などで、地誌や関連史料も収録されている。一方、同時期の『太祖宮伝記』（佐々保の筆写。年代不明）、『分杉村太祖宮之記』（天明5年（1785））、『分杉山太祖宮記』と、『山中立木誌』（天文13年（1586）4月？大正11年（1922）謹誌）があり、いずれも翻刻がある〔合屋1957: 31-35〕。なお、「太祖」は古くは「大祖」と書いた。「糟屋」も「粕屋」と混淆している。
- 70) 現在は北山三社大明神として上宮境内正殿の南の小祠に祀られる。その前に磐座があり、元来はこの石に対する信仰が基本であろう。当山地主神と言いつい、祭神は、思姫命、大国主神、賀茂明神である。黒田藩士の青柳種信編集『筑前國續風土記拾遺』〔青柳（編）^{うきどの}1993〕には大己貴命、宗像大神、加茂明神の三社とある。
- 71) 祝園は下宮の西にある御旅所で、神幸の時の浮殿の跡とされる。馬場園は下宮の西にあり流鏑馬をした場所で、仏像を刻んだ石があつて山の神という。
- 72) 右谷と佐谷の相互関係は西北と東南、寺院の名称についた方位とは異なる。右谷を東北院とした由来は、大宰府の鬼門にあたるためかと推定されるが、やらずれている。
- 73) 宗像大社は天照大神の神勅で御子神の三女神を祀った。祭神は^{たごりひめのかみ}田心姫神、^{たぎつひめのかみ}湍津姫神、^{いちきしまひめのかみ}市杵島姫神で、別名を^{みちぬしのむすめ}道主貴という。
- 74) 『香椎縁起』を引き、神亀5年（728）に太祖権現の唐土からの渡来、香椎宮への上陸、聖母大菩薩との遭遇、香椎宮の楢の分植、若杉山への鎮座、本地を真言祖師の善無畏とすると記すが、香椎宮関係の記述は史料1にはない。意図的に排除した可能性もある。原文は〔『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』1986: 49〕を参照のこと。
- 75) 善無畏は開元4年（716）に長安に到着し、翌年に『^{こくうぞうくもんじほう}虚空蔵求聞持法』を漢訳した。当時、長安にいた道慈は善無畏と出会って教えを受け、密教經典を携えて開元6年（718）に帰国し、大安寺を根拠地として三論宗の法脈を伝えた。求聞持法は、道慈、善議、勤操へと相承され、空海が出会って山林修行を行う契機となった無名の沙門はその流れを汲むといわれる。また、空海は善無畏が訳した『大日経』の詳細を知るために入唐の志を抱いたとされ、善無畏との因縁は深い。

- 76) 『八幡託宣神祇秘抄』に、太祖権現は伊弉諾尊であると記されている。
- 77) 慶長年間（1596～1615）に福岡藩主黒田長政が神道集団の統合策の一つとして、各郡毎に神職による神楽座を組織させ、その時に太祖宮には糟屋郡の総社としての役割をもたせて六神を合祀させ、主神を含めて七社として祀り、明治以後も七社は維持された。
- 78) 神社に奉仕して差配する者を神道風に表現する用語で、実際は社僧であった。
- 79) 高鳥居城については報告書や論文が多い〔『筑前高鳥居城跡』2003〕。それによると史料の初出は宝徳2年（1450）『筑後守護代仁保盛安奉書』という。時代は下るが『河津伝記』（宝永3年（1706））〔『宗像郡誌』下編、1986（1944）に所収〕によれば、永仁元年（1293）鎮西探題として九州に入った北条兼時に従って、長門から筑前に入国した河津弥次郎貞重が小中に居住し、高鳥居城を築いたという。現在の尾仲の奥小路遺跡が館跡と推定されている。下宮西側の肥前谷遺跡に鎌倉時代の集落跡が残り、下宮の成立もこの頃の可能性がある。鎌倉時代は鎮西探題の直属の城として重きをなした。河津氏の退却後、室町時代には大内氏が筑前に勢力を広げて、配下の筑前守護代の居城となり、分国支配の要となった〔佐伯 1980〕。大内氏の家臣の杉氏が、筑前守護代として居城して政務をとった。当時は、杉武運の子の杉豊後守興長と、興長の子の杉豊後守興運の居城であったが、天文20年（1551）に、大内義隆が陶晴賢に討たれると高鳥居城は陶氏の軍勢により落城し、杉興運（興運ともいう）は糟屋浜で自刃した。その後は、大内氏の家臣の杉興行は城に入らず、子の杉弾正忠重、杉権頭連並が在城していたが、天正年間（1573～1592）に、秋月種實によって攻略された。天正14年（1586）に、薩摩の島津氏が筑前に侵入し秋月氏を配下に入れて寶満、岩屋を攻め落とした。しかし、豊臣秀吉の大軍が迫ったので、島津氏は家臣の星野吉実・吉兼に空城の高鳥居城を守らせて撤退した。同年8月25日、立花宗茂（統虎）は立花城を出て星野氏を攻めて落城させた。これによって高鳥居城の歴史は幕を閉じた。若杉山との関連は、延年寺石泉寺が天文6年（1537）に火災にあって仏閣が灰燼になったのを杉弾正忠重が再興したという後世の記録である（石井坊所蔵『重修筑前州太祖山石泉寺観音霊像并堂宇記』元禄17年・1704）。若杉集落の伝承の中に頻りに登場するのも杉弾正の話である。
- 80) 香椎宮は、仲哀天皇8年（200）九月、天皇は神功皇后と共に檀日宮（現古宮の位置）で熊襲と三韓征討の軍議をしていたが、翌年二月に天皇は急に崩御したので、皇后がこの地に祠を建てて天皇の神霊を祀った。450年を経て元正天皇の養老7年（723）に神功皇后の神託があり、九州に勅して課役を起こし、聖武天皇の神亀元年（724）に、仲哀天皇神祠の脇に新たに社殿を造営し皇后の神霊を鎮祭した。以来、両宮を併せて香椎廟と称したという。
- 81) 菅崎宮は延喜21年（921）に醍醐天皇が「敵国降伏」の宸筆を下賜して社殿を建立し、延長元年（923）に穂波郡（現在の嘉穂郡筑穂町）の大分宮から現在の博多の箱崎に遷座して創建されたと伝える。宇佐八幡・石清水八幡と並ぶ三大八幡宮である。歴史的にも相互と深い関係があったという。平家の守護を得たが、鎌倉時代の初めに石清水八幡宮に寄進された。元寇の際の異国降伏祈願で霊験が高まった。
- 82) 若杉の人々は、春と秋の土用近くの戌日に菅崎の浜に「御潮井取り」に行き、明治半ばには出征兵士の武運長久のため毎月朔日と十五日に行って祈願した。
- 83) 菅崎宮が所有する山は、城戸の南方、桐木谷、猪ノ毛谷、山犬葉山、本谷にあるという。
- 84) 須恵の旅石八幡宮は、神功皇后が妊娠中の体を休め「あなわびし」と言ったので「旅石」と名付けたという。
- 85) 善無畏の渡来伝承は、越中西砺波郡西野尻村（現、福神町）の安居寺に止住したと寺伝にある。奈良の『久米寺流記』は『大日経』を持って日本に渡ったと記し、大和高市に止住し、久米寺を訪れたとある。訳経渡来の伝承と関わる。
- 86) 「堀河院百首」の一つ、藤原顕仲の永久四年（1116）の和歌「聞くにさへ涼しくなりぬ若杉の森の梢の秋の調べに」は若杉山を詠んだという。古堂の旧楽園の跡地に大正12年（1923）建立の歌碑があり、「黒田家々令山中立木謹書」と記されている。
- 87) カブトの森公園建設に伴う埋蔵文化財調査によって発見された。下宮の前は三枚田と呼ばれて「三昧」に通じ、カブトの森の名称も謂われがあるのかもしれない。
- 88) 部落の総門の意味だというが、高鳥居城が隆盛を極めた時代の総門という説もある。
- 89) 石井坊文書の中に『太祖権現御祭礼御供米并入目帳』『祭礼下宮膳供帳』『御祭礼崩落銀請取覚』『祭礼覚』など多数の記録がある〔森山 1986: 33〕。
- 90) 史料1、史料2の表記はいずれも「太祖山」であったが、史料3は「太祖山」で、その後の時代の史料は全て後

者に統一されてくる。

- 91) 善無畏はインドで雨を降らしたり日輪を飲むなどの奇跡を起こしていたという（日蓮遺文『善無畏抄』（文永3年（1266）））。
- 92) 元禄16年11月、当時の別当職の石井坊理玄は藩主の命を受けて下宮の改築に着手し、藩の寺社奉行は郡内の三触口大庄屋に命じ仕事をさせた（『太祖下宮碑文』（昭和10年5月））。
- 93) 『筑前國續風土記』の原文に朱書の書入れで「雄言神武帝ト社僧云ヘルウハ甚謂レナシ、用ユヘカラス。都邑考ノ撰者社僧ノ説ヲ用テカケルナリ。曾テ本拠トスヘキナシ」とある。『筑前國續風土記拾遺』には「下宮鳥居の額に神武聖帝と書るハ大なる誤也。如此扁額せしより、郡神往々太祖大神を祭る所改めて、神武天皇と号する所有、これ據なき事也」とあり、郡内にも広まりを見せていたことに批判を加えている。
- 94) 「慶長年中、太守長政公の知を蒙る。竈門山亀石坊宥弁を以て、当山座主職に任ず。これより真言を改宗し天台宗となし、石井坊の号を賜う。」とある〔合屋 1957: 32〕。
- 95) 江戸時代の縁起や由来記は、更に数本残るが内容はほぼ変わらない。『分杉山太祖宮記』〔合屋 1957: 32-33〕では、神功皇后の凱旋祈願を3月11日執行、仁徳天皇の御宇に聖母大神の像を安置し、善無畏の養老年中の来日と神笠嶽の地守の天忍徳尊の祭祀、太祖権現の勧請、八大龍王の祭祀、曼荼羅院造営、養老3年大旱魃時の雨乞い祈願、五社相殿奉祀を記す。聖武天皇御宇に太祖山三蔵院延年寺創建とする。空海来山大同3年、最澄来山は弘仁元年、10月7日は聖忌、貞和3年3月兵火、慶長年中に亀石坊が真言宗を天台宗へ、地主神北山宮社一字に白銀150枚を給うなどと記している。また、『山中立木誌』は若杉山は「太祖山」と明示する。『筑前國續風土記』は社を若杉山太祖大権現社と記し祭日は9月19日と伝える。その他の由来記は、慈覚大師円仁、理源大師聖室、智証大師円珍、常暁、円徹などの天台宗の高僧が来山し、当山が繁栄したと記す。
- 96) 正保元年（1644）に天正期以降のことを院寿坊宗蓮が書き加え、文政2年（1819）に建正寺の院主坊良碩が書きつぎ、巻物から綴紙に書き直した。
- 97) 饒速日命が地上におりに時に、神から授けられたされる十種類の宝のことである。
- 98) 影見の井ともいい、最澄72歳の時に独鈷で掘ったと伝える。若杉山山頂の空海が独鈷で掘って湧き立たせたとされる独鈷水と同様の伝承で、独鈷と得好は音も類似する。
- 99) 亀石坊宥弁の誤記であろう。ただし良辨は東大寺の開山と同名であり特別の意味がある。
- 100) 元の樂園ホテル前方の小祠で金剛頂院下の草叢にあって、定例の祭りはない。
- 101) 作例は全国で15件程度で、所在が西北九州に偏る。宋代から元代にかけて制作され、中国の海商の関与が推定される。宗像大社の作例は建仁元年（1201）施入銘があり13世紀前半の集中して作られた〔井形 2005〕。薩摩塔と呼ばれる須弥壇と壺の造形を組み合わせた塔も12世紀から13世紀に中国で制作され、同様の分布を示す〔井形 2012〕。
- 102) 太平洋戦争の開始にあたり社務所は一万円を海軍省に献金した。また、昭和19年には七日間にわたって石清水社と連動して「米英撃滅祈願祭」を下宮で執行して、鳥居を献納した〔合屋 1957: 43〕。現在でも宮崎八幡宮では祭典を継続している。なお、宗像大社は、同日に、田心姫神を祀る沖ノ島へ船で参拝し、沖津宮で現地大祭を行っている。バルチック艦隊の撃滅は日本近代の軍事史上の記念すべき出来事であり、神事でも重要性を持つ。
- 103) 神功皇后が出産をしたとされる宇美には神武原という地名が残り、古代伝承と結びつける動きは須恵側からもたらされたのかもしれない。
- 104) 篠栗では老松神社、諏訪神社、田中神社、須賀神社で宮座組織が機能していた。田中神社では宮座が現在でも10月15日に厳格に餅つきをして、長老が十二重半に分けて供え餅とし、17日早朝に神殿に供える行事を継続している。全て男性による奉仕である。
- 105) 福岡の宮座に関しては〔佐々木 1993〕に事例研究があり、北部九州の比較考察に〔山口 2010〕がある。
- 106) 平成17年（2005）は合屋猛（代表）、安河内健治、合屋虎之助、三宅倭和夫、三宅厚であった。
- 107) 昭和10年（1935）の下宮改築に言及した文があり、成立はそれ以後と考えられる。原文は「山の中腹に石の大鳥居を、齊明天皇の御代に建立せらる。されば此の地を高鳥居と呼ぶ。鎌倉時代に至り、天野遠景九州探題となり、博多に鎮し、山砦を築き、参詣道を、扇『志きのを』大隈に変更し今の下宮に遙拝殿を建立す」〔合屋 1957: 47〕とある。天野遠景の下宮建立も史実ではない。合屋岳城の創作の可能性が高いが、その後も引用されて使われている。

- 108) 公民館の成立は、昭和21年7月の文部省通達によるもので、社会教育の中核的な役割を果たす公民館の設置が要請され、とりあえず公会堂が転用されて利用されたのである。
- 109) 総建坪57坪、総工費5744円88銭5厘、このうち、1000円は合屋友五郎（医学博士）の寄付であった。敷地100余坪は合屋元素（医師）の無条件永代貸与で（後に寄付）、土地は合屋空次（元素の祖父）の遺産の一部という。附属建物に教員住宅を建設している。
- 110) 「明治維新に於ける糟屋郡宗廟県社太祖宮の雨乞いと鳥居の由緒」（大正13年、1924）による。
- 111) 神嘗祭は伊勢神宮の年間最大の行事で、6月・12月の月次祭つきなみさいと共に重視されている。
- 112) 明治22年（1889）の町村制実施までは、村の範囲が狭く、今の大字が当時の村で、それぞれの産土神（氏神）が祀られ、女性たちは実家の氏神に参拝した。祭日が異なっていて相互に交流しあう楽しみの日であった〔西 1981: 123, 西 1982: 90〕。
- 113) 『筑前國續風土記』の朱書の書入れに、「雄言神武帝ト社僧云ヘルハ甚謂レナシ、用ユヘカラス」として、社僧（石井坊）を批判している〔貝原 1977（1688-1710）〕。『筑前國續風土記拾遺』も、下宮の額に「神武聖皇帝」とあることを批判し、「昔の大祖の号に書改むへきなり」と主張している。扁額は現存する〔青柳（編）1993（1814-64）〕。
- 114) 旧暦2月の亥の日には山の神が田圃に下って田の神となる。これを春亥の子とし、秋の亥の子は刈り上げの祭りいりあげのまつりで田の神は山に帰る。共に餅をついて祝うという〔西 1982: 100〕。お白様と同様の田の神と山の神の交代であるが、亥の子は帰る時が一月ほど繰り上がる。
- 115) 早朝に笹の葉を酒に浸して右手に持ち、田褒めの歌を歌い、酒を田圃に撒きながら回る。荒神様の苗束をたわし代わりにして神仏用の器具を洗い清める。この日に物干し竿も切ってくる〔『篠栗町史 民俗編』1990: 94〕。
- 116) 石井坊文書の『御祈禱控記録』（文政2年～弘化3年）には、自然災害に対しては五穀成就・雨乞・日乞・治風防災・田災鎖除・蝗駆除の祈禱など、個人的には年越・安産・旅中安全・病気平癒・悪病退散・牛馬平癒の祈禱など、世相については国家安泰・人心安堵・調停関東安泰・黒船退散・敵国降伏など、多様な祈禱が記されている〔森山 1986: 33〕。
- 117) 盲僧は、「玄清法印流げんせうほういんりゅう」に属し、本寺は福岡市高宮の成就院で、昭和50年代は150名いたという。篠栗では戦前は田中の花田氏、金出の城戸氏、嘉穂郡大分の井上氏などの盲僧が檀家を回っていた〔西 1982: 94〕。お布施は春は麦一升、秋は米一升とし花米と称した。荒神祓いは正月、五月、九月に行う所も多かった。2007年現在は琵琶で荒神祓いを行う僧侶は、妙音寺の城戸さん一人で、篠栗町内の檀家は20軒、うち萩尾10軒、山王6軒であった。福岡市内にも檀家があるという。12月から5月の農閑期に廻り、田植前に終了した。
- 118) 個人の通過儀礼の祝い事には餅を作る。誕生餅（初誕生）や賀餅（男41歳を初老賀という。紅白餅をつき、近所や友達に配って厄を落とす）などである〔『篠栗町史 民俗編』1990: 56〕。家の祝い事には、おはぎ餅を作る。ぼた餅ともいい、糯米七分、粳米三分で炊いて丸く握り、小豆餡や黄粉をまぶす。
- 119) 篠栗町の主な神社（氏神）の秋祭りは、9月19日は金出の寶満宮（現在は10月19日）と和田八幡宮、10月17日は高田の天神社、田中八幡宮、津波黒の御霊神社、9月29日は尾仲の老松神社（現在は7月25日）である。
- 120) 千手観音の光輪頭上の装飾は破損して、戦時中に盗難にかかった。
- 121) 午後9時頃には上がってくる十七夜の月を拝む。8月17日を観音の縁日とする所は多い。
- 122) 真夜中に上る下弦の月を拝む。通常は勢至菩薩を月の化身とし本尊として祀る。
- 123) 筑前神楽の最古の史料は、『黒崎家波多野文書』記載で、文明8年（1477）「祭礼乃法度」として春日宮の祭りに奉仕した神楽座の記録であるという〔波多野 2003: 20〕。慶長年間（1596～1615）に福岡藩主黒田長政が神道集団の統合策の一つとして、各郡毎に神職による神楽座を組織させ、社家によって維持されてきた。明治維新と共に神職による神楽座は解体されて、氏子に受け継がれたが、御殿神楽として神事への奉納に限定される慣行は維持されてきた。太祖神社への神楽の導入は大正3年（1914）である。
- 124) 旧太宰府天満宮の荘園で、太宰府天満宮文書の『天満宮安楽寺草創日記』にも記載されている。
- 125) 大形舞と小形舞ともいう。舞神楽、面神楽、小神楽から構成されるという言い方もする。
- 126) 13番を舞うのは、中川町の伏見神社の7月の岩戸神楽である（映像資料を作成した）。
- 127) 2008年当時の会長は安河内健治（昭和4年生まれ。80歳）で、合屋敏和（昭和15年生。牛谷に在住）と安河内貞雄（老人クラブ会長、75歳、辻に在住）を合わせて三人が中心であった。合屋敏和は昭和32年の17歳から52年間奉仕している。神社総代は14-15年の間隔で務める。後からは安河内毅、合屋直之、合屋守が入り、後

に合屋敏之加わり、幹部は4-5人いる。

- 128) 最終的に、役割を決めるのは、長老組（神楽組の年長者）で、年長者は3～4人、総代が5人ほどいて、合計7～8人が中核であったが、現在は固定化した。
- 129) 江戸時代には、3月3日雛祭の日、15歳になると庄屋に呼ばれて、男女共に高指の背を刺し血書を記録したという〔合屋 1957: 176〕。成年式と思われるが、意味は不明である。
- 130) 年長者は、中老組、年寄組という報告もある〔西 1982: 147〕。中老組以上は年齢間隔5歳くらいを区切って友達組を作り、終生つきあいが続いたという。
- 131) 明治中期でも篠栗宿の下町の村内婚は52%であった〔西 1982: 147〕。
- 132) 学校教育への理解と家庭教育の促進を目的に、小学校区を単位として組織化された。これとは別に、大正12年には農事小組合に婦人農事組合を付設し、生業にも関与した。
- 133) 若い女性の組織化は進まなかったが、徐々に13歳から結婚までの「娘組」が編成され、娘宿に集まって手仕事をした〔西 1982: 147〕。大正3年には「女子青年団」に関する県訓令が出て、良妻賢母を目的として組織化が要請された。大正6年に「処女会」に改組されると、主婦会と連携して、個人研修や、敬老事業、軍人家族援助などを行った。
- 134) 昭和2年4月に「大日本連合女子青年団」が発足し、全国組織になった。
- 135) 大正13年に「大日本連合青年団」、同14年に「連合青年団」が発足し、組織が全国に広まった。綱領は、「建国の大本を体して、尊皇愛国精神を養い、国の皇運に貢献すべし。正義の道念に基づき、共存諧和の美風を興し、社会の進展を企画すべし。心身の鍛錬を積み、努力奮闘の志気を振り、青年の本領を発揮すべし」とあり、国家奉仕を目的とした。
- 136) 昭和14年には「大日本青年団」となり、昭和14年には「大政翼賛会」の中に組み込まれた。
- 137) 当時の役員は、深沢琢戸、安河内吉太郎、安河内武次、合屋頼郎、安河内豊であった。
- 138) 会長は、初代は安河内吉太郎、その後は合屋頼郎、合屋健一郎、合屋光男、合屋進と続く。正式記録の初代は合屋頼（昭和48年4月-50年3月）で、以後は合屋良一（昭和50年4月-54年3月）、安河内毅（昭和54年4月-昭和60年3月）、安河内静雄（昭和60年4月-平成元年3月）、合屋栄光（平成元年4月-平成7年3月）、合屋猛（平成7年4月-平成11年3月）、合屋虎之助（平成11年4月-平成15年3月）、合屋義道（平成15年4月-平成21年3月）、合屋敏和（平成21年4月-）と続いてきた。
- 139) 古家としては、合屋源吾（孫四郎）があり、岳城山に登る道の脇に居住している。先祖は山上にいた杉一族で、討ち滅ぼされて山を下り、名前を変えたという。
- 140) 下宮の脇の三枚田の近くにある安河内毅の家が元庄屋筋で岳城の落武者の子孫で、400年前に遡る血筋という。ただし、先祖は八女の星野村からきたと石碑には記されている。
- 141) 以前は新宅も入れたが、安河内毅の3期（昭和58年頃）から入れなくなった。元々は50軒だが、48軒、2006年は47軒になり、減少傾向にある。
- 142) 規約の改正は随時行う。最近は、平成5年と平成15年に改正している。
- 143) 昭和44年に神社の地上権の経営を移管したという。
- 144) 鉄塔までの道をつけているので使用料は相対的に安く設定されている。
- 145) 上宮境内は明治初年に三畝歩に縮小され、祭典にも支障が生じた。黒田家の字権現などの払下げに対抗して大正5年に編入出願書をだし、神社の本願地区を境内に編入する許可が大正7年7月15日に下りた〔合屋 1957: 40〕。神社所有地には複雑な経緯がある。
- 146) 所有権の上げ地令による結果と思われる。明治初頭に山林は「水源涵養保安林」に指定されて、熊本営林署の管轄になった。管理人の「官宅」が観音堂の横にあった。その後、黒田家が民間への払下げを行うことになったので反対運動が起こり、明治37年5月に請願書を福岡県知事に出して権利を守った〔『篠栗町誌』1982: 228-229〕。
- 147) 八大龍王窟が通常の呼称で、太祖宮上宮は漠然と上宮や本社と呼ばれていた。
- 148) 同年には町村制が実施されており、地域社会の再編にあたり、改めて地域を経めぐる巡礼の見直しを行ったのかもしれない。
- 149) 明治37年（1904）に草場千代吉が作った『篠栗四国導和讃』には奥之院の名称はないが、若杉山が歌いこまれている。「篠栗四国の霊場は 西の高野と唱え来て 深き因縁の有るぞかし 仰げば尊き霊場ぞ 大師帰朝の

その砌り 錫を此地に止められ 一年あまりの御難行 清浄無比の地を求め 善無畏三蔵法師にも 祈願の山と名も高き 右谷の里にかりの庵 結ばせ給う縁しかや 今に残りし高野字 申すも愚か法の雨 祈りし跡の独結水 隠れ無き世の^{しるし}驗なり」『篠栗町史 民俗編』1990: 137]。当時の民衆の霊峰に寄せる想いが伝わる。同年は日露戦争の開始年で、戦意高揚に巡礼も利用されたかもしれない。

- 150) マイクロウエーブが出来た年のことだという。
- 151) 当初は10月10日の執行であったが、体育の日が移動祭日になったために変更した。
- 152) 平成20年(2009)は水害の影響で奥之院への道が通れなくなったので楽園で行った。
- 153) 虚空蔵を祀っていたという伝承がある。その後、地藏を祀った。
- 154) 合屋^{もくじ}空次が大鐘を寄進したが、徴発で消滅した。
- 155) 佐藤^{まさなり}正成を雇って3年かけて刻作した。
- 156) 中心人物は、石井環、安河内義太、合屋利次、合屋市郎、三宅時次郎などであった。
- 157) 田村亮観が本四国八十八ヶ所の横峯寺から分転したとされ、若杉高野山とする計画もあり構想図も出来たが、住職の藤本師が世話人の了解を得ずに、勝手に高野山に書類を出して若杉の本寺にする行動に出たので、集落の人々から反対されて追放されたという。寺は戦後間もなく退転した。
- 158) 元々神社の土地であった楽園を村の名義に変え、神社の土地の一部の2000坪を金剛頂院名義に変えて登記した。
- 159) 勝泉寺跡の横にあって、本尊は大日如来で、毘沙門天、不動尊、弘法大師、蔵王権現、厄除地藏などを祀る。戦後間もなく退転したという。
- 160) 博多の入乗寺から移したとされる。石井坊に伝わる不動明王像を真似て作ったという。
- 161) 1990年代に入って^{わたつみ}和多都美神社の神霊を^{ひこほ ほ で みのみこと とよたまひめのみこと}勧請した。彦火穗出見尊と豊玉姫尊を祭神とし、寶満山の神を合わせ祀っているという。
- 162) 2010年は、2月13日-19日、3月10日-16日、4月10日-16日、5月10日-16日、6月9日-15日、7月10日-16日であった。8月は盆があるので少し繰り上るといふ。
- 163) 霊場会を遡ると明治31年(1898)7月13日に結成された「金剛会」に遡る。現在の霊場会の発足は昭和29年3月29日で会長1名、副会長1名、常任理事1名、事務局長1名、理事9名、幹事2名で構成され、理事は札所所在地を全部で10区、若杉奥之院を第11区として1名ずつ選出する〔西 1982: 71-72〕。若杉は番号ではなく「奥」の名称で登録され、守堂者氏名は個人名ではなく、「若杉奥之院」として特別扱いである。札所の継続や変更は当会の承認を必要とする。
- 164) 空海が唐からの帰朝後に初めて建立したとされる東長寺を一番札所、帰国後に鎮護国家を祈念した鎮国寺を八十八番札所に定め、百八番は鎮国寺奥之院である。
- 165) 『筑前國續風土記拾遺』〔青柳(編)1993(1814~64)]に記載があり、それ以前の成立と推定される。久山、須恵、志免、宇美など表糟谷郡を廻る巡礼で、第三十三番は筥崎宮で、若杉との歴史的つながりは深い。33ヶ所のうち8ヶ所が篠栗町内にある。
- 166) 別の説では普賢院ともいう。元は古堂にあったとされる。
- 167) 昭和8年12月の調査では53戸で男性165人、女性166人で、戸数は変わらない。昭和32年は64戸で男性176人、女性179人であった〔合屋 1957: 120〕。全体の戸数は増えても、実際の村の運営に携わる戸数は変わらない。
- 168) 養老ヶ滝の名称の出現がいつかは不明だが、江戸時代末期から明治初期頃の様相を伝える『郷社太祖宮境内見取図』の貼紙ではなく、明治31(1898)年の銅版画『大祖神社全景之圖』(図4)にも見当たらないので〔清水 1898〕、それ以後の可能性はある。
- 169) かつて出土した、金環、勾玉、馬具、刃剣は東京国立博物館が保存している。2008年から2009年の福岡大学の発掘調査によれば、形式は円墳で6世紀中頃の築造、7世紀中頃まで墓前祭祀を行っていたという。古代の糟屋の有力者の墓で、被葬者を屯倉の管理者で糟屋評造の春米連廣國(京都妙心寺の日本最古の梵鐘(698)に見える人名)とその親族と推定している〔『長者の隈古墳・若杉今里窯跡』2009〕。
- 170) 明王院が所有する仏像は、高さ五寸の立像で「推古仏」と称し、釈迦如来像とされる。
- 171) 御詠歌組は九州八十八ヶ所百八霊場の巡拝で活躍した。第一番東長寺から第八十八番の鎮国寺へと廻る。
- 172) 納骨堂、霊園、共同墓地などを併設することが多い。
- 173) 霊場会が再編されたのは昭和61年(1986)で、ガイドブックは昭和63年2月24日の発刊である。

- 174) 合屋寛策^{かんさく}の先祖の墓地内の墓で、隣接地を「殿屋敷」という。
- 175) 合屋頼宅^{たのぢ}の「釈教了信士俗名清三郎 寛保元酉年六月二五日」、合屋悟宅の「天明七年 俗名合屋勝治」。合屋頼宅の所有地内の堂宇内の墓碑は「南無阿弥陀仏 五月八日」とあり古墓とされ7月23日の地藏盆の日に隣組が通夜をする。地蔵の可能性はある。
- 176) 寄せ墓には明治大正の文化の遺風も残り、一本松墓地の合屋武城、同友五郎兄弟の墓は典型で、徳山^{みかげいし}御影石や大理石を素材とし、基盤を大村益次郎銅碑に象った。
- 177) 棺桶・棺甕・寝棺の形式が骨箱を主体とする様式に変化した。
- 178) 安河内吉太郎、石井真雄、合屋進、深沢滝次郎、深沢勇、合屋良一、安河内武次、合屋光雄、安河内誠の9名で構成した。
- 179) 請負業者は、鎮西土建糸島郡^{しゅうせんじ}周船寺の吉村静雄、設計者は糟屋郡篠栗満生勲、内部安置の仏像制作の仏師は篠栗町田鍋安之助とした。
- 180) 法要は、専能寺、真光寺、西林寺、金剛頂院、養老寺の住職が行い、秋吉法印も読経に加わった。来賓は、熊谷代議士秘書、大丸デパート宣伝部古賀狂助、合屋武城、合屋友一郎、合屋元素、合屋末千代で、勢門村村長今長谷甚八、西日本新聞・毎日新聞社員、区民の一般に加わった。納骨堂の正面扁額は古賀狂助の彫刻による。
- 181) かつては横峯寺も参加したが、現在は廃寺である。
- 182) 総収入の内訳は、共有林売却代2761510円、余材売却代49055円、加入金303000円、寄付金50000円で、総計3163565円、これに対して支出は3047099円であった。
- 183) 納骨堂が多いのは九州と北海道で、北海道、福岡、熊本、鹿児島で全体の66・3%をしめるという報告がある。行政の補助金による建造とは限らない〔井上 2003: 89〕。
- 184) 辻下^{くじ}にあり、公事掲示板を掲げたことに由来する。
- 185) 岳城山の山腹には「風呂谷^{ふうよのたに}」の地名が残る。
- 186) 数多くの杉の中でも最大とされた「海山木」は、明治28年7月24日の暴風で倒壊した。「大和の大杉」を上回る巨木であった。
- 187) 2013年現在53ヶ所が設定されている。
- 188) 『1998篠栗町総合計画後期基本計画』には、入込客数110万人の数字が出ている(68頁)。ただし、この数字は南蔵院入口の自動統計機によるもので、やや過剰である。最盛期に70軒あった旅館が当時は33軒となり、現在はさらに減少している。

参考文献

- 青柳種信(編)『筑前國續風土記拾遺』1993(原著1814-64)、文献出版、東京。
- 井形 進 2005「宗像大社の宋風獅子とその周辺」『佛教藝術』283号、毎日新聞社、東京。
- 井形 進 2012『薩摩塔の時空—異形の石塔を探る—』花乱社、福岡。
- 井上治代 2003『墓と家族の変容』岩波書店、東京。
- 江上智恵 2012「首羅山遺跡—福岡県糟屋郡久山町白山所在の中世山岳寺院—」『山岳修験』49号、日本山岳修験学会、東京。
- 貝原益軒『筑前國續風土記』1977(原著1688-1710)、文献出版、東京。
- 合屋武城 1957『筑前 若杉郷土誌』私家版、篠栗。
- 五来 重(編) 1984『修験道史料集Ⅱ』(山岳宗教史研究叢書18)名著出版、東京。
- 佐伯弘次 1980「大内氏の筑前守護代」『九州中世史研究』2号、文献出版。東京。
- 佐々木哲哉 1993『福岡の民俗文化』九州大学出版会、福岡。
- 清水吉康 1898『大日本名所圖録・福岡縣之部』大阪大成館、大阪。
- 須永 敬 2000「神功皇后を〈聖母〉として祠る信仰」『宗教研究』325号、日本宗教学会、東京。
- 園田香融 1991「古代仏教における山林修行とその意義」佐野賢治編『虚空蔵信仰』雄山閣。
- 長野 覚 1987『英彦山修験道の歴史地理学的研究』名著出版、東京。
- 西 義助 1981『ささぐり 女の四季』私家版、篠栗。
- 西 義助 1982『ささぐり ぐらしの四季』私家版、篠栗。
- 福田アジオ 1984『日本民俗学方法序説—柳田国男と民俗学—』弘文堂、東京。

- 波多野學 2003『筑前神楽考—遠賀御殿神楽—』溪水社, 広島。
- 原田敏明 1976『村祭と座』中央公論社, 東京。
- 森 弘子 2008『宝満山の環境歴史学的研究』岩田書院, 東京。
- 森山みどり 1986「石井坊文書について」『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』九州歴史資料館, 福岡。
- 八尋和泉 1986「若杉山の仏教遺品」『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』九州歴史資料館, 福岡。
- 山口信枝 2010『宮座の変容と持続—近現代の九州北部における実証的研究—』弦書房, 福岡。
- 米山俊直 1989『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店, 東京。
- 『粕屋町誌』 1992, 粕屋町。
- 『空海と九州のみほとけ』 2006, 福岡市立博物館, 福岡。
- 『篠栗町史 民俗編』 1990, 篠栗町。
- 『篠栗町誌』 1982, 篠栗町。
- 『首羅山遺跡』 2008, 久山町教育委員会。
- 『須恵町誌』 1983, 須恵町。
- 『筑前粕屋 若杉山の仏教遺跡』 1986, 九州歴史資料館, 福岡。
- 『筑前高鳥居城跡』(須恵町文化財報告集第8集) 2003, 須恵町教育委員会。
- 『長者の隈古墳・若杉今里窯跡』 2009, 篠栗町教育委員会。
- 『宗像郡誌』下編(伊東尾四郎編) 1986, 臨川書店(原著1944, 深田千太郎), 京都。